

は何うであらうか。是迄訪ね廻つた醫者の方では、何うかして治してやらんと、手を變へ品を換て投薬をせられたのであつたが、孰れも皆逆も助くることは出来ぬと半途で匙を投げてしまはれた爲、三恒河沙の諸佛の出世のみもとにありしとき、大菩提心おこせども、自力かなはで流轉せりと、自暴自棄するより外ない身となつてをつたのであるに、此度廻り遇ふた大醫に限つて、斯くも明白に御引受け下さる處の辭を聞き、尙ほ其の上に、無量無數の同病者は既に快復して、快樂安穩の身となつて居ると云ふことを承はつてみると、あゝ難有いことである。是れでは自分も此度と云ふ此度は、年來の重病も快復し、今に健康の身となることかどやがて現はれ来るべき健康を豫想して、今の病苦を忘れて歡喜の涙に咽ぶに相違ない、是れが即ち信心歡喜であります。されば宗祖聖人は歡喜の二字を釋して、「歡喜とは、うべきことをえてんすと、かねてさきより歡ぶ心なり」とお説きなされ、此の世にありながら、次生に證得せらるべき滅度の利益を、引寄せて歡ぶとであるとお示しなされてある。所で此の病人が、あゝ助かるかど歡ぶ

處の其の歡び心は、病人自身が造り出したものであるか、或は醫者の方より授けられたるものであるか、それを篤と吟味しなければならぬ。抑も此の歡びの心は、醫者を離れて病苦の手前のみを觀めてをつては、決して生じ来るものではない。此の歡びは、全く醫者の診斷を聞き、其の力を信じ、此の醫者に依つて始めて九死に一生を得るのであると云ふ思ひが、根本となつたのであつて、言ひ換ると、あゝ助かるかどの歡びは、全く醫者の方より授けられたるものであります。當流の信心は、自力の計度に非ずして、他力廻向の大信心であると云ふのは、是れが爲であります。従つて此の信心には、凡夫自力の迷心は、些少も混はつてをらぬ、全く佛心である。されば蓮如上人は、「信心といへる二字をば、まことこのころとよめるなり。まことこのころと云ふは、行者のわろき自力のころにてはたすからず、如來の他力のよきころにてはたすかるがゆへに、まことこのころとはまをすなり」とお示しなされてある。

此處迄お話し申し來ると、前に擧げたる罪消して助かるか、罪消さずして助か

るかとの問答の意味は、忽ち氷解せらるゝ、さきのお辭の中に在る、「一念の信力にて往生さだまるるときは、さはりともならず、さればなき分なり」とあるは、醫者の診断の絶対無限の權威を顯はしたものである。此の一言の中には、當の病人が長き以前より苦める病苦も、亦即今苦んでをる苦患も、尙ほ若し此の名醫に遇はざる時は、將來永く苦まねばならぬ病患も、一時に消滅せしむる權威を有してをるのである。言を換て申すと、病人の苦惱の本源は、醫者の方にて斷絶せしむると云ふ、一大確信を表明したものであります。此時に當つては、病はあつても無きと同然にして、醫藥の前には、病苦は其の頭を上ぐるとは出来なくなる、御文に「過去未來現在の三世の業障一時につみきて」とあるは、此の分際を教へられたるものであつて、即ち法の威力を顯示せられたものであります。此の如く法の手前にては、罪障はあれども無きと同様であり、如何なる惡業も少しも恐るゝことは入らぬが、爾し機の手前即ち私共の方は、何うであるかと云ふと、罪は昔にかはらず存在してをるのであつて、「いのちの娑婆にあらんかぎり、は、つみはつ

きざるなり」とのお示しの通りである。「病人が醫者の診断を聞いて、それでは嬉しい助かりますかと歡んだとて、其の場に一切の病苦をけろりと忘却して、了ふのではない、腹の痛みも、熱の加減も、昔の儘である。従つて其時の歡びは、苦抜した現狀を歡ぶのではなくして、やがて無病息災の身の上になれると云ふことを、即今病苦の中に在りながら歡ぶのである。信心歡喜が當益であるとお示しなされたのは、是が爲である、私共は罪障消滅して、往生するのではなく、不斷煩惱の身ながらにして、而も得涅槃と罪ありながら、障ありながら、死なば直に安樂淨土の聖衆の數に入り、彌陀同體の證を開かせて頂くのであります。抑も此の罪ありながら往生すると云ふことは、聖道門に在つては斷じて許さぬ所であるが、我が淨土他力の一門に於て始めて是れを許すと云ふ所に、大なる權威を發揮してをるのである。彼の聖道門に在つては、此土入聖とて、此の土に在つて佛とならねばならぬのであるから、是非共にあらゆる罪障を消滅しなければならぬ。然るに我が淨土眞宗は、彼土得證とて、彼の安樂淨土に往生して、大涅槃の妙果を

證するものなるが故に、此の世に有らん限りは、煩惱成就の凡夫人であつてよいのである。従つて此の點より觀むる時は、念佛行者であるからとて、何にも別に一般の人々と變つた所があるのではない。爾し其の身の上にて得たる徳分を顧みるときは、有信の人と無信の人の上には、大なる相違はある。無信の人々は死なば忽ち三途の苦惱を受けねばならぬが、有信の者は此の世からして、必ず往生成佛させて頂くと云ふ、最大幸福が得らるゝのであります。

上來醫者と病人との關係に就いて、段々お話し申した如く、一念發得の行者は大醫の下に引取られるのであるから、如何なる病苦に沈んでをつても、それが爲に斃れると云ふことは斷じてない、必ず無病健全の身となれるに相違ない、それが即ち正定聚と云ふ處である。反之、若し此の名醫の下に引取られななんだならば、到底病の苦患を免るゝことが出来ぬのみならず、やがては三途苦難の惡處へ墮在しなければならぬ。加之醫師の許にある者は、假令病が頭を擧げて狂ひ出して、忽ち良藥を投せられて治まつて了ふ徳がある。醫師の下にあらぬ者は、

病は狂ひ次第である。されば信心ある人と、その無い人との間には、日常生活の上にて、大なる相違が認めらるゝ、一方は藥が病に勝ちて、觸光柔軟心多歡喜の大益を蒙り、一方は病の儘に、心常念惡、口常言惡、身常行惡の淺間敷き日送りをしなければならぬ。

抑も醫者は何んの爲に在るか、病人が在るからである、病人の無い處には醫者は入らぬ。逆惡の重病を控へたる私共の存在するが爲に、「無明の大夜をあらはれみて、法身の光輪きはもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現する」と、正覺御成就下されたのである。三毒五欲の煩惱に驅り使はれて、あゝ苦しい御助け下されど、大悲醫王の御袖にひしと縋りまゐらすものであるから、心配するに及ばぬ、今に苦惱の無き身にしてやると、六字の妙藥を投じて攝取し給ふのである。是れを思ふと、私共は、何の彼のと入らないことに心配するには及ばぬ、唯々大悲の親様のお方に縋つて、御名を稱へ奉ればよいのである。蓮如上人が、「つみの沙汰無益なり。たのむ衆生を本とたすけたまふなり」と仰せられた

るは、如何にも御尤もなる御化導であります。

第四四 懈怠と攝取

一。有人(瞻西上人のこゝなり)攝取不捨のこゝはりをしりたきと、雲居寺の阿彌陀に祈誓ありければ、夢想に、阿彌陀の今の人の袖をさらへたまふに、にげれども、しかさらへて、はなしたまはず、攝取せよば、にぐる者をさらへて、なきたまふやうなるこゝと、こゝにて思付たり。是を引言に仰られ候。(第二〇五條)

一。仰に、さきく懈怠することあるも、往生すまじきかき、うたがひなげくことあるものあるべし。しかれども、もはや彌陀如来をひきたびたのみまいらせて、往生決定のちなれば、懈怠おほくなることのおさましや、かゝる懈怠おほくなるものなれども、御たすけは治定なり、ありがたやくさ、よろこぶこゝろな、他力大行の催促なりさまふすき、おほせられさふらふなり。(第十七條)

さきに罪消して助けらるゝか、或は消さずして救はるゝかと云ふことに就いて、お話しした故、それと連絡がありますから、此度は攝取不捨と懈怠との關係に就いての御物語を出したことであります。それで始めの條に「有人」とあるは、其の註にもある通り、瞻西上人のことである。上人には自分の寺の阿彌陀如来に向ひ、攝取の理を知らせて頂き度と祈願し、其の靈告を蒙りて、此の理を氷解した

と云ふ有名な物語がある、それを採られたのが第十七條であります。上人は今より八百年程以前に、京都の八坂の塔のある雲居寺の住僧でありました。此の方に就いては種々の物語が傳はりてをる、其の一二を話してみると、先づ西行法師の撰集抄の中に、次のやうなことが記してある。

東の京雲居寺と云ふ所に、瞻西上人と云人いまそかりける。智行ともにそなはりて、偏に此世をなん思ひ捨て、わくかたなく、後世のいとなみのみにて侍りけり。或時京極の大殿の御所、粟田口になん住給ひける。比冬なりけるなめり、けしかる女の出来侍りて、あまりに寒侍り、いかばかりの物なりとも得給はせよと聞侍れば、さこそ寒かるらめと、あはれにおぼしめして、着給へりける小袖をなん給てけり。さてあくる日又ありし女來て云ふやう、昨日の小袖ははからざるに失て侍り、又給はらんと云ふ。やがて又給てけり。さてあるべきかとおぼす程に、又次日庭ばかり身にまとひて、き物得給へと云時、此聖人心得ずおぼしての給ふ様は、二とは慈悲を以て汝にあたへぬ、さのみは身のちからな

し叶ふまじとの給ふ時、この女きあしくなりて、汝はきはまりて心ちいさかりけり、心ちいさき人のせをば我受すと云て、二の小袖をなげ返して、かきけつがごとくうせ侍。聖人化人の來て、我心をはかり給へりけるこそとて、心の程を自はぢしめて、悔悲み給へりけるぞ、哀にかたじけなく費て侍る。

此の外上人が念佛門に入られたる動機に就いても、又一つの物語があります。それは保安二年五月三日、延暦寺の僧徒が園城寺を焼打ちして、堂塔房舎は云ふに及ばず、佛像經卷迄も悉く灰燼として了ひました。其時一人の寺法師が夢に、衣冠を着けた人が火災の跡を徘徊してをるゆゑ、其方は何者かと尋ぬると、自分新羅明神の眷屬であつて、此の寺を守護せんが爲に來てをる者であると答へた。法師は、寺も佛像も焼け失せたるに、今更守護もあつたものではないと嘲ると、件人は姿をかきけして了ふた。すると今度は直衣を着けた老翁が顯はれ出で、貴房の申すことは道理が立たぬ、自分が遙々新羅から此の地へ來てをるのは、何にも堂塔房舎のやうなものを守護するが爲ではない、たゞ出離生死の

志ある人々を保護せんが爲なり。然るに此度の炎上に依りて、法滅の菩提心を起した僧侶がまたある、此の一事は實に自分の歡びであると申したと思ふと、法師の夢はさめた。

此の夢物語が諸方へ傳はり、それが爲に多くの人々が今更のやうに驚きを立て、菩提心を起しました。雲居寺の瞻西上人も亦其の中の一人でありました。此時から上人は念佛門に歸依して、淨土往生を願はることになつたが、何うも觀經の中に在る、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と云ふ御文の意味が會得出來かぬ、攝取して捨て給はぬとは何ういふ具合のことを云はれたものであらうか、自分は一心一向に阿彌陀佛を專念してをるが而も別に是と云ふ攝取の現益も見えぬ昔嘗て自力の修行をした時に、一事を勧め、一行を修することに、一々其の功德が現はれたるに、初めて念佛門に歸した時も、程經た後の今日の心持も、少しも變りて來ぬ、妄念も起れば、煩惱も狂び出す、こんなことでは困つたことである、何うすれば攝取不捨の難有い身の上となれるであらうかと種々と考へて

みるけれども、何うも善い思案も出て來ぬ。それでどうも本尊の阿彌陀如來に向うて、何うか此の思召の程を教へて頂きたいと祈誓さるゝことゝなつた。所が或夜阿彌陀如來が、上人の衣の袖を執つて、引寄せんとせられた。上人は之れは勿體ないと振放して逃げんとしたが、如來様は決してお放しなさらぬ、それでも身を悶燥くに斷じて、其の手をお放しなさらぬ、爰に上人は何うしたとかと、非常に恐縮して、了はるゝと、不圖眼が醒めた。あたりには何人も居らぬ、自分は正しく佛前に坐つて祈誓して居るのであつた。

此時上人は始めて積日の疑團が氷解した。あゝ是が攝取不捨の思召であるわい、逃ぐる私を逃がし給はぬが攝取の光益である、何にも別に改まつて煩惱を斷じ、妄念を拂ふた、聖者の身の上となるのではなかつた、此の穢れた生地の儘にて、御助けを受くるのである、誠に難有いことであるとして、始めて大安心をせられたと申すことであります。蓮如上人は常々此の物語を引き言として、人に對して攝取不捨の意をお諭しなされました。

次に第十七條を擧げたのは、此の攝取不捨の意義を一層明瞭ならしめんが爲であります。私共は一旦佛願の不思議に乗托する氣になつても、何分にも不斷煩惱の昔の儘の自分であるゆゑ、種々の因縁に牽かれて、佛ども法ども思はず、又稱名念佛さへも申さずして、淺間敷き日送りをする事が屢あります。所が不圖其の懈怠の有様に氣が付くと、あゝ此の様なことでは、逆も淨土往生は覺束なからうと愁嘆するのである。是れに對して上人は、それは入らぬ心配である、既に如來攝取の光明中に攝め取られたる身分となつた者が、何うして再び佛の御慈悲の手より振り放さるゝことがあるものか、其の點に就いては何等の心配も入らぬ斯様な場合には、此の様な淺間敷き身分であるけれども、如來様は御救ひ下さるのであると、此の懈怠の根性の起り來れることに氣付きたるを一大事因縁として、御念佛を歡ぶがよい、而して此の歡ぶ所の御念佛は、取も直さず他力の御催促によつて、浮び出づる大行であるぞと、御懇に御化導なされたものであります。何分にも逃ぐる者を捕へて、放し給はぬお慈悲であるゆゑ、懈怠勝の

身分でありながら、而も往生成佛させて頂くのであります。抑も此の攝取不捨と云ふことは、當流の安心上に於て最も大切なるものである爲、八十通の御文の中には、隨處に其の意義が説かれてあります。先づ一帖目第七通には、「たゞわが身は、十惡五逆五障三從のあさましきものぞとおもひて、ふかく阿彌陀如來は、かゝる機をたすけます御すがたなりとこゝろえまいらせて、ふたごゝろなく彌陀をたのみたてまつりて、たすけたまへとおもふこゝろの一念をこるとき、かたじけなくも如來は八萬四千の光明をはなちて、その身を攝取したまふなり。これを彌陀如來の念佛の行者を攝取したまふといへるは、このこゝなり。攝取不捨といふは、おさめとりてすてたまはずといふこゝろなり」とお示しなされ。又二帖目第四通には、「末代今時の衆生は、たゞ一すぢに彌陀如來をたのみ奉て、餘の佛菩薩等をもならべて信せねども、一心一向に彌陀一佛に歸命する衆生はいかにつみふかくとも、佛の大慈大悲をもて、すくはんとちかひたまひて、大光明をはなちて、その光明のうちにおさめとりましますゆ

へに、このころを經には、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨ときたまへり。されば五道六道といへる惡趣に、すでにおもむくべきみちを、彌陀如來の願力の不思議として、これをふさぎ給ふなり、このいはれをまた經には、横截五惡趣、自然閉ととかれたり。故に如來の誓願を信じて、一念の疑心なき時は、いかに地獄へおちんとおもふとも、彌陀如來の攝取の光明におさめとられまいらせたらん身は、わがはからひにて地獄へもおちずして、極樂にまいるべき身なるがゆへなりと説き。同じく第十三通には、「當流の安心のおもむきをくはしくしらんとおもはんひとは、あながちに智慧才學もいらす、男女貴賤もいらす、たゞ我身はつみふかきあさましきものなりとおもひとりて、かゝる機までもたすけたまへるほどげは、阿彌陀如來ばかりなりとしりて、なにのやうもなく、ひとすぢにこの阿彌陀ほとけの御袖に、ひしとすがりまいらすおもひをなして、後生をたすけたまへど、たのみまうせば、この阿彌陀如來は、ふかくよろこびましまして、その御身より八萬四千のおほきなる光明をはなちて、その光明のなかに、そのひとをお

さめいれをきたまふべし。さればこのころを經には、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨ととかれたりとお述べなされてある。此の外にもまだ幾多の類文があります。

それで凡そ是等の御文を窺うてみるに、攝取不捨と云ふことは、私共が十惡五逆の徒者であるから、大慈大悲の阿彌陀如來様が遣瀨なき御心より、お見捨て給はぬことであると云ふことが知られます。されば若しも私共が大小二乗の聖者方と肩を併べて成佛得道の道行きが出来たものでありましたならば、佛の方にて攝取不捨の御辛勞を下さるには及ばぬ。然るにお互は實の處は、進んで極樂參りをしやうと云ふやうな、殊勝の心掛けをしてをる者ではない、朝から晩まで、惜いとか、欲しいとか、憎いとか、可愛いとかと云ふやうな、淺間敷い根性のみにて、充ち満ちてをる。従つて晝夜二十四時間中、地獄へ行かうか、餓鬼へ後戻りしやうかと、常に三毒五欲の煩惱に牽かれて、恐ろしき計劃のみを企て、をる者であります。斯様な淺間敷性根魂を有つて居る爲、假令一度は大悲の親様

のお袖に縋ると云ふ氣になつても、忽ち其の氣が變りて、元の五道六道へ立ち還らんとする傾きが生ずる。従つて一刻も目放しする事が出来ぬ、それゆゑ攝め取つて捨てぬと云ふ、手厚き大悲心が必要となつたのであります。されば、私共は自分の心が静まつたる時のみに、佛の御慈悲を歡ぶべきものではなく、三毒の煩惱がむらくと起り來つた時とか、或は又懈怠の惡魔に誘はれたる時に、あゝ是れであるから親様がお手放し下さらぬのであると、深く其の照護の利益を感佩して、報恩の御念佛を申さねばなりません。

前にも申した如く、當流の正意は不斷煩惱である爲、私共は八萬四千の煩惱をかゝるながら、往生成佛させて頂くのであり、此の點に就いては、彼の自力聖道の修行者が、一分々々煩惱を斷じて進むのとは、全く其の趣を異にしてをります。爾し茲に一つ考へねばならぬことがある、自力の修行であると、一段々々と進むにつれて、それ々の功德が顯はれて來るゆゑ、是迄來たかと、己れの心に確かなつかまへ所が出来来るが、他力乗托の行者は、煩惱をかゝるながらであるので、些

少でも心の駒が狂ひ出すと、是れでは何うかとの心配が生じないでもない。尤も眞實信心の行者であると、そんなことに氣迷ひすることは無くして、其度毎に大悲の願力を思ひ浮べて、往生一定の歡びに立ち歸るのであるが、未安心の者では、そうは參りかねて、種々といらぬ心配をするのである、即ち第十七條の懈怠の心の起る時の御教化は、之が爲に生じ來つたのであります。

つゝまる所自ら進んで大悲の親様のお膝元へ參らんとする者には、攝取不捨の光益が無くとも、事缺かぬのであるが、煩惱に迷惑されて慕はねばならぬ親様を慕はず我が身の仇となる貪瞋痴の中に没頭して居る者であるゆゑ、大悲の親様は殊に慇懃給ひて、是れでは一刻も目放しすることが出来ぬと、其の御手をのばしてお引寄せ下され、逃げ廻る私共を、さうはさせぬと、しかと取押へて下さるのが、攝取の味ひであります。それゆゑ一旦此の遺瀨なき御慈悲の中へ攝め取らるゝと、我が勝手氣儘にては地獄へも墮つることが出来なくなる、それが即ち前の御文に、「いかに地獄へおちんぞおもふとも、彌陀如來の攝取の光明に、お

さめとられまいらせたらん身は、わがはからひにて地獄へもおちずして、極樂に
まいるべき身なるがゆへなりと、お示しなされたる所である。

攝取不捨の理は、前上の説明にて、一應會得が出来ましたことゝ存じます。
爾し安心上の事は、單に會得が出来たと云ふ分際にては、あゝさうであつたかと
落ち付かれぬものである。如何にもそれであると、大なる決定心が生じなければ、
少しも役立ち申さぬ、お互に我が身くの心中に引き寄せて、大丈夫であるとの
返答が出来らるであらうか。兎もすると、未だ何んだか不安心な所があると云ふ
やうなことであつたら、誠に遺憾至極のことなれば、何處迄も此の道理を會得し
て、假令天が地となることがあらうとも、攝取不捨のお誓ある以上は、我が往生の
一大事に限つて、決して間違ふことはないと云ふ、大安心の境涯に出なければな
りませぬ。斯様な譯合であるからして、蓮如上人は、御文八十通の中、到る處に此
の妙味をば懇説せられたるものと窺はれます。

人の親となつてみると、攝取不捨の妙味は能くわかる。我が子が丁年にもなつ

て獨立すると、大概の事は子供の意志に任せて思ふ様に爲さしむるが、それが未
だ二つや三つの幼児である間は、斷じて爲すが儘に任して置くことは出来ぬ。立
つても居ても附いて廻つて、手を執つて世話を焼いて遣る。子供は頑是ないで、
前後の考へも無く種々の事をする。それが危険でならぬから、親は一刻も目放し
せずして、それ危険と引戻す。是が即ち親の攝取不捨である。此の親の攝取の慈
悲がある爲、子供は危険の場所へ落ちもせずして、成長することが出来るのであ
る。固より子供はそれが危険であるか何うかは、承知してをらぬで、時には泣い
て親の手から放れやうとすることもあるが、而も親の方では斷じて手放しせぬ。
如何に悶燥いた所で、子供の勝手に飛び出すことも出来ずして、安全なる家の内
へ連れて歸られるものである。是れが即ち我が計らひにて地獄へも墮ちずし
て、極樂に參るべき身なるがゆへなりとの仰せの所であります。されば思慮分別
の出来たる一人前の者には、親の此の心配が入らぬが、それが出来てない幼い子
供であるが爲に、親の方ではたゞの一日も忘れる時もなければ、又寸時の目放し

の間もないのである。煩惱成就の凡夫なればこそ、大悲の親様の攝取の光益が入る、私等が若し龍天二菩薩をも凌ぐやうな立派な身分であつたならば、念佛衆生攝取不捨の仰せも入らなにかも知れぬ。

我が子を育て、みると懈怠の心が起るとも、往生一定であるとの味ひは難有く會得せらるゝ。人の親として我が子の勉強を望まぬ者は一人もない。爾し子供はさうく親の望み通り、常住不斷に勉強する者ではない。時には書物を打遣つて遊びに出で、時間の経つのも忘れて横着するともあるが、是れが若し他人の子であつたならば、此の様な横着者は世話も出来ぬと断りもするが、我が子であると決して左様な心は起り来らぬ。横着するにつれて其の行末を案じ、益我が子の上のこのみを中心に配し、内外萬事に深き注意を拂ふやうになるものである。佛がそれである。私共が煩惱の犬を追廻して、懈怠勝ちに流れるものであるから、益私共の上を不便と思召して、厚き大悲をお加へ下さるのである。懈怠勝ちの衆生を捨て給はぬことは、恰も横着の子供を親が一倍に氣にかくる

のと同様であります。

子供にあつても亦さうである。一時は我慢と我情に驅られて親の辭を聞かぬやうなこともあり、又忘れて了ふやうなものもないが、而も亦良心に立ち歸りて、是れでは濟まぬと反省自覺する。而して此の反省の心は、孰れから生じ来たか云ふと、全くさきの横着心が動機となつて居るのである。此の自覺と同時に、是れでは親に心配かけると前に忘れた親の慈悲を思ひ出して、ひとしほ親の之恩が難有く思はるゝものである。懈怠の心の起る時に、それに引立てられて、御慈悲の難有さを思ひ出して、頂き親様なればこそ、斯る者をも御助け下さると、報恩の御念佛を申すのが即ちそれである。

私は親子の情愛を思ふにつけて、益さきの攝取不捨と懈怠の心の起る時の御教訓の程が、一層難有く感佩せられて、何んとしても佛の御助けあることを疑ふことが出来ぬものであります。

第四五 開法上の注意

- 一。いたりてかたきは石なり、至てやはらかなるは水なり。水よく石をうがつ。心源もし徹しなば、菩提の覺道、何事か成ぜざらんといへる古き詞あり。いかに不信なりとも、聽聞を心に入て申さば、御慈悲にて候間、信をうべきなり。只佛法は聽聞にきはまることなりと云々。(第百九十三條)
- 一。人のこゝろのさなり、申されけるに、わがこゝろは、たゞかごに水を入候やうに、佛法の御座敷にては、ありがたくもさうさくも存候が、やがてもその心中になされ候と、申され候所に、前々住上人仰られ候。そのかごを、水につけよ。我身をば法にひで、なくべきよし、仰られ候。萬事信なきによりてわろきなり。善知識のわろきと仰らるゝは、信のなきことなぐせこと、仰せられ候事に候。(第八十九條)
- 一。聽聞を申も、大略我ためとおもはず、やゝもすれば、法文の一をもき、おぼえて、人にうりこゝろあるとの、仰ことにて候。(第八十三條)
- 一。前々住上人、仰られ候。聽聞心に入て申さんと思ふ人はあり、信をさらんすると思ふ人なし、されば極樂はたのしむと聞て、參らんと願ひのぞむ人は、佛にならず。彌陀をたのむ人は、佛になると仰られ候。(第百二十三條)
- 一。さなきはちがき道理、ちかきは遠き道理あり、燈臺本くらしさて、佛法を不斷聽聞申す身は、御用をあひみて、いつものこと、思ひ、法義にをろそかなり。遠く候人は、佛法をき、たく大切

にもさむる心あるなり。佛法は大切にもさむるよりきく者なり。(第百二十九條)

始めの一條に上げられたる古き詞の據は明確には解らぬが、若し其の類文を求むると、無いでもない、即ち水と石とのお話は、遺教經に「汝等比丘、若し勤めて精進すれば、則ち事として難きものなし、是故に汝等まさに勤めて精進すべし。譬へば少水の常に流るれば、則ち能く石を穿つが如し」と云ふ遺教あり。又宗鏡錄には、「眞道を得ざる所以は、誠に心源を識らざるによる。若し心源を識らば、能く邪執を捨て、正道に歸せん」と云ふ一節がある。是等の御文は、今のお辭とは、多少の相違はあるが、而も其の趣意に至つては、殆んど同一であると申してもよい。思ふに上人は、平素此等のお聖教を愛讀なされて、つた爲其の意を汲みて、斯様に仰せられたものかとも思はるゝ。

さて此の一條は、上人が、本願のお謂れが解りかぬると、悔んで居る者に對して、何にもさう悔むには及ばぬ、其の道を以てすれば、屹度明信佛智の明るい所へ出られると、懇切に獲信の道程を教へられたものである。それにつき上人は、先づ

古聖の辭をお引きなされた。世の中で何に堅いと申したとて石に過ぐるものはない、反之て其の最も軟かいものは水である所が不思議なことには其の軟かい水が堅い石に穴を穿つことがあるよ。雨垂れ下の敷石を見るがよい、僅かな點滴の雨水の爲に、大きな窪みを生じてをるのではないか。非情の水にさへ斯様な働きがある、況して心の働きを有つてをるお互であるで、精神一到すれば、佛果菩提の覺られぬ筈はないと、古の聖の仰せられたることもあれば、如何に不信の者と雖も、是を聞き誤つては、萬劫未代取返しつかぬことゝなると云ふ氣になつて、一心込めて聽聞すれば聞かさねばおかぬの佛の御慈悲であるゆゑ、自然と信心が頂かれることゝなる。他力の教ば聽聞に限る、入らぬ心配をして氣を腐すよりも、心を静めて聽聞するがよいと、お示しなされたのが、此の一條の仰せである。

次に第八十九條であるが、こゝにある有人の述懐談は、今も能く聞く所の話である。何うも聽聞してをる間は、如何にも御尤もと難有くいたゞけるも、さて其

の座を下がると、すつかり忘れて元の邪見に立歸つて了ひ、恰も籠で水を汲み取る如く、引上ぐると忽ち空虚となつて了ふと申すことである。是れに對して上人は、其の籠を始終水の中に浸しておけばよい、引上ぐるから悪い。兎も角己れの心の中に眞實の信心が頂かれて居らぬゆゑ、斯様なことにもなるものである。信心さへ頂かれてあれば、決して斯る心配は生じ來るものでないとお諭しなされた。此の一條の中に、「法にひでゝをくべきよし」とあるは、ひでゝは浸の字にて、ひたすと云ふ辭で、即ち法の水の中にひたしておくと云ふことである。

第百二十三條は聽聞をするに就いて、其の眼目を忘れてはならぬぞとのお誡めであります。此の中に「されば極樂はたのしむと聞いて、參らんと願ひのぞむ人は、佛にならず」とあるは、論註に「若し人無上菩提心を發さずして、たゞ彼の國土の受樂無間なるを聞きて樂となし、故に生れんと願ふも、亦まさになんぞ往生を得べからず」とある御文を擧げられたるものであります。一寸聞くと妙に感せられぬでもないが、是も正しく聽聞の要點を示されたるもので、唯單に極樂へ參りたい

と思つて、聽聞しては役立たぬ、彌陀をたのみて御助けにあづかると云ふ所を、疑ひ晴れる迄聽かねばならぬと聞くべき要處をお示しなされたものである。最後の一條は、平素容易に聽聞の出来る者は、兎角にそれを粗略になし、却つて眞の聽聞を致しかぬる。此の點になると、遠方にあつて容易に法義のお座に列らなることの出来る者は、一生懸命で聞く爲に却つて信心を頂くことが出来ること云ふ訓誡であります。

明詮僧都と云ふのは、奈良の元興寺のお方であつて、十歳の時に出家し、法相宗の學問をしてをられたが、至つて魯鈍な性であつた爲、何うしても他の人々のやうに學問が上達せぬ。それが爲に、我ながら愛相が盡き、さる日そつと寺を逃げ出して家に歸らうと決心し、本堂の椽端に腰掛け、つくたくと行く末の事を考へ、深き思案に沈んでをらるゝと、不意に大夕立が爲だした。僧都は見るとはなしに、四邊を觀めらるゝと、雨垂れの點滴の爲に、下の敷石に窪みの出来ること、に氣がついた。所が僧都はそれを觀むると同時に、翻然として悟られた。あゝ

此の頓かい水でさへ、斷へ間なく落ちてをると、堅い石に穴を穿つことが出来る、自分は何かに魯鈍な性であつた所が、勤苦精進すれば學問の上達出来る筈はない、今日唯今まで、逆も學問は出来ると思ふたのは、大いなる誤りであつたと、奮然として、猛省し、それより夜の目も眠らぬ程に勉學せられた爲、日を逐うて上達し、遂には奈良の都にても、屈指の大學者となり、貞觀六年に僧都の位になられたと申すことである。

明詮僧都の立志談は、上人の今の御教化を其儘に事實の上に證明してをる。僧都の傳は元享釋書に記してある、此の書は上人の御出世より餘程以前に著はされたものである、或は上人も御一見なされたかも知れぬ。兎も角、幾等聽聞しても信心が頂かれなないと嘆いて居る人にとつては、誠に善い手本である。點滴能く石を穿つ、「たとひ大千世界に、みたらん火をもすぎゆきて、佛の御名を聞くひとは、ながく不退にかなふなり」のお示しの如き覺悟を以て、一座で解らなければ二座、二座で解らなければ三座と、専心一意に聽聞すれば、屹度疑ひ晴れて明

るい世界へ出られるに相違ない。所が、私は十數年來引き續いてお座に列つて居りますけれども、何うも人様のやうに難有い身の上になれませぬと嘆き悲しむ者があるが、是れは一體何うした譯合であらうかと云ふと、恐らくは其の聴聞の上に、注意のしどころが違つてをるが爲ではなからうか。尤も宿善と云ふこともあるで、一概にさうとも云はれぬが、爾し大概の者は聴聞に就いての注意を誤つてをる爲出るべき所へ出られぬのであります。何故に左様なことを申すかと云ふと、まあ考へてみるがよい、有名な人のお話なら聞くが、名も無い人の法話は聞かぬ、めづらしい方の御座にならば參詣もするが、年が年中顔見合して居る、手次の住持の説教ならば、別に聞き度もないと云ふやうな横着氣がありはせぬか。こんな心掛けで聴聞してをつては、一生聴いた所で、何んの得る處もありはせぬ。

法義のお話は、淨瑠璃や落語を聞くのとは事が違つてをる。其等のものならば、語り手の上手と下手とに依つて、聞くと聞かぬとの區別も立つが、御法のお話

は左様なものではない、我が身の後生の一大事を、此の一座で方をつけること云ふ、大仕事をするのである。而も其事も、話し手の考へを聞くのではない、さらに親鸞めづらしき法をも弘めず、如來の教法を、我れも信じ人にも教へ聞かしむるばかりとの仰せの如く、假令子僧の片言交りの説教にても、一言一句が皆是れ如來の金言である、一座くが如來様の遺瀨なき御化導であると頂かねばならぬ。斯様な心掛けにて聴聞すると、屹度信心はいたゞかれる。人の上に就いて彼れの此れのと區別をつけるやうな心中では、幾等聞いた所で眞の法味は解かるものでない。

私は、聴いても聴いても解らぬと、匙を投げるべきでない。物事には根氣が大切である、一度で解らなければ二度、二度で解らなければ三度と、度を重ねて根氣永く聴かねばならぬ。雨垂水の一滴には、何程の力もないが、それでも年月を重ねて落ちてをる中には、遂には堅き敷石に窪みを生ずることゝなる。信順と疑勝を選ばず、假りにも念佛を口にする限りの者には、一度は此方の深切を聞き

開かさねばおかぬの先手の勅命であるから、如何に強情い根性でも其の中には必ずあゝ難有やの窪みが生じて來るに相違ない。解らぬと云ひつゝ、聽聞してをる一座くが、雨垂水の一滴づゝである、解らぬと嘆く心が其儘に解る窪みを作りつゝあるのである。早天つゞきでは雨垂石に穴の穿たる時はない。されば解らぬとて法義のお座に遠かることは尤もわるい、左様なことをして居ると、本當の解らず屋になり、佛縁厚き所に生れながら心ならずも地獄に落ちねばならぬことゝなる、それゆゑ上人は、「只佛法は聽聞にきはまる」と仰せられたのであります。

聽聞に就いての第一關門は解らぬと云ふことであるが、此の關門は、點滴石を穿つの覺悟を以て向ふ時はやがて其の扉が開かれて、あゝ解り出したと云ふ世界に出られるものであります。所が此の解かり出したの歡びの世界にも、亦一つの鐵門があります。それは如何なる門であるかと云ふと、其の座では解るが其處を下がると直に忘れて元の木阿彌となると云ふ悲しみである。世の中に

は此の鐵門に閉されて、それより前へは一步も進むことが出來ずして、嘆き悲しんで居る者が幾等もある。抑も此の種類の人の言分が、即ち籠の水の愁嘆話であります。是れに對する上人の訓誡は、其の籠を水に浸せの御化導である。是れは誠に面白く又難有い御化導であります。多くの人は法義の物語をば其の座限りのものとして聞くから、斯様な愁嘆に陥るのである。難有い歡びが本堂の中のみに限られ、門を出ると忽ち世間話と變つて了ふから、籠の水となる。御法義は本堂の中に限らるべきものではない、五欲の家に歸つてから、其の効用を實驗しなければならぬ。今日の御化導は何うであるか、彼のお話はこゝである、一々其の思召を胸の煩惱の湧き出る度に試してみねばならぬ。本堂は本堂、家は家と二つに分けるゆる、難有い歡びが其の座限りのものとなる。誰か商店で買物して來ながら、家へ歸つてから押入の中へ打込んで、其れ切り忘れて了ふと云ふやうな愚かなことをするものがあるであらうか。假令一枚の紙でも、一本の針でも、決して左様なことは致さぬ買求めて來る限りは、それ相當に役立

てねば承知せぬ。

佛法は無用の長物ではない、念佛は不用の厄介物ではない。苦しき煩惱に惱まされ重き罪障に打ち厭倦んで居る者に對し、其の悲しみを去り、其の重荷を輕からしむるものであります。されば頂いたる念佛は、隨時隨處に之を取出して、其の功能を實驗し、其の法悦に浴しなければならぬ。所が私共は煩惱成就の凡夫である爲、事に當り縁に觸れるごとに、貪瞋痴の三毒が興盛する、それゆゑ一度や二度位如何に難有き御法を聽聞しても、忽ち其の法悦を失うて了ふ。然しながらそれでも聽聞してをる間は、我が身の淺間敷さが知られて、佛の御慈悲の難有いことも、能く會得が出来る。恰も子供が親に注意されて居る中は、如何にも尤もと云ふことが解るが、親の膝下を離れると、何時とはなしにそれを忘れ、勝手氣儘の横着に流れるが如きである。私共も亦御法の御座に遠ざかると、知らず識らずに我が煩惱に味方することゝなる。子供は親の膝下を離れてはならぬ、忘れ易いお互であるから、出来るだけ世間の用事の差繰して、聽聞の會座に列

なるやうにせなければならぬ。さうさへすれば御慈悲の潤ひは、始終我が身心に浸み渡ることゝなります、その籠を水の中に浸しおけとの御懇なる御教誨は、之が爲に生じたのであります。されば忘れるくと嘆く人々は、その嘆きの時間に、進んで聽聞の法水に浴するに限る、それが嘆きを去る唯一無二の良法であります。

此の外に今一つ注意しなければならぬことは、聽聞を大切にすると云ふことであります。忘れて困ると嘆く位ならば、後戻りして尋ねたらよいではないか。本堂へ參詣して歸りがけに傘を忘れ門を出で、それに氣付くと直に後戻りしてそれを持ち歸る。一本の傘位は有つても無くても別に差したることはない、それでもそれを持を歸る爲に、二町も三町も後戻りする。然るに聞いた下から忘れると嘆きながら後戻りして尋ねもせず、其儘にして了ふ。何うも我が身の後生の一大事よりも、破れ傘の方を大切にする傾きある。左様な心掛であるからして、聞く下しから忘れて了ふのであります。されば忘れるの心配を取除

く爲には、幾度も尋ねると云ふことが肝要であります。

一體此の忘れることを氣にする間は、未だ眞實の信心の得られてをらないのである。信心の頂かれた者ならば、忘れることを氣にするかわりに、それを助縁として、却つて報謝のお念佛が浮び出る。今聞いたことを今忘れるやうな愚かな者を、特に感み給ひて御助け下さるのであると忘れる下から、忽ち御慈悲に立ち歸らして、いたゞくのであつて、それでよいのであります。恰も子供が他人の恩義に對して、一寸でも忘れた所作をしたならば、それきり忘恩の徒として非難さるゝも、それが生みの親であつて、忘れ勝ちであるにも拘はらず、適思ひ出して其の恩徳に對する感謝を表すると、親は心底から歡んで、忘れた罪を宥す爲ひとしは親の大慈悲が頂かるゝが如きであります。それゆゑ上人は、「萬事信なきによりてわろきなり」と仰せられて、ひたすらに信心の天地に出でよ〜と、お勸めなさるゝのであります。

解らぬと忘れるとの關門は、前上の御化導によつて、その門の扉を開くとが出

來ましたが、此の外に今一つ厄介な關門がある。即ち第八十三條の御訓誡がそれであり、聽聞には能く心を入れてはをるが、而もそれが我が身の今生及後生の一大事を承はると云ふのでは無くして、それを覺えて我れ物知り顔に人に誇らんとすることである。此の類の者は、さきの如く解らぬと忘れるとの難關は通過して、能く解かり、能く記憶する、三經七祖の釋文は云ふに及ばず、八通の御文迄も一々暗記してをる。一通りの僧侶では、一寸其の足下にも寄付けぬ程の智慧がある。所が其の學問かぶれの聽聞が邪魔になり、信心を其處除けにし、法文を覺えて、我れ物知りにならうとする邪道に陥るのである。一度此の邪道に足を踏み入れると、我が身の聽聞が鼻にかゝつて、機會もあらばそれを人に賣付けたくてならぬやうになる。斯うなつて來ると、聽聞は既に其の本領を失ひ、百座千座と聞けば聞く程己れの聽き覺えの方が勝れてをるやうな氣がして、兎角に説き手の上げ足が取りたくなつて來る。世の中には此の種類の者は幾等もある。斯様な者は法文の重荷を背負ひながら、極樂には往生せずして、空し

く地獄に墮在する者であります。此の間も大阪のさる道場で大和河内攝津の此の種の信者が會合し、二晝夜に亘つて示談會を開いたことがあつた。所が其の席上で大和の同行と攝津の同行の間に、法文上で一大論議が始まり、何うしても其の解決がつかぬ。甲が是と云へば乙は否と云ひ、乙が彼れと云へば甲は此れと反對し、幾等論じても果しがつきかねて、其の結果とう／＼大和の同行が攝津の同行を殴り倒した爲皆の者が總立ちとなつて、大喧嘩をしたさうである。此の席に列してをつた者が、私の許に訪ね來りて、斯様々々の次第であつたと云ふことを誇り顔に申したゆゑ、私は即座に、それは淺間敷いことであつた、法義の示談が喧嘩の道具に使はれては、佛様は血の涙を零して、お嘆きなされてゐるに相違ないと申すと、同行は爾しなかく種々の法文を知つてをる偉い者でありますと申すゆゑ、私は、それが即ち蓮如上人のお誠めなされた法文賣りの一類である、能く考へてみるがよい、私共は何んの爲に示談するのであるか、我が身の後生の一大事に安心したいの望を達せん爲である。それに何事ぞや法

文沙汰に流れて、己れが聽聞の功を誇らんとするとは、左様の心掛けであるゆゑ、佛法の道場を修羅の争場として了ふのである。龍樹大士は諍論の下には智者は遠離すと仰せられ、宗祖上人は兼實公の邸にて、宗論沙汰の始まらんとする様子を觀められて、直に吉水へ逃げてお歸りなされたに、法然上人は、それでこそ我が使命を恥かしめぬとお譽めなされた、眞の念佛者たる者は、此の心掛けであらねばならぬと申し聞かしたことであつた。思ふに斯様な誤解をしてをる者は、獨り此の同行のみに限らぬ、世の中には兎角此の邊のことを取違へて、信ずると云ふことよりも、覺えること云ふことを主にして、聽聞に耳を傾けるものが多くて、困る、誠に淺間敷きことであります。

一體佛法のことは、聞いて覺えたるのみでは、所詮はない、一言一句にてもそれに含まれたる深意を領解して、自分の心中に篤と會得しなければならぬ。それに就いてよい話がある。阿彌陀經の中に出てをる、周利槃特と云ふ大羅漢は、性得の愚鈍であつて、一句の法文は愚か、一文の意義をも覺えることが出来なかつ

た。大聖釋尊は五百の羅漢をして、日々之れを教へしめられたが三年間かつても、僅かの一偈をも誦することが出来なかつた。世尊は深く感み給ひて、一日槃特を膝下にお呼び寄せになり、「守口攝意身莫犯、如是行者得度世」と云ふ一偈を口授せられた。所が此度は、世尊が如何にも彼れの愚鈍を可哀相に思召す大悲と、一方又槃特が世尊は斯く迄も此の愚な自分を憐愍し給ふことは、如何にも高大なる御恩徳であると、骨髓に徹して感激したる爲、不思議にも心の闇が開けて、此の偈文を暗誦することが出来ました。此時の槃特の歡びは、何に譬へやうもなき程であつた。所が世尊は重ねて、其許の年輩で此の一偈を暗誦することが出来たとて、別に歡ぶ程のことでもない、是れ位のことには誰でも能く承知してゐる、それゆゑ其許は今一步を進めて、此の偈の眞意を特と會得しなければならぬと仰せられて、彼れの爲に「怨」に其の意を説き示めされた。一心を込めて聴聞したる槃特は、此時初めて大法の妙味が諒解せられ、遂に阿羅漢果を證得しました。

祇園精舎の傍に、五百の比丘尼が修行してをる修道院があり、世尊は毎日一人の羅漢を遣はして、道を説かしめてをられた。一日此の講話の番が槃特に當つた。比丘尼共は、今日は愚鈍の槃特が來るとであるで、定めし守口攝意の一偈を話さるに相違なからうで、一つ此の方より説き出して、困らしてあげやうではないかど、あられもない下相談をしました。やがて槃特が参りて高座へ上り、自分は承知の通り至つて魯鈍な者で、此の年になつて漸く一偈を覺えた位であるが、幸にもほゞ其の意を會得することが出来た故、是れから其のお話しをするので、暫く靜聽せられたいと申すと、其時一人の若い比丘尼が、豫ての打合せに従うて、守口攝意と説き出さんとしたるに、不思議にも口が吃つて云ひ出されぬ。一座の者は非常に恐懼し、至心懺悔致しました。槃特は重い口を開き、吃々と偈文の意を解説すると、五百の比丘尼は思ひもよらぬ法悦に浴したと申すことであります。

此事あつてより後のことであるが、一日波斯匿王が世尊を請待せられた。世

尊は槃特を連れて参内されたるに、守門の衛士は槃特に對し、其方のやうな愚鈍の者は、宮中に入るを許さぬとて通して呉れぬ。それが爲、槃特は門外に在つて、世尊の御退出をお待ち申すことゝなつた。所が世尊は殿上にて、水をお使ひなさると、門外から臂が現はれて、世尊に鐵鉢をお渡し申した。王を初め、群臣は此の不思議に驚きて、其の由來をお尋ね申すと、世尊は、之れは槃特の所作でござる。彼れは愚鈍であるからとて、衛士に參殿を差留められた爲、止むを得ず門外に止まつて、斯く致したるなりと、お物語りなされた。王は左様なことであつたかとて、直に槃特を請じて宮中に入らしめらるゝと、其の威容相好は平常と異り、なか／＼にけだかく見上げらる。其處で王は世尊に向ひて、承はるに、槃特は魯鈍にして、逆も他の方々の如き修行は出来ぬと聞及んでをりしに、何うして斯くも得道の身となられしやと、お尋ねなされた。世尊は、左様でござる、凡そ學業は多きを望み申さぬ、假令一偈にも其の意を體得し、之れを實行すれば能く其の効を奏す、槃特はそれでありませぬ。槃特以外の者には、彼れ以上の偈を誦する者は

幾等もあるも、其の實行に至つては、彼れに及ばぬ爲、今に得道の域に達することが出来ぬと仰せられ、同時に次の一偈を誦出せられた。

雖誦千章句義不正、不如一要聞可滅惡、雖誦千言不義、何益、不如一義聞行可度、雖多誦經不解、何益、解一法句行可得道。

此の偈を拜聽し、王を初め、群臣は非常の法益を得たと申すことであります。さてこゝである、智解を第一とする聖道の教でさへも、是れである、況して己れの智慧も才覺も振り捨て、愚痴に歸つて佛にならうとする淨土門に在つては、法文覺え、物知り、聽聞では、何んの益にも立たぬ、私共は五百の比丘尼の後を慕はずして、槃特尊者のお弟子となつて、眞實の信心を頂かねばなりません。

物知り、聽聞の役立たぬことは、前上の通りであります。尙ほ今一つ厄介な鐵門がある、それは極樂疑りである。たゞ一概に極樂の難有いことのみを氣を引かれて、濡手で粟を握まんとするやうな氣で聽聞することである。是れが甚だよろしくない。それに就いては、さきにも申した如く、曇鸞大師が既に嚴しくお

誠めなされあるのみならず、上人も亦されば極樂はたのしむと聞て、參らんと願ひのぞむ人は、佛とならずと仰せられてをる。何故に極樂の受樂無間を聞いて、それを目的として聽聞するのが悪いか。是れに就いては篤とお話し申さねばならぬ。

抑も斯様の聽聞は、元來其の主眼點を聞漏らしてをるのであります。人が大變出世して大金滿家となり、日々の生活にも榮華を極めて居ると云ふことを聽き、自分も一つ其の様な榮華な生活がしてみたいとて、三度の食事は何を食してをるか、身に着ける着物は何んであるか、召使は何人であるか、家財道具は何々であるかと、左様なことを幾等詳細に聽取つた所で、それで自分が直に同様の金滿家となれるものでない。其の人の昔嘗て如何に苦心努力して、今日の身分になつたかと云ふ其の原因を聞匡して、己れも一つ其の人の跡を慕うて、大奮發をしやうと云ふ氣にならねばならぬ。總て物には原因と結果の區別がある、原因を忘れて其の結果のみを望んだ所が、決して獲られるものでない。聽聞も其の通

りであります。一概に極樂の楽しいことのみを氣を取られて、其れに參らして貰ふ元手となる所の信心の方が留守になつてをつては、幾等聽聞した所が決して往生成佛は出来ませぬ。

所が多くの人の中には、此の水際が明かになつてをらぬ。私はもう此の世が厭になりましたで、早く極樂へ參らして頂きたいとか、斯うも苦勞が重なつては、逆も遣れ切れませぬで、淨土のお迎ひがあればよいとか、頓でも無い所に性根をすゑて、法義の物語に耳を傾けるとがある。是れでは困る。お淨土參りは、其の様な横着者が難義の仕事を逃げて、樂な閑暇人とならうとするやうな心掛けでは、出来るものでない、往生の正因は信心一つに限るのであるで、此のお謂れを篤と聽聞しなければならぬ。然るに本堂に寄り集る多くの聽衆の中には、此の分際、の會得出来ぬと見え、極樂の七寶樹林や、八功德水の話しには、耳を傾けて難有がるが、さて改まつて安心上の物語りとなる、何うもお話しがむつかしいとか、解かりかぬるとか、種々不足を申し出す。甚しきになると、左様な込み

入つたお話しが續くと、こくりくと居眠りを始め出す者さへあります。是では年中お座參りをしてをつても、眞實の信心は決して獲得せられませぬ。上人は「彌陀をたのむ人は佛になる」と仰せられて、此のたのむ一念に深き注意を拂うて耳を傾けねば、何の所詮もない。

さて最後に今一つお話しねばならぬのは、「どをきはちかき道理」の御誠めの御化導であります。遠きは遠く、近きは近いと行きさへすれば當前であるが、それが反對に、どをきが近いことゝなると、さつぱり物事が逆に成つて仕舞ひます。早い話しが、一昨年御所の拜觀が許された時、東は北海道、西は九州より、日々に多くの人が京都へ來つて拜觀をして居りましたが、それでは御所の膝下の者は、既に早く拜觀して居るかど云ふと、事實は其の反對で、京都市内の者には、殆んど最終日に近い頃迄、拜觀に參つて居らなんだ者が幾人もありました。何故に左様なことであつたかど云ふに、是は近いからして、何時でも拜觀が出來ると思つてをつたからである、是が即ち近きが遠き道理となる所であります。近い者は何

うしても油斷が生じ易い。法義のこともそれと同様のことであつて、年に一度か二度位より聽聞が出來ぬと云ふ所の者であると、一言半句のお話しにでも決して聞漏さぬやうにと、熱心に聽聞するが、反て朝から晩迄引續きてお座のあるやうな所では、却つて其の聽聞が、兪略に流れ、説き手の善惡を批評したり、話の内容を彼れ此れ云ふたりする、甚しきに至つては、年中一度もお座に參らぬ者さへあります。それと云ふが、近い者は何時でも聽かれると云ふ油斷と、始終に聽いて居る爲、つい慣て了ひ、手ですることを足とするやうになり、其の結果燈臺本暗しの諺の通りに、朝夕にお念佛の聲をきながら、而も信心決定の身とならずして、空しく元の三途に立歸らねばならぬことゝなるのであります。斯様な者こそ、眞に寶の山に入りながら、手を空しくして歸る者と申さねばなりません。

一體何時でも聽けるからと油斷するのは、我が身の無常に氣がつかぬからであります。人の身は老少不定であるのみならず、何時重き病に罹るかも知れぬ

と云ふことに氣が付いてみると決して何時でも聽けるなご申して、一日送りにして置くことは出来るものでない。今日一日達者であるとしたら、此の達者の一日の中に、篤と聽聞して置かねばならぬ、それでないと、明日何んなことが湧出して来るかも知れぬ。上人は佛法には明日ありと思ふべからずと、お誠めなされたことがあるが、實に明日の事は解りませぬで、今日の中に不審の點を暗らしておかねばなりません。此の外屢法縁に遇ふ者は、大切の法義も心配することは入らぬこととなる。此の外屢法縁に遇ふ者は、大切の法義を又かと云うて、危末にする傾きがあります。是れは衷心に他力の信心がいたゝかれてをらぬからである、眞に我が身の今生及後生の一大事に、治まりをつけて頂いたと云ふことが歡ばれて見れば、決して危略の振舞ひは出来るものでない、聞けば聞く程難有くなり、お座が重なれば重なる程嬉しくなるものである。然るに左様にならずして、横着に流れるのは、眞に我が身一人の爲の御苦勞であつたと云ふことに、氣付かぬからであります。燈臺は五里十里の遠方を照すが、

其の本は却つて暗い。寺院は法義の燈臺である、而も其の割合に法悦の念佛の聲が溢れ出ぬと云ふことは、古今を通じての一つの流弊であります。それと云ふが前に申した如く、何時でも聽けるの油斷と慣れて危略にするからとである、誠に勿體ない次第であります。されば此の一條の御誠めに就いては、寺に生活させていたゞく者を初めとし、寺の世話をする人達は、他人の事でない、我が身一人の爲の御教誨であると、深く反省しなければならぬことである。一口に聽聞と云へば、事寔に容易な様であるが、而も愈身を入れて承はらうとすると、なか／＼骨が折れて来る氣を付けて聽聞せぬと、頓でも無い脇道へ飛出して、了ふこととなる。解らぬ分際を通りてみると、忘れるの關門があり、それを過ぎると、物知り法文賣りの邪道があり、唯々お難有いと歡んでると、極樂疑りの失敗を招き、朝から晩まで御法義に浸りづめの出来る身となると、燈臺本暗しの落度を生ずる虞れがあります。眞の聽聞はなか／＼容易なことでない。爾し知らぬ昔ならば、兎も角既に斯く迄で御懇なる御教誨を蒙りたる上は、お

互に我が身の上を反省し、真に聴聞の徳を發揮して、眞實信心の行者とならねばならぬことであります。

第四六 修學上の勸誠

- 一。蓮如上人、幼少なる者には、まづ物をよめと仰られ候。又その後は、いかによむとも、復せすば詮あるべからざる由、仰られ候。ちと物にこゝろもつき候へば、いかに物をよみ、聲をよくよみたるとも、義理をわきまへてこそと仰られ候。その後は、いかに文釋をおぼへたりとも、信がなぐばいたづらごよと仰られ候。(第二一五條)
- 一。聖教を拜申すも、うか／＼とおがみ申すは、その詮なし。蓮如上人は、たゞ聖教をば、くれくれと仰られ候。又百遍これをみれば、義理をのづからうるご申す事もあれば、こゝろをまむべきことなり。聖教は、句面のごとくこゝろうべし、その上にて、師傳口業はあるべきなり。私にして、會釋することしかるべからざる事なり。(第九十條)
- 一。前々住上人へ、南殿にて、存覺、御作分の聖教、ちと不審なる所の候をいかゞとて、筆縁前々住上人へ、御目にかけれられ候へば、仰られ候、名人のせられ候物をば、そのまゝにて置ことなり、これが名譽なりと仰られ候なり。(第一五八條)
- 一。信もなく、大事の聖教を所持の人は、おさなき者に、つるぎをもたせ候様に思召候。その故は、劍は重寶なれども、おさなき者もち候へば、手を切り怪我をするなり。持て能候人は、重寶になるなりと云云。(第二八三條)
- 一。蓮如上人、仰られ候。聖教よみの聖教よまずあり、聖教よまずの聖教よみあり。一文字もしられども、人に聖教をよませ、聽聞させて、信をさらすは、聖教よまずの聖教よみなり。聖教を

ばよめども、眞實によみもせず、法儀もなきは、聖教よみの聖教よますなりと、仰られ候。(第九五條)

一。聖教よみの佛法を申たてたるこそはなく候。尼入道のたぐひの、たうさやありがたやと、申され候なきは、人が信をさるる前々住上人仰られ候由に候。何もしられども、佛の加被力の故に、尼入道などのよるこぼるなきは、人も信をさるなり。聖教をよめども、名聞がさきにたちて、心には法なき故に、人の信用なきなり。(第九六條)

一。聖教を、すきこしらへもちたる人の子孫には、佛法者いでくるものなり。ひまたび佛法をたしなみさふらふひさは、大襟になれども、おごるきやすきなり。(第五七條)

さきに聞法上の注意に就いてお話ししたゆゑ、此度は修學に關する上人の勸誡をお話しすることとし、其の類文を七ヶ條集めました。此の中始め二ヶ條は、上人が聖教拜讀をお勧めなされたものであり、次の二ヶ條は、聖教は拜讀するに當つては、自己の偏見を交へて、先人の苦心を無視すること勿れとの注意であり、其の次の二ヶ條は、聖教に關して深き知識を有したりとも、苟くも衷心に燃ゆるが如き信念なきときは、徒事に屬するとの嚴誡であります。而して最後の一條は、兎にも角にも聖教に親しむ者の家には、佛法者の出づる者なれば、御聖教は成る

べく手離さぬやうに心掛けるがよいとの御懇篤なる訓誡であります。

さて此の七ヶ條の中に多少注意を要するお辭があるで、それを一括して説明します。先づ始めの第二百十五條の中に「復せずば」とあるは、復習することであつて、一度讀み流したのみでは、假令其時は能く覺えてをつても、忘れることがあるから、幾度も繰返して復習せよと仰せられたること。次に「聲をよくよみたる」とも「音讀が如何に達者であつてもと云ふこと。第九十條に「たゞ聖教をばくれとくと仰られ候」とあるは、繰返して讀めとのと。「又百遍これをみれば義理をのづからうる」とあるは、魏略に「讀書百遍而義自見」とある辭を上げられたるもの。「句面のごとくこゝろうべし」とは、自分の見解を交へず、聖教の文面通りに會得せよとの仰せなり。「師傳口業はあるべきなり」とは、先哲の見解があるゆゑ、其の口傳に依つて文の幽意を探るべしとの御注意である。第百五十八條の中に「存覺御作分の聖教」と不審なる」とあるは、存覺上人の御製作なされた六要鈔等の御聖教を指されたものにて、不審の箇條と云ふのは、彼の聖教の中に、願成

就の一念に隠顯の兩義を立て、又不退に就いても顯には彼の士の不退にして隱には此の士の不退であると釋してある。兼縁上人は是等の箇條を擧げて、上人の示教を請はれたのである。第二百八十三條の中に「大事の聖教」とあるは、一宗の要義を闡明せられたる歎異鈔の如き聖教を指されたものである、上人は此の鈔の奥書に、「右斯聖教者爲當流大事聖教也、於無宿善機無左右不可許之者也」と嚴誡せられてをる。第九十六條に、「佛法を申たてたることはなく候」とあるは眞實の佛法を申述べて、人を引立てたることはなしと云ふこと。最後の第五十七條に、「聖教をすきこしらへもちたるひと」とあるは、聖教をすき好みて、常に之を手離さぬ者のことである。

前回にお話し申した聞法上に就いて各種の難關がある如く、聖教を拜讀する上にも亦幾多の注意すべき事柄があります、而してそれに就いて上人の感想をお述べなされたのが前上の七ヶ條である。若夫れ前の聞法五ヶ條を門信徒の方々に對する注意であるとすれば、今此の七ヶ條は正しく僧分の者に對する御

訓示であると窺はねばなりませぬ。

お互に口を開くと、三界の大導師と云ふが、之は一體何う云ふ所に根據を据て、口廣く云ふのであらうか。寺に住んで居るから大導師と云ふのであらうか、されば寺男も亦大導師である。朝夕の勤行をするから、さう云ふのであらうか、それならば五つ六つの子供も亦それである。葬式の弔ひをするからであらうか。佛祖のお給仕をするからであらうか。決して左様ではあるまい。大凡そ是等の事は誰にでも出来ることである、それが出来たからとて、三界の大導師である、と威張れるものでない。大導師たるべき者には、それ相當の責任がある、即ち如來の御代表者となると云ふ點に於て、始めて其の資格が出来てくるのであります。

抑も此の如來の代表者たるべき資格は、何うすれば我が身に備へらるゝかと云ふに、是れには、唯一つの道よりない。即ち古聖賢の遺訓に耳を傾け、其の心血を澂がれたる眞意を體得し、我も亦此等聖賢の方々と同一信味を嗜む身となる

より外はない。所が此等聖賢の方々は、就れも世を去り給ふこと遠くして到底、面授口訣の光榮に浴すことは出来ない。唯夫れ遺教の記されたるものあるが爲に、それを辿ると始あて其の在世の古に遡りて、まのあたり其の德音に接することが出来るものである。聖教はたしかに、私共と古聖賢との間の掛橋となるものなれば、苟くも其の跡を慕はんと欲する者は、是非共に此の掛橋を渡らなければならぬ。

お互に身に法衣を着けたのみにては、決して眞の僧分とは申されぬ。心が如来聖人と一致しなければならぬ。而してそれをするには、前申した如く、御聖教の手引を得なければならぬ。それゆゑ何にも別に一角の學問僧とならなくとも、少くとも故聖人の御聖教には、朝夕相親しみて、常にそれを拜讀すると云ふ心掛けを持たねばならぬ。然るに紺屋の白袴と云ふ風情にて、御聖教を手離してはならぬ身分でありながら、それに親しむことをせず、却つて在家の身である者が、日常之れを奉讀すると云ふやうなことがまゝある。殊に近時に於て其の傾向が

著るしく現はれて来た。各所の講演會などに就いて觀察してみても、僧分よりも在家の者の方に、熱心なる聽講者を見受けるやうなことがある。是は深く注意しなければならぬ。若夫れ此の儘にして歲月が経過したならば、やがては白衣の佛教となり、寺より里への諺の如く、門徒の方へ通うて、御聖教の講義を聞かねばならぬやうのことゝなるかも知れぬ。

所が此の御聖教を拜讀すると云ふことは、事誠に容易のやうであるが、而もなか／＼むづかしい。私の知れる範圍の中に就いて觀察してみると、在學中にはある。是は一概に讀書趣味が無い爲と云ふのでもないが、何分にも家庭と社會との両面に亘つて、各種の用向きが生じ來り、落付いて机の前に坐ることが出来なくなり、それが爲つて知らず識らずの中に讀書に遠ざかり、それが嵩うじて遂にはそれと絶縁することゝなるのである。

されば一旦讀書の門戸を開いた者は、假令一日に一枚にても之を讀むと云ふ

日課を立て、僅かの時間を割きても、其れを實行するやうに心掛けねばならぬ。多少讀書の趣味を解した者でさへ斯様である況して初めからして書籍に親しみのない者は、容易に此の習慣をつけることが出来ぬ。斯様な人に限つて口癖のやうに、何分讀んでも解らぬから仕方がないと云ふ。爾しそれは言ひ譯とはならぬ。此等の方々は上人が始めの二ヶ條に仰せられたる訓誡に従ひ、月日を重ねて行かれたならば、屹度其の意を諒解するやうになれるに相違ない。心血を濺いで書き上げられたる方さへあるに、解らぬからとてそれを讀まぬと云ふことは、甚だ申譯のないことである。讀書百遍義理自ら見ゆで、繰返して讀み行く中には、必ず其の意が會得出来るものである。

讀まねばならぬと云ふことは、能く承知はして居るが、暇がないから仕方がないと云ふことも、亦多くの人から聞く處の辯解である。爾しそれも餘り口廣く云へる辯明でない。お互はそんなに朝から晩まで、駈り廻つてをる者ではない、一日の中に一時間や二時間の暇の取れぬ筈はない。其の僅の時間を能く利用す

べきである。讀書は初めは多少氣がつまるものであるも、日を重ねて其の趣味がついて来ると、三度の食事と同様に之を廢することが出来なくなる。何分にも人を相手として樂むとは、其の相手を得なければそれを樂むことは出来ない。が、讀書はさうでない。己れ一人にて、幾多の人々を相手として樂むことが出来る。哲人の至言を聞くとも出来れば、海外の珍らしい事を知ること出来る。古人と對談するやうの樂みも得らるれば、今人の先輩とも面語することも出来る。されば讀書は單に己れの智識を研くものゝみでない。限りなき悅樂を得ることゝしても、是非共是れに親しむと云ふ習慣を養成したいとであります。何んでもよいで、先づ之を讀むと云ふ癖を作るのである。世には酒に親しむ者もあれば、花に凝る者もある。骨董を好む者もあれば、圍碁を樂む者もある。兎も角人には必ず何か一つの癖がある所が、是等の癖は、何うしても其の子孫に好感化を與へぬ。尤も花屋が花を好み、道具屋が骨董を好むのならば、別に云ひ分もないが、お互はさうでない。何處迄も如來聖人の御代表を勤めねばならぬ責任がある者なれば、

假令自己の習癖であるとしても、子孫に好感化を與へる物を選ばねばならぬ、書物好きの家には、自ら讀書癖の慣習が出来るものであつて、此の慣習は僧分として、百利あつて一害がない。されば解かる解からぬと云ふことは二段のこゝとして、我が子孫の爲にも、讀書に親しむと云ふことを實行しなければならぬ。

以上は是れ未だ讀書趣味を解せられぬ方に對して、敢て讀書の好癖を作られんことを勧めたものであるが、さて此の讀書に就いても、之を善用せぬ時は、思ひも寄らぬ脇道へそれる慮れがある。第二百八十三條と第五百五十八條との御訓誠は、それが爲に生じたものである。一體學問と云ふものは、自己の全力を盡して、先人未發の天地を開拓することを以て、其の本領とするものである。人が斯う云うて居るからとか、既に斯様な確定義があるからとて、左様であるかと云つて、一指を染むることもせず、絶對にそれに服従すると云ふやうなことは、學者として執るべき態度ではない、何處迄も一步を先んずると云ふ覺悟を以てかゝら

なければならぬ。それでないといつても古人の糟粕ばかりを括めて居らなければならぬ、斯くては我が學界は日に月に後退し、決して前進することが無くなる。所が宗教殊に他力淨土の教にあつては、それとは事變り、全く如來聖人の仰せの儘を信じて、自己の信念を確立するものである、此の中に在つては、自己の偏見を交へて、先聖の言議を是非することを許さぬ。従つて學問の天地に在つては、作りて述べてあるが、宗教の天地は、述べて作らずである。一つは暗黒に向つて光明を與へんとし、他は與へられたる光明に依つて、自己の脚痕下の暗黒を照破せんとするものである、彼れと此れとの上に、斯様な大きな相違がある。

然るにお互に讀書の趣味がつき、多少學問の何たるか、知れ出すと、其の創建力を振舞はして、古聖賢の心血を凝がれたる聖教に對しても、何にかど是非の評論が下したくなつて來る、是は學問の力の進んだ證據であつて、大きに喜ぶべきの至りであるが、而も長所が却つて短所となるの風情で、それが爲に何かなしに、先聖の方々が愚かに見え、無理を云はるゝやうに思はれ、讀書すればする程、自己

の信念上に不安と動搖を來し、遂には萬卷の書は讀破したけれども、一個の信念は確定せず、所謂八萬の法藏を知ると云ふことも、後世を知らざる人を愚者とすとの仰せの如くになつて了ふことがある。此等の人は、確かに學問の中毒をした者と申さなければならぬ。されば僧分として學問する者は、先づ其の自己の信念を確立し、其の上にて篤と御聖教を拜見すべきであります。内に信念なくして、外徒に學解に走る時は、唯々自己の偏見と我慢とのみを増長せしめて、尠しも其の御聖教より利益を受くることが出来なくなる。

思ふに聖賢の著書は孰れも其の方々が信仰の堂奥に登られたる道程を記されたるものであるから、時には其の文面上のみを拜してをると、之は無理ではないかと思はるゝやうなことが、無いでもないが、爾し其處が即ち其の特色の發揮せられたる所で、一般凡庸者に在つては、到底夢想することだも出来ない所である。然るに學問中毒に罹つて居る者は、其の理由を知らずして、自己の多少の才學に任せて、之を取捨せんとすることがある。斯くて古聖の折角の苦心の跡も、

此の凡庸者流の取捨に依つて、其の特質を滅却して了ふこととなる。彼の道に明かるき宗匠が苦心して作り上げた茶室を、平凡の主人が之は不便極まるどて、間取りを變へて了ふのと、同一の状態を來すこととなる。上人が兼縁上人に對して、「名人のせられ候物をば、そのまゝにて置くことなり、これが名譽なり」と仰せられたることは、學問氣觸れしたる者の、再思三考すべき訓言であります。

實際學問と云ふものは、爲にもなれば又不爲ともなる、一文字も知らぬ者ならば、仰せの儘を眞受けにして、敢てそれを疑ふこともないが、多少の知識ある者は、さうは參りかね、一から十まで自己の智力を以て判斷せんとする傾きがある。尤も其の智力なるものが、絶對に研き上げられて、佛智見に一致して居るものならば、何等の心配もないが、一知半解の力を以て、勝手な批判を下さんとするのであるから、聖教を毀損するばかりではなく、自己も亦誹謗正法の大罪を犯すやうなことがある。此の點よりすると、半可通の知識のある者よりも、一文不知の者の方が、結句謗法の手傷を負はなくしてよいかも知れぬ。正宗の刀も持手の如

何によつては却つて其の身を傷つく所の兇器となることがある。「信もなくて大事の聖教を所持の人は、おさなき者につるぎをもたせ候様に思召候」とある御述懐は實に御尤もなることゝ窺はるゝ。

それから第九十五條と第九十六條との仰せであります。之は學問僧に對して、前よりも一層手厳しき御訓誡を降されたものである。「聖教よみの聖教よまずあり、聖教よまずの聖教よみあり」とは何たる痛切のお辭であらうか、日常聖教に親しむ者は、寸時も此の訓誡を忘却してはならぬ。前にも申した如く、少々學問すると、兎角に其の學問が鼻の尖にぶらつき、彼れの如き愚物が何を知つてをるものか、自分位書物を読んだ者はないと云ふやうに、何かにつけて自己の學問を表に立て、それが爲に知らず識らずの中に高慢心に流れ、他人に嫌はるゝのみならず、自己も亦天狗の魔道に陥つて了ふことゝなる。既に魔の一類である、それが何うして自信教人信の實効を奏することが出来やうぞ。思ふに信仰と學問とは決して一つでない、如何に宗學上の論議に長じて居つた所が、それで極

樂參りの出来るものでない、淨土往生は何うしても信心一つに限る、されば自分は一巻の聖教を読む力の無き者にも、若し其の身に信心が頂かれてあつたらば、必ず人を導いて同一の信心海に歸入せしむることが出来るものである。世には高座の上から教へた者が佛にならずして、下に坐つて聽聞して居る尼入道の者が、却つて往生の素懷を遂ぐるやうなことがある。

一體御聖教を拜讀するにも、活かして讀むのと、死なして讀むの相違がある、自己の衷心に燃ゆるが如き信心あつて、其の上にて拜讀すると、一字一句の上にも、信仰の光明が輝き渡り、さながらに古聖賢の膝下に侍りて、其の慈訓を聞くが如き感じを生ずるが、反之若し其の信心なき時は、徒に文字章句の詮議立てに終り、讀過したるお聖教の中より、何等の功德も得ることが出来ぬ、これでは假令萬卷の聖教を拜讀しても、孰れも死んだ聖教となつて了ふのである。聖教其の物には死ぬと活きるの區別はないが、此の方に活きた信心がない爲、聖教迄が死んで了ふことゝなる。されば佛を殺し祖を殺すか、佛を活かし祖を活かすかの

機微は、一つにかゝつて拜讀者の心掛けの如何にある深く注意しなければならぬことである。

抑も私共が御聖教を拜讀するのは、他の學問とは異なりて、決して之を以て世に立たうとか、或は一代の學者にならうとかと云ふやうなことを目的とするのではない。尤も修學の功を積めば、世間からも尊まれて、それ相當の待遇も受けるが、爾しそれは唯道程上の道草であつて、決して終局の目的ではない。誤つて己れは講師になる爲に學問しやうとか、博士になる爲に勉強しやうとかと云ふやうなる心掛けを懷いたならば、其時既に一步を魔道へ踏み入れて居るのである。加之是に由つて自己の名譽を得んとか、或は利養の資に供せんとかとの志があつたならば、確かに聖教を抱いて墮地獄の責罰を蒙らねばならぬ。修學は信仰の月を教ふる指である、指頭に着眼して信念の月を忘却してはならぬ。此の點に就いては、古聖賢の方々は、孰れも懇切なる注意を致してをられる、左に其の一二を挙げてみやう。

あるとき、かご負かきおひて、聖光房聖人の御前へまいりて、本國戀慕のこゝろざしあるによりて、鎮西下向つかまつるべし、いとまたまはるべしとまふす。すなはち御前をまかりたちて出門す。聖人のたまはく、あたら修行者が、もどりをきらでゆくはとよど。その御こゑはるかにみゝにいりけるにや、たちかへりまふしていはく、聖光は出家得度してとしひさし、しかるにもとゞりをきらぬよしおほせをかうふる、もとも不審、このおほせ耳にとゞまるによりてみちをゆくあたはず、ことの次第をうけたまはりわきまへんがために、かへりまいれりと云々。そのとき聖人のたまはく、法師にはみつのもとゞりあり、いはゆる勝他、利養名聞これなり。この三箇年のあひだ、源空がのぶるところの法門をしるしあつめて隨身す、本國にくだりて人をかろんじしたがへんとす、これ勝他にあらずや。それにつけて、よき學生といはれんとおもふ、これ名聞をねがふところなり。これによりて、檀越をのぞむと、所詮利養のためなり。このみつのもとゞりをそりすてすば、法師とはいひがたし、よてさまふしつる

なりと云々。そのとき聖光房改悔のいろをあらはして、負のそこにおさむるところの抄物どもをとりいで、皆やきすて、またいとまをまふしていぬ。これは法然聖人が聖光上人に對して御訓誡なされたる要旨であつて、口傳鈔の中に記されてある。思ふに學問の要は是でなければならぬ。従つて此の御訓誡は、獨り聖光上人が承はらるゝものでなくして、即今御聖教を手にする私共も亦誠心誠意に此の御訓誡を傾聴しなければならぬことである。此の外横川の源信僧都の上にも、是れと同様の物語がある。僧都が十五歳の時村上天皇の命に依り、宮中に參内して稱讚淨土經を講せられたるに、歡感なゝめならずして直に僧都に叙し、且つ多くの布施物を下賜せられた。僧都は嬉しさの餘り、其の御下賜物をば母御の許に送りて、共に喜びを分たうとせられたるに、僧都の母御はなかくの賢夫人であつて、是れでは我が子が名利の僧と成り了るかも知れぬと案じられ、其の送られたる御下賜物をば一つも受取らず、且つ御身を出家せしめたるは、決して名聞利養を得さしめんとての爲でない、亡き父の菩提を弔

ひ、此の母を迷ひの海より救ひ上げしめんが爲である。然るに今から斯様なことに氣を引かるゝと、初志に反して世間尋常の僧となりおはるべしとの意を認め、添ふるに後の世を渡す橋とぞ思ひしに世をわたる僧となるぞかなしきの一首を以てせられた。僧都は母の嚴誡に接し、感激措く能はず、爾來努めて世の名利を離れ、ひたすら眞の道に心を寄せらるゝことゝなつた。

笠置の解脱上人と云へば、淨土門彈劾の文を草した人として有名な方である、法相宗の奥義を窮め、名聲世に傳はり、人の歸依も淺からざりしが、或時上人情々思はるゝやうは、我れは我が無上菩提の爲にこそ學びけれ、人の歸依に預からんが爲に學びたるに非ず、今日の如き境遇は久しく留まるべき所に非ずとて、名利を厭ひて世を避けられた。其時日頃左右を離さず拜讀せられてあつたお聖教の表紙の裏に、「これをこそまことの道と思ひしになほ世を渡る橋となりけれ」と云ふ一首の述懐を書き記されたと申すことである。此の如く法然聖人と云はず、源信僧都と云はず、解脱上人に至る迄、修學の上につきて心を用ゐ給ふと實

に細心周到である。是でなければ折角に聖教に親しむ身となつても、世の所謂學問僧となり了るものである。されば蓮如上人が、「聖教はよめども名聞がさきにたちて、心には法なき故に、人の信用なきなり」と仰せらるゝのは、誠に故あることとであります。要するに聖教を活かして讀むも、又死なして讀むも、皆其の人の心掛け一つに依りて定まるものである。

今日の如く内外各種の學術の道が開け來れる世には、私は僧分であるからとて、他の學科に耳を傾けずして通ふことは出來ない、それで内外各科の學問に心を入れてをると、知らず識らずの中に、自己の信念の根柢を傾覆せんとするやうなことがある。私は時々修學の人々より、信仰は大切であるが、爾し自分が今日まで學び來れる科學と調和が出來ぬから、何うしてもそれを信ずることが出來ないと云ふ嘆聲を聞くことがある。而して此の場合にはそれ等の人々はいつも科學を先きに立て、宗教上の信念を後にせんとする嫌ひがある。私はそれは甚だよろしくないと思ふ。一體科學は日に月に其の說を異にして行くも

のであつて、今日元素と断定したるものも、明日はそれではなくして複合せる物質であつたと變化することがある。又科學は現象界の一部分に就いて研究するものであるが、其の全體と本源に關しては斷じてそれを知悉することは出來ぬ。例へば人の身體は斯様々々の物質から出來てをると云ふことは、科學の知識にても一應は辯明することも出來るが、爾し一步を進めて何故に斯く集合せねばならぬかとの説明は出來ぬ。換言すれば既に出來上りたる事物の部分に就いては、之を説明することも出來るが、何故に斯く出來上つて來たかの範圍内に立ち入ることは出來ない。従つて其の權威の及ぶ所は甚だ狭少なものである。

無限の宇宙間の事柄をば單に此の如き狭き範圍内に限られたる科學上の知識のみに依りて、斷定し去らんとするのは、餘りに大膽過ぎることである。廣大無邊の宇宙間には、科學の世界以外に、まだ一手の届かぬ幾多の廣き世界が存在してをる。而して其處に宗教の天地がある。されば私は科學は科學として尊重すると共に、我が科學の力の及ばぬ所に對しては、全く宗教の教示を仰ぐこと

してをる。斯くて科學の知識によりて、自己の信仰心を動搖さるゝやうなことは尠しもない。

知識と信仰の衝突も恐ろしいが、それよりも恐るべきは名利の心である。此の心一度起り來る時は、忽ち信仰の權威を失墜する事となる。されば何處迄も世を渡る手段として、我が宗教と信仰とを利用しないやうに注意しなければならぬ。名利の心が尠しでも我が心中に起り來つたならば、自信の一部分は即座に其の形を隠して了ふこととなる。斯くては決して教人信の實を擧ぐるとは出來ないこととなる。お互に御聖教を拜讀せずして、古聖賢の眞意を窺ひ知ること出來ぬが、而も之を拜讀するに當つて、慎思熟慮しないと、忽ちに邪道に陥り、折角の御聖教を手にながら、それが爲に信仰の天地に出でられないのみならず、甚しきに至つては、謗法の大罪を犯すやうなことが始まつて來る。讀むがよいか、讀まぬがよいか、一知半解の知識程恐ろしいものは、世の中に又と無い。然れども花好きの家には、自ら花を好むの子弟が出來る如く、聖教をすき好む者の中

には、自ら聖教に親しむ子弟の出來るものであるから、前上の諸問題の如きは別問題として、兎も角も日常御聖教に親しむ習慣は作りたいことである。それが即ち第五十七條の訓誡の生じた所以であります。

第四七 赤尾の道宗

一。あかをの道宗、まふされさふらふ。一日のたしなみには、あさのつさめにかゝり、さじさたしなめ。一月のたしなみには、ちかきさころ、御開山様の御座候ところへ、まいるべしとたしなむべし。一年のたしなみには、御本寺へまいるべしと、たしなむべしと云云。これを圓如様、きこしめしたよばれ、よくまふしたるさおほせられさふらふ。(第四五條)

一。道宗は、たゞ一ツ御詞を、いつも聽聞申が、初たるやうに難有由申され候。(第一三一條)

一。善知識の仰成さも、成まじきなんと思ふは、大なるあさましきことなり。なにとる事なりとも、仰ならば、なるべきと存すべし。此凡夫の身が、佛になるうへは、さてなるまじきと存することあるべきか。然れば道宗、近江の湖を一人してうめよと仰候とも、長りたると申べく候。仰にて候はゞ、ならぬことあるべきかと被申候。(第一九二條)

一。道宗、前々住上人へ、御文申され候へば、仰られ候。文はさりおとし候事も候ほごに、たゞ心に信をだにもさり候へば、おとし候はぬよし、仰られ候し。又あくる年あそばされて、下され候。(第二八一條)

あかをの道宗とは、越中赤尾の彌七と云ふ同行のことで、上人の教化を歡こぶ所の無二の念佛者である。第四十五條は此の道宗の自警文であります。其中に「ちかきところ、御開山様の御座候」ところへとあるは、宗祖聖人の御影のあ

る所へ參詣すると云ふことにて、當時は今日の如く、到る處の寺院に、聖人の尊影が奉安せられてなかつた。「御本寺」とは御本廟のことであり、「圓如様」とは實如上人の御嫡男にして、蓮如上人の御孫に當らせられ、御文五帖一部を編集なされた方である。次に第三百三十一條は、道宗の聞法心の深厚なることを示す。道宗は「たゞ一ツ御詞を」とて、凡夫の往生の極意を顯示せられたる、一念歸命のおいはれを聽聞すると、何時も初事を承はるやうに歡んだと申すことである。第三百九十三條は、上人がお弟子方に對し、警策を加へられたる御教誨であつて、其中に道宗が、善知識の仰せとあらば、近江の湖を一人にて埋めでもすると申した絶對服従の美德を擧げ、斯くあつてこそ眞の念佛者と申すべきである、徒に自分勝手の理窟を述べて、仰せに對して彼れ此れ云ふが如き心中にては、逆も眞實信心の行者となることは出来ぬと、厳しくお誡めなされたものであります。最後の第二百八十一條は、道宗が上人に對し、御文をお認め下されたしと願ひ出た時、書いたものは失ふともあるで、それよりも落しも失へもせぬ、信心を頂きお

くがよいとお示しなされたるお辭であります。
 道宗に關する重なる物語として、御一代開書に記してあるのは、前條の四ヶ條
 であります。條項は少いけれども、而も道宗が如何なる人物であつたかと云ふ
 ことは、是れだけで充分會得することが出来る。道宗は我が身の後生の一大事
 と云ふことに就いては、心の奥底から心配してをつた、それであるから一念歸命
 のおいはれを聽聞すると、何時でも初事のやうに歡んだ眞實開法に心を傾くる
 者である、誰でも是でなければならぬ。彼の徒に難解の法文を聽きたがつ
 たり、珍らしき物語を歡んだりするやうな者は、眞の開法に心を傾けてをる者で
 ない、極樂參りは物知り分際では出来ぬ。又古今の人が未だ嘗て説いたことの
 ない法文があつて、それを知らねば成佛が出来ぬと云ふのでもない。凡夫往生
 のいわれは、今も昔も變らぬ一念歸命の仰せに至極する。其れであるに談義が
 進んで此處に至ると、復かと言はぬばかりに他を顧みると云ふ様な輩は、逆も聞
 其名號信心歡喜の妙味の解かる者ではない。聞くは唯一つである、二つも三つ

も聞かねばならぬことがあつたら、それこそ極樂の道が二三に別れて、同一念佛
 無別道故の金言が虚妄となつて了ふ。一念歸命の仰せを何時も初事のやうに
 歡んだ道宗は、此の極意を會得し、凡夫往生の正因を手に入れてをつたのである、
 それでなければ斯様に歡ばれるものでない。考へてみれば解かる、年來望みを
 かけてをつた物が、手に入つたとしてみると、何時取出してみても、嬉しくてなら
 ぬ、餘りに望みをかけてをらぬ物である、假令人から貰うて來ても、之は難有い
 と歡ぶ氣が湧いて來ぬ。一念歸命の理を唯尋常事のやうに思うて耳を傾け
 ぬ者は、眞に往生成佛と云ふことを欲望してをらぬ者である、それゆゑ唯徒に
 物珍らしき法義にのみ奔りて、肝心の要處ははづれて了ひ、幾等聽聞しても往生
 の一大事に安心が出来ないのである。斯様な心掛けの人々は、是非此の道宗の
 心掛けを手本として、我が身の誤れる心中を匡さなければなりません。
 實を云ふと、嗜みも報謝も眞の念佛者でなければ出来ぬものでない、厚信なる
 こと道宗の如き身となる、如何なることにても、如來聖人の仰せが眞受けに出

來る。近江の湖を埋めよと云はれてもはいとお受けしてそれに取りかゝるとは、何と云ふ素直な心掛けであらうか。是でなければ一心正念にして直に來れの勅命が眞受に出來ぬ。既に此の心掛けであるから、一日一月一年に亘つて此の嗜みが最も身輕に出來たのである。如何に善知識の仰せであるからとて、湖を埋めよと云ふやうな無理なことがあるべきかと反抗するやうな氣であつたら、逆も仰せの儘に打任すと云ふ、美しき信者となればせぬ。一流の正意は唯素直に聽聞するに限る。己れの考へを先きに立て、それに合さうと云ふが如き氣であつては、幾等聽聞した所が、疑情の關の晴るゝ時はない。されば古と云はず、今と云はず、眞に御法義を歡んだ者は、如來聖人の仰せとあらば假令天を地と云はれても、はいとお受けをしたものであります。

嘗てお話し申した如く、顯智房は宗祖聖人の片腕と成り、聖人のお助けをした方であるが、或時聖人に對し、途中で暴風に出遇ひ、難船しかけましたと云ふことを申したるに、聖人はそれは危険なことであつた、大事な身の上であるで、萬一の

事があつてはならぬから、今後は船には乗らぬがよいと申された。所がそれより後は、如何なる場合にも船には乗らなかつたと申すことである。道宗が湖を埋めると申したのと同一である。而して斯様な心掛けは、單に此の二人のみに限らぬ、宗祖聖人も亦其の通りであつた、聖人は法然聖人の仰せに對しては、一言の違背もなかつた、一親鸞にをきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうむりて、信するほかに別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たゞひ法然聖人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふと仰せられて、其の師聖人のお辭に對し、一言の疑惑も挿み給はず、云はるゝが儘に素直にお受けなされたのである。先聖後賢皆其の軌を一にしてをる、私共も亦此の心掛けを以て、如來聖人の仰せを承はらなければならぬ。

此の外道宗の物語として、道宗二十一ヶ條と云ふものがある、之は道宗が文龜

元年十二月二十四日に、自己の心中に思ひ浮んだ感想を一點がきに書いたものであります。蓮如上人は明應八年に御往生なされたのであるから、道宗が此の思ひ出を書き記したのは、それから三年後のことである。彼れは一代の間、眞俗二諦につけて御懇なる御教化を蒙りたる上人にお別れ申し、今より以後は誰一人として自分の誤りを匡して呉れる者がない、されば油断をすると後生の一大事に取りはづしをするかも知れぬで、我れと我が心を引締めて參らねばならぬと、感じ年も暮に差迫つた極月の末に、北國の寒空に吹雪の聲に身も心も凍らしながら、老眼を拭ひて思ひの有りだけを筆に上せたのである。讀んでみると如何にも飾り氣の無き老信者が、屹々と自己の所信を物語つてをる様子が知られ、今にも素璞の道宗が眼前に現はれて、私は斯うも考へてをると言出しはせぬかと思はるゝ程である。それであるで、苟くも道宗の全人格を知らんと欲する者は、是非共之を見逃すことが出来ぬ。さればその二十一ヶ條とは如何なるものであるか、是からそれをお話する。

第一。後生の一大事、命のあらん限りは油断有間敷事。

此れが最初の一ヶ條である。劈頭第一に後生の一大事に油断すなど警誡してをる、如何にも尤もなることである。私共は兎角に油断勝ちに流れる何しろ私共の周圍には種々の厄介なる事情が纏綿し、夜も晝も其の方へ氣を引かれて、御催促のない法義のことなどは、いつともなく油断に流れて了ふ傾きがある。それであるで、蓮如上人も、「ことに在家の身は、世路につけ又子孫なんどの事によそへても、たゞ今生にのみふけりて、これほどはやめにみえて、あだなる人間界の老少不定のさかひとしりながら、たゞいま三途八難にしづまん事をば、つゆちりほども心にかけてすして、いたづらにあかしくらすは、これつねの人のならひなり、あさましといふもおろかなり」とお誡めなされたことがある。老後の道宗は自分の日常の所作を顧みると、今日も子供等の爲、明日も家事向きの爲と、我が氣を使ひ、我が心を苦ましむる事柄は、唯夫れ流轉輪廻の種蒔き而已であるで、中夜窃に自己の一身を反省すると、あゝ又思はず知らず後生の一大事を油断してを

つたわいと今更のやうに驚きが立ち、それ故二十四日の寒む空に机に向つて氷筆をかみくだいた時、先づ此の事が浮び出たのであらう。

思ふに後生は大抵油断して仕損ずる、今日解らねば又明日聽聞せんと高をくゝり、生命の上には待て暫しがないにも拘はらず、孰れ其の中に聽くべきである、先きへくと押し遣る。所が幾日経つても其の中と云ふ日は來ぬ、是から少しは聽いてみやうかと思ふ時分には、耳は遠くなり、目は霞み、腰は痛みて、遠路が出來兼ね、其の爲折角佛法有縁の地に生れながら、御内佛の前から地獄へ墮ちて行かねばならぬことゝなるのであります。尤も浮世の事柄も大事ではあるが、爾し之には随分自分に代りて心配して呉れる者もある、一ヶ月の中に二日や三日手を抜いて法義の庭に列つた所で、それが爲に日送りが出来ぬと云ふやうなことはない。然るに我が身の後生の一大事となる、親が子に代ることも出來ねば、妻が夫の名代に立つことも出來ぬ、何處迄も自分獨りで治まりを付けねばならぬ。加之お互の生命は今日あつても明日は無いかも知れぬ、誠に不定なも

のである、従つて彼れと此れとは全く大小輕重を異にしてをる。然るに重き一大事の出離の問題には、兎角に油断勝ちとなり、輕き人事の繁雜に没頭したることとは、實に本末輕重を誤れるの甚しきと申さなければならぬ。人生再び廻り來らず、佛法重ねて値遇し難し、されば遇ふた時に重荷を下ろせ、今此の一生に於て、油断なく聞法獲信して、超證涅槃の大仕事を仕遂げておかねばならぬ、油断大敵とは、常に浮世の事柄のみに限らぬ、佛法聽聞の上にも、確かに此の強敵がある。道宗が筆を執つて、先づ第一に此の一條を書き記したのは、それが爲であります。

第二。佛法より外に心にふかく入ること候ば、淺間敷存じ候て、すなはちひるがへすべき事。

後生の一大事に油断を爲まいと思ふ者は、行住坐臥に己れの心の坐り場所を佛法の上にて定めておくことが肝要である。蓮如上人は、佛法を主人とし、世間を客人とせよとお示しなされたことがある、お互にさうさへして居つたならば、油

斷の心は生じはせぬ。所が此の主人と客人とが位置を變へるで困る、日常佛祖のお給仕をする身でありながら、本堂の事は倉略に流れて、書院や庫裡の事のみを氣を奪はれ、佛前のお華は枯れても、それには氣付かずして庭の花壇に浮身をやつす、道宗は佛法より外にふかく心を入れなど申してをる。されば私共は若し斯様な本末顛倒の心が生じ來りて、佛祖を疎外して人事に氣を奪はるやうなことがある時は、此の第二條の訓誡を思ひ浮べて、深く我が身の淺間敷きことを耻ぢ入らねばならぬ。

尤も佛法以外に心を入れなど申した所で、何にも聖道自力の修行者の如く、捨家棄欲の嚴肅なる行ひをせよと云ふのではない、心の据る所を佛法の座敷に置き、其の上にて世間萬般の業務にもたづさはつて、人生の行事を樂めばよい、さうさへすれば資生産業、孰れ一つとして實相とならざることはない。一體物に本來の善惡があるのではなく、心にそれがあつた同一の藥品にても使用の如何によりて、藥ともなれば又毒ともなる。嘗て蓮如上人が飯貝の本善寺へ御成りの時

金剛山の景色を眺められ、如何にも見事の景色である、世間の土山さへ斯様であるが、お淨土の七寶の山は定めし見事なことであらうと、お歎びなされたことがある。此の御心掛けが即ち佛法を主人となされた所である、心に佛法の無い時は、必ず浮世の樂みに耽溺し、口腹耳目の欲に驅使せらるゝ。古人も樂んで淫せずと、誠めてをる、法を歡ぶ者は常に此の心掛けに住し、佛法と世間とを取り違へぬやうにせなければならませぬ。

第三。引立心なく大様になり候は、心中を引きやぶり可參事。

引立心なく大様になることは、我れも人も共に能く陥る所の缺點である、お互に子供を先立てたとか、親に離れたとか、或は九死一生と云ふやうな重病にでも罹りたる時は、今更の様に驚きを立て、聞法の上に注意をすることゝなるが、さて其事も濟みて月日が経つと、又復懈怠に流れ、佛法其處除けにして世間大事となつて來る。斯くて私共の心中は、何時も懈怠の線路を進行した、時適に喫驚した様にお念佛に立歸る傾きがある。道宗も亦此の心中に捕へられて苦

しんだものとみえる。それであるで斯ういふことが筆に上り來つたのであらう。道宗は此の大様懈怠の心中に對して如何なる措置をしたかと云ふに、心中を引き破り參るべき事と申してをる、是れが即ち道宗の道念の堅固な所であります。

私共は此の大様懈怠の心に對しては、容易に道宗のやうな態度に出でかぬ。道宗は引破ると云ふも、私共は引破ることをせぬのみならず、却つて之を辯護する傾きがある。何分にも大様に成つて困るとか、思はず知らず懈怠に流れたとかと、いつも其の辯解のみに苦心する。抑も此の辯解が何程の價値がある、他人に言付けられた事を忘れでもしたのならば、多少の辯解の下に、一時の寛宥を乞ふことも出来るが、己れの後生の一大事に對し、辯解した所で何になる、生死は事大無常は迅速である、如何程辯解した所で、無常の風は寸分の猶豫もして呉れぬ、辯解する辭の下からでも、死んで行かねばならぬ。斯う考へてみると、私共は入らぬ辯解に心を苦しむるよりも、先づ大様懈怠の横着心を引破つて、念佛

の本道に立歸らねばならぬ。

一體此の大様懈怠に流れると云ふことは、私共の本性である。何故ならば私共は自ら進んで淨土參りを爲さんとするが如き、殊勝な心掛けを有つて居る者でない、若しそれであつたならば、遠き昔に佛道修行に心身を投じ、出離解脱の本懐を遂げて居つたに相違ない。然るに無始以來、今日今時迄、流轉廻してをることから考へると、何うしても淨土よりも、苦惱の娑婆を慕うて居つたとしか思はれぬ。然るに此の横着なる淨土嫌ひの者が、溢々ながらも法義の席へ顔を出し、惡口雜言する口から、殊勝なお念佛が稱へられるやうになつたのは、全く如來聖人の御念力が至り届いた爲である。厭やと逃げ廻つた者が、親に引かれて我が家へ連れ歸られたのである。それであるで少しの間隙でもあると、忽ち元の苦惱の娑婆に踐留まるべき仕度にかゝる、懈怠は此處から出て來る、大様の源は此處に伏在して居るのである。さうして見ると、此の大様と懈怠とは、全力を盡して撲滅すべきものであつて、決して之を辯解助長すべきものでない。

されば道宗は之を引破ると誓言してをる、厚信の道宗の跡を慕ふ者は、此の嚴肅なる誓言を守りて、同じく此の心中を引破りて、憶念稱名勇みありの、力の張り詰めたる念佛者とならねばならぬ。

第四。佛法においてうしろろき利養あらば、淺間敷く存じ候て、手を引く思ひをなし奉り、翻すべき事。

此れはなかく、耳の痛い教訓である、厚信篤實なる道宗の如きでさへ、此の自警の辭を發して居る所をみると、道に志す者は深く反省猛慮しなければならぬ。人間には慾と自惚とが先天的に焦付いて居り、尠少でも開展の間隙がある。直に此の二つの者が頭を上げやうとする。固より佛法の上の御奉公に、名聞や利養の有るべき筈はないのであるが、爾し油斷をすると此のありうべからざる所へ、横着至極にもそれが顔出しする、誠に恥かしいことである。手次寺の世話をするとか、本山の取持ちをするとか、或は又各種の會合に於ける幹部の位置に立つて居る者を觀ると、此の病弊に罹り、佛法のお世話をしながら、而も三惡道の

種時をしてをる事がある、嘆すべきの至りである。兎も角も他人の身の上の詮議立は止めておき、我が身が即今此の病氣に罹りてをりはせぬかと反省しなければならぬ。念佛は決して世渡りの道具ではない、無有出離之縁の此の私共が、往生成佛させて頂く唯一無二の妙法である。されば此の妙法は我が往生の一大事の解決のみに使用すべきで、決して之を他の尋常事に用ゆべきものでない。況して名聞利養の如きもの、先使とすることは實に恐れ多き次第であります。

第五。心にひいきをもち候て、人のためにわろき事を仕間敷事。

心にひいきをもつとは、随分と痛い事を云ふたものである。寔に道宗の云ふ通り、私共は自分の心にひいきを持ち、如何なる事にも自己の辯護をすることのみに腐心する、それが爲に人と我れとを對立する時は、何時も人の身の上よりも先づ我が身の上の事を處置し、其の後でなければ決して人の上に力を貸與せぬ。斯くて我れは何時でも利益の位置に立ち、人は必ず損失の所に立つことゝ

なる。尤も私共と雖も、初めからして人を損害しやうとか其の不爲になるも、構はないとかと云ふやうな横着心は表には出さぬ、何でも人の爲にならうと思つては居るのである。然るに愈其の實行となると、今申した如く我が身は得の位置に立つて、人を損の位置に落すのである、それでは濟まぬではないかと、我れと我が心を叱り付けると、我が心は屹度さうく人の爲と云うて居つては、我が身の立瀬が無いと辯明する。それを聞くと我が心は如何にも左様であると答へる。而して此の自問自答は常住不斷我が心中に問答往復してをる、我々は實におかしい程我が心の辯護にかゝりはてゝをる。

若し此の世の中に能く我が心を叱り付ける勇氣を有つて居る者があつたらば、それは實に世界の大勇者と稱讃すべき者である。私共は他人を叱り付けるとはするがなかく、自分の心を叱り付けるをやう致さぬ。是れが爲に毎時も我が心が増長して勝手な振舞ひを爲し、義理も人情も顧みないとななる。子供をあまやかして勝手放題にさせて置いては、決して立派な人物に育て上ぐ

るとは出来ぬ、人一倍の立派な人物にしてやらうと思ふと、何うしても叱り付けて横着の所作をせぬやうに爲さしめねばならぬ。我が心は子供の様なものである、されば心の動くが儘にさせておくと、世間も人も構はずに思ひ存分のことをしやうとする故、何處迄も此の心の氣儘を押へて、正しき大道を踐み行かしめねばならぬ。

私共は宿縁厚ふして、淨土の往生を願ふ行人となさしめて頂いてをる。淨土の家庭の教主は若く不生者不取正覺のお誓のもとに、我が事をさしおきて、我等衆生の爲に御苦勞下さるのである。此の如來様と同體の證を開かせて頂かんと欲する者が念佛者である。してみると、苟くも念佛を歡ぶ限りは、我が身の事よりも先づ人の身の上を思ひ遣るのが、此の如來様の思召に叶ふこととなる。人は何うでもよい、我れさへよければよいと考ふる者は、未だ此の如來様のお心が會得出来てをらぬ者と申さねばならぬ。世に又一類の人あつて、さうく人の爲と云うてをると、我が身の上が留守となり、何事も出来なくなる、人は人で行

るがよい、我れは我が事をせねばならぬと極め込む。一應聞くと尤もと思はれぬでもないで、道徳上に心掛けの薄い者は、兎角に此の説に賛成する。爾し之は入らぬ心配である、私共は佛ではない、煩惱成就の凡夫であるから、如何程人の爲に盡さんと心掛けて日夜奮勵努力しても、矢張其の中に自分の爲になるとは漏れなく行ふ。なか／＼に自分が食はずとも、人には三度の食事を振舞ふとか、或は又自分が着ずに、他人に衣服を恵むとかと云ふやうなことは致しはせぬ。何んなに慈悲深い人であつても必ず先づ自分が衣食し、其の上にて他に衣食せしむる者である。それであるからさうさう人の爲ばかり思うてをては、我が身が立行かぬと云ふやうなことは入らぬ心配である。慈悲深い人でさへも決して我が身の事を忘れぬ況して其れ程に慈悲心もない者に對し、我が身の上のみを思うて、人の事迄も思はずともよいなど、申したら、それこそ此の世は忽ち逆轉して、禽獸の世界となつて了ふ。されば私共は何處迄も此の道宗の訓誡に従うて、我が心にひいきを有ちて、人の事を忘れぬやうに爲なければならぬ。

第六。冥の照覽と存じ候て、人しり候はずとも、悪しきこと仕るまじき事。さすがに蓮如上人の面授のお弟子だけあつて、よい事を云はるゝ。上人は、一心にたのみたてまつる機は、如来のよろしめすなり、たゞ彌陀のしらしめすやうに心中をもつべし、冥加の程おそろしく存すべく候と、御訓誡なされた。されば此の一條は獨り道宗に限らず、苟くも淨土眞宗の流れを汲む者に執つては、最も大切な箇條である。何しろ御一流の法義は、惡人正機に至極するゆゑ、兎もすると此の意を曲解し、惡を爲すを本領であるが如く心得、自己の行爲を反省することを忘れる者がまゝある。上人は此の點に就いて深く御心配なされたものと見え、御一代開書の中には、隨所に嗜みのお話が出てをる。従つて上人の御化導の思召が會得出來た者であると、必ず此の嗜みの本領を體得して、如實の念佛者となるものである。一體此の惡人正機と云ふことは、佛様の高大無邊の御慈悲の程を示されたものであつて、決して悪い事を行へ、それが我が望みであると仰せらるゝとではない。然るに横着者は此の遺瀨なき佛の仰せをば、

善人よりも悪人の方が、如来様の思召に叶ふなぞと曲解する、それが即ち得手に法を聞くと云ふものである。固より私共は断じて善人ではない、實に極悪最下の徒者である。所が此の徒者が、如来様の涙の種となるのであると自覺反省する所に始めて其のお慈悲の程が思ひ浮べられて、假令善人振つた所作は出來ないとしても、責めては我が身の淺間敷さが知られ、二つの悪いとも一つに謹しまんとする心掛けとなり、さすがにお念佛を歡ぶ身の上であるわいと云はるゝ、妙好人の振舞ひが出來たのである、斯くあつてこそ淨土を願ふ行人と申すべきである。世間には佛とも法とも知らぬ者でさへも、身を謹み行を正しふする者が幾等もある、況して娑婆を厭うて淨土參りをしやうとする者が、大手を振つて地獄や餓鬼の眞似をしてはならぬ、念佛者は何處迄も念佛者らしくありたいことである。

道德者も身を謹み、念佛者も亦身を謹む。爾し此の兩者の中に於て、其の謹みの動機は多少異なる所がある、道德者は人に對し心に省みて之を謹むのである

が、念佛者はさうでない、冥の照覽に對して之を謹慎するのである。抑も人に對し心に對して謹む者は、世間と云ふ制裁を離れると、其の謹みの程度が弛む慮れがある、又心に對して謹むとしても、隨分心は勝手な理窟を付けて辯解の道を開くものであるから、時折りに正道を踏みはずす慮れがある。其處になると念佛者には二重の網が張られてある、即ち世間とか良心とかの外に、行住座臥佛が自己を照覽し給ふと云ふことが、我が念頭を離れぬ爲、世間の外聞と、良心の呵責の有無に關せず、此の照覽に對して申譯がないと云ふ所に、道德者よりも尙ほ一倍深く反省考慮することゝなる。斯うありてこそ、念佛者は道德者よりも勝れてをると云はるゝのである。

世間や人を相手として行く間は、其の世間や人が認めて呉れぬと、何となく心の奥底に満足することが出來ぬが、一步を進めて佛が照覽し給ふと云ふことになると、人の毀譽褒貶に頓着なく、總ては佛が知ろしめすと云ふ所に、大安心と大満足を得、順境と逆境とに拘はらず、楽しんで修善の行動を爲すことが出來ること

なる。斯うしてみると念佛者は世間尋常の道徳者以上に行道進徳がせらるゝ筈でなる。然るにそれが出来ずして念佛者でありながら世間の人から彼れ此れ云はるゝ振舞ひのあるとは何うしても自己の衷心に眞の佛の御恩が歡ばれて居らぬからと申さなければならぬ。尤も世は五濁惡世であり人は濁惡邪見に傾いてをる此の間に處して多少の善事を行はんとすることは容易なことではない。大聖釋尊は大經の會座に於て他方諸佛の淨土は善を爲す者多く惡をつくる者は少し福德自然に備はりて造惡の餘地無きも反之て此の人生は多惡にして修善の行爲は容易に勤まりかぬるそれゆゑ若し此の間に處して善を修めんか其の功徳は他方淨土にて修むるよりも幾十倍も勝るとお説きなされて大に以善攻惡の行爲をお勧めなされた。私共は此の佛の教訓を奉戴して獨作諸善不爲衆惡の大道を歩まねばならぬ。

第七。佛法の方をばいかにもふかく重く信仰申し我身をば何こまでもへりくだり候て嗜み申可事。

佛法と我が身との二つを並べ其の孰れを先きとし孰れを重んずべきかと云ふことにつき解決を下したのが此の一條である。是に對し道宗は佛法を重んじて我が身をへりくだることゝ告白してをる。斯うさへ行けば私共は宗教と道徳との問題につき些少も煩悶することが無くなる。何故なれば私共は佛の仰せの御尤もなることも又道徳の必要なることも能く承知しそれに對して別に彼れ此れ云ふことは尠少も無いそれならば其の教の如く是を信じ之を實行することが出来るかと云はるゝとそれはなかくむつかしい。斯くて知ると行ふとは毎時も相隔たり單に物知り分際止まつて了ふのである。何うして斯様な妙なことになるかと云ふとそれは云ふ迄もなく我が身の勝手が先きに立つて素直に其の教を信受奉行せぬからである。

私共は知るだけの事を實行さへすれば其處に立派な道徳も顯はれ又難有い妙好人ともなされる。加之此の境域に達したいことは日頃の熱望であるにも拘はらず愈々となると其の實行を躊躇する慈悲を他人に加へるとは善いと

は知るが、それでは自分の方に損が立つ、佛の仰せの儘を信すれば善いのであるが爾し何うしても自分の考へと一致せぬから信することが出来ぬと、何時も自分を先きに立て、其等の教を後へ廻して了ふのであります。

此の如く宗教も道徳も、知つただけの範圍に止めておくときは、何等の効果も顯はれはせぬ、其の爲何時迄経つても、安心の境涯に入ることが出来ぬ。さればとて實行となると、我が身が苦しいから手を出しかぬ。煩惱は此處に在り、不徹底の生活は此處から始まつて来る。所が道宗の辭の如く、佛法を重くして我が身を軽くさへすれば、何んのことなく、此の難關が通過せらるゝ。我が身を軽くして服従する事となると、其處に理窟も何にもない、即ち至心信樂已れを忘れ、唯如來の仰せの儘に行動し、動靜己れに由らすとの先聖の訓言が、全分顯現することゝなる。厚信の道宗は此の境涯に出んと心掛けたる爲、此の一條を記述したのである。

第八。佛法をもて、人にもちゐられ候はんと思ひ候。ことはかへすくゝあさ

まじきことにて候。其心出來候は、佛法信するは、此度後生の一大事助かるべきためばかりにてこそ候へと思ひ候ひて、ひるがへし候べき事。

前の利養を誡めた一條と異曲同調である。佛法を信する目的は何處にあるかと云ふと、即ち道宗が茲に申述べたる如く、此度の後生の一大事を助かるべきが爲である、此の一事こそは、信佛の最大眼目であつて、其の他の事は總て餘事であります。然るに、私共は免もすると、此の眼目を忘れて、徒に餘事に走らんとする傾向を生ずる恐れがあります。甚しきに至ると、法義者を看板として、世を渡らんとするが如き、淺間敷き所作迄も仕兼まじきことゝなる。此の點に就いては、お互に深く反省しなければならぬ。

一體衷心に信仰無くして、外徒に是れを説くが如きとは、確かに此の一條の訓誡を蒙むるべき所作である、斯る所作は恰も物賣りが買はんかゝと、市中を賣り廻るが如きである。信仰は賣るべきものでない、自分が厚信の嬉しさを讃歎し、他の者をも此の信念の嬉しい境涯へ入れしめんと勸むるものでなくては

ならぬ自信教人信のお示しは是が爲に生じ來つたのである。自分は別に信仰をしてをらぬが職分であるから仕方なしに勸めるとか斯う云はねば人が聞かないからと云ふ様な淋しい心中にて御用を勤めてをるやうなことであると全く自分の世渡り道具に佛法を使うてをるものである。是れでは自己を救済するとの出來ないのみならず、屹度他をも誤る。物賣りが賣るべき品物に信用を有たぬやうなことでは何うして買手に對して満足を與へることが出来るものか。僅かの品物の賣買でさへも是れである。況して自己の信念を他に分たんとするに當り、衷心に何等歡喜の情も無いと云ふやうなことで、到底人が満足しやうな筈がない。

爾し世の中の所謂佛法者と云ふ者は、多分はそれでは無いかと云ふものがある。或はさうかも知れぬ。若し左様であるとしたら、其等の人々は所謂世を渡る道具に佛法を使うてをるのであつて、決して我が身の後生の一大事の爲に聞法してをらぬのである。爾し私共はそれを彼れ此れ詮議立するやうな間暇は

有たぬ佛法は人の事でない、我が身の一大事である。我は唯我が身の上の斯様な過ちがありはせぬかと、日夜反省猛慮すべきまでである。要するに眞に我が身の後生に驚きが立つたならば、決して之を世渡りの道具に使ふやうなことは、勿體なくて出來るものでない。

第九。理非をたゞさず、あしき事の出來候はん座敷を、のがれ候ふべき事。

理非をたゞさずとは、事柄の是非の如何を取匡さすにと云ふことである。假令如何程道理があるとしても、惡處へは近寄らぬと云ふことが、道に志す者の執るべき態度であります。何にしるお互は四圍の境遇によつて、忽ち變化する慮れがある。初めの中は悪いと思ふた事でも、度重なつて慣て來ると、それを何とも思はぬやうになる。習慣は第二の天性となるとは、能く云ふたことである。地獄行きの所作のみに耽つて居る者に接近すると、自分も何時とは無しに其の所作をするやうになる。されば我が身の後生が一大事であると思ふ以上は、斷じて斯る事の出來する處へは接近せぬやうに爲なければならぬ。道宗が此の一條に

筆を染た時は、類に積もりて耳順の坂も越えてをつたのであるが、それでも斯る處に注意して居る所を見ると、其の身を持つ上に、如何に細心周密であつたかい解かる、眞に念佛を歡ぶ者は、是非に斯うなくてはならぬ。

私 其の根性は、拗戻れ切つて居るものであつて、人の善事を爲るのを觀むる時よりも、其の惡事を爲すことを見聞する方が、一層熱心に注意するやうな傾きがある、寔に淺間敷である。此の恐ろしい根性を控へながら、而もお淨土參りを爲やうとするのであるから、世間尋常の人々よりも、一倍に自己の行爲の上に注意をしなければなりません。されば道理や理窟は如何程あつても、青條立て、議論をするやうなことは、念佛者としては有るべからざることである。所が世に一類の人ありて、そんなことを云うてを、何時も人に敗てばかり居らねばならぬこととなる、それでは自分と云ふ者の立つ瀬が無いと反抗する。無くてよいではないか、地獄行きに勝つた所で褒められたものでない、假令世間に敗ても、佛となる所に先驅けしたならば、それに優る勝利はないではな

いか。

私 共は二個の反對の事を一度に満足するとは出来るものでない、佛に仕へるか、鬼の仲間入りするか、孰れか其の一つを選ばなければならぬ、惡人の前で敗た所が、佛の前に進み出でらるゝならば、それ程芽出度いことではない。されば若し我が心中にこんな詰まらないとは無いと云ふ愚痴が生じ來らば、何に是れで佛様にして頂くのであると、我が本領に立ち歸らなければならぬ。何にしる近寄らぬに限る、近寄つて一言二言云ひかゝると、其の言ひ掛り上、何うしても後に引けぬととなる、道宗は理非の如何に拘はらず、左様な所へは近寄らぬと覺悟した、身を守らんと欲する者は、此の道宗の行爲を學ばねばならぬ。何分にもお互の身は、危末な者ではない、既に佛に打任せて淨土往生をさせて頂くのであるから、さう浮々と三惡道の所作の有る所へ近寄るべきでない、嫁入り前の娘は容易に人中へも出さぬ、萬一の過失があると、一代の不幸を招くからである。次生直に大涅槃の證を開かせて頂く約束の出來た身分であるとしてみると、其の身を

持するとも、不信の昔とは全然相違しなければならぬ。斯くて始めて念佛者たるべき身の行ひを全ふることが出来るものであります。

第一〇。これ程のあさましき心中をもちたるよと思召候はんことこそ返々、あさましく、かなしく、つらく存じ候。今迄のことをば、一筋に御免所仰と雖も、かやうなる心中なるもよと思召し候はんこと返すく、身のほごをのつたなさ、かなしさ、あさましく存じ候。前生もかゝるつたなき心中にてこそ、今にかやうに候はめと申し、かぎりなくあさましく存じ候。あらく冥加や、今日までうしろくらきをば、ひたすら御免を所仰候。仰に任せ参り候ふべし。

此の一條も亦なか／＼痛い辭である。如何にも道宗の云ふが如く、私共は兎角に謝り上手で、而も改め下手である。私の様な淺間敷き者はありませぬと迄は大概の者が氣付く所であるが、それならば其の淺間敷き心中を改めては何うかと云はるゝと、それが出来兼ねましてと辯解する。甚だしきになると、是が凡夫の生地であると、己れの悪いのを當前の様に心得てをる者がある。道宗はそ

れが甚だよろしくないと言つてをる。尤も今日迄の心得誤りは致方も無いで、淺間敷き心中と氣付いた時から、それを悔ひ改めて、善知識の仰を守らなければならぬと云ふのが、道宗の教ふる所である。一體私共が今日迄で迷ひ來れる源は、孰にあるかと云ふに、それには種々の原因もあることならんが、此の辯解上手の改め下手が、確かに一大原因を爲して居るのである。されば一旦此事に氣付きたる限りは、今日迄の事は御許しを蒙り、今日以後は斷然仰せに従ひ奉りて、淺間敷き心中なりなど、逃げ廻らすして、此の淺間敷き者を御助け下さるのであるから、如何なる困難を忍びても、仰せに従ひ奉らねばならぬと、覺悟しなければなりません。左様でなければ、萬劫末代生死の苦惱を離脱することは出来な。道宗は辯解に満足せぬ、百の辯解よりも一の實行の方がよいと、最も痛切に自己の反省を促し、片時も善知識の仰せに背かざらんと心掛けたのである。それであるから、湖をも埋めると云ふ、大膽なることが言はれたものであります。

第一一。もし今明日もながらへ候て後は、法善不沙汰になり候は、淺間敷

やとひきやぶり嗜み候ふべき事。
 申す迄もなく油断大敵であるで、法義の事は一日々々と嗜まねばならぬ、今日も眞實の念佛行者となれるものでない。人の生命は今日あつても明日は不定である、孰れ明日のお座にてと思つてを、つて、今夕生命が盡きたならば、其儘に奈落に沈まなければなりませぬ、蓮如上人は、佛法には明日ありと思ふべからず、佛法の事は明日の事を今日に引上げよと御訓誡なされた。道宗は深く其の意を感佩してをる爲に、此の一條の制誡を書き記したものであります。

第一二。心中におどろきしみく／＼となく候は、あらあさましや、勿體なや、今生はうえじに、こゝえ死ねども、この度の後生の一大事をとげまひらせ候はんことこそ、無始曠劫よりののぞみ、此度満足なれと存じ候て、思ひきり我身をせめて、たちまちおどろき候べきなり。それにもおどろき候はずば、これさて此身は、さて御罰を蒙りたるかと存じ候て、心中をひきやぶり、御同行にあ

ひまゐらせ候て、讚嘆申し候へかし。せめておどろき候べき事。

後生の驚きの立たぬは、今生の事に追廻されてをるからのことである、それで道宗は云ふ、假令餓え死に若くは凍え死にしても、無始曠劫以來の希望を満足して、往生成佛の目的が達せられさへすれば、それに優る大満足は無いと、我が心が浮世の問題に追廻さるゝのを引縮つて參ると斷言した、何んと云ふ見上げた心掛けであらう。私共はなか／＼さうは參りかねる、後の百より今の五十と云ふ諺の如く、兎角に此の世の事が先に立ちて、後生の事は後廻はしとなる。法義の物語が多少長引きて夕方にもなる、是では歸り途が案じられると、身は本堂の内にならなから、心は歸途の方へ飛んで了ふてをる。暑いと云うては座睡り、寒いと云うては引込む、斯様な心中にては、逆も眞實の念佛者となることは出来かねる、餓え死にも凍え死にも厭はぬこの一大覺悟があつてこそ、佛の御慈悲も我が身一人の爲であると頂かれる。私共は今の五十に目を奪はれずして、後の成佛の無價の大寶を獲得しなければならぬ。

斯様な心掛けを以て我が懈怠の心中を鞭打ても而も尙ほ驚きが立たぬならば、其時こそは如来聖人より御罰を蒙りて見放されたる者であると存じ、即座に同行善知識の許を訪ねて、其の警策を受けると道宗は申した。是も確かに我が大様懈怠の心を引立つる所の一法である、何分にも獨り考へて思案に餘る時は、心の知り抜かれたる友同行の相談を受くるに限る、さすれば三人寄れば文珠の智慧で、其處には必ず心の開ける道が出て来る。蓮如上人は常に仰せられた同行會合の時は腹を明けて物を云へ、物を云はぬが曲事である。日頃此の御化導を蒙りたる道宗は、持ちあぐんだる我が心中の開展を、此の御化導の實行に依つて解決せんと欲したのである。

第一三。あやまりて随意をはたらき、ねぶりふせり候て、この一大事を思ひまひらせず、いたづらにくらし候まじき事。

一日生存すれば一日の責任がある、些細に注意してそれを果さなければならぬ、假りにも今日は仕様がなないと、大切な一日を粗略になし、晝寝の枕を友とする

やうなことがあつてはならぬ。昏に晝寝ばかりでない、若し一日を無益に過さずならば、それも同じく無責任の誹を免れぬ。人生の一代の仕事をして来た道宗の上に、如何なる責任があつて、斯ることを申したかと云ふと、それは即ち次の句の後生の一大事のことである、人間は老少不定であるが、而も年も傾きて日暮れ近くになつた身は、一倍に此の感じが強かつたのであらう。老ひの坂を登りつめたる道宗には、今更浮世の事に執着も無からうが、唯此の後生の一大事のみは、寝ても醒めても一刻も忘れられぬ大仕事であり、之を果さなければ人間に生れ出でたる所詮がないと、深く感じて居つた爲、物事に厭き易い老の身に鞭ちて、此の一條を認め、たに相違ない。

蓮如上人の或夜の仰せに、我れは身をすてたり、乃至立冬の寒夜にも、又三伏の夏の夜、蚊におほくせめられても、乃至信心の行者一人も侍れかしと思ひ、辛勞をかへりみず、堪忍せしむれども、さぞと思ひ入たるも、がら一人もなく、さればよひより枕をかたぶくることなし。まして晝寝なんぞ、いふこともせず、たゞ佛

法をたしなみ後生を一大事と思ふばかりなりと申されたることがある。又或時は身あたゝかなればねむりきざし候、あさましきことなり、其の覺悟にて身をすいしくもち、眠をさますべきなり。身隨意なれば佛法世法ともにおこたり無沙汰油斷なり、此の義一大事なり、と告示なされたことがある。道宗は上人の御滅後ありし昔の御化導を思ひ出でて、如何にも左様である、油斷してはならぬと、我が心を勵ましたのである。

世の中には閑散で困ると云ふ者がある、爾し此の閑散と云ふとは、眞に我が身に授かつた福分として現はれたものでないやうにも思はる、動むれば幾等でも爲すべき事があるに、それをば打遣つておいて、而も閑散で困ると云ふのではなからうか。一卷の聖教に眼も曝さず、一句の法文を云つて門徒を勸化せずして、而も閑散で困るとて、晝の只中に枕を友として眠り伏せると云ふやうなことで、は、中興上人に對し奉りて、何んども申譯のないのみならず、道宗に對しても、實に顔の合せ様がない。兎も角後生の一大事を大切に思ふ者ならば、如何なる時

にも自信教人信の報恩行に引立てられて、睡魔の煩惱も寄付く間隙がないことゝなります。

第一四。友がなきなど、我身に理をつけ候、事有まじく候。内の人々にあひさふらふて、心に思ひ候はずとも、涯分嗜み候て、まづこの一大事は、いかい候はんと申し出し候て、心中をおどろき、嗜み候はん事。

此の一條の如きも亦私共が能く云ふ所の辯解であります。何分にも法義を歡ぶ友達がなない爲思はず知らず懈怠に流れるとか、或は家内の者に御法義がありませぬ爲、何うしても思ふやうに歡ばれませぬとか、自分の後生の一大事であるにも拘はらず、何にか他人の事でもするやうに云ふ者があるが、是は大變な心得違ひと申さねばなりません。家内の者に法義がないならば、それに法義の縁を結ぶやうに手引をするのが、眞の念佛者の勤めと申すべきである。蓮如上人は、わが妻子ほど不便なることなし、それを勸化せぬはあさましきことなりと仰せられたことがある。されば我が家内の者は無法義であるからとて、打遣つ

ておくべきものでない、如何なる方法を講じてなりとも、是を導いて念佛行者とせねばならぬ。左様に心得ると、語るに友が無いと云ふことは、斷じて出来なくなる。

私共は家内の者の衣食住の事に就いては、種々と心配を爲し、寝ても起きても忘れる暇はない。加之若し一家の中に病人でも出来ると、夜の目も眠らず看病もする、やがて別れる此の世の一生でさへも斯うであるに、何故に未來永劫に亘つて、浮ぶか沈むかの一大事に對し、親子兄弟の者が浮々と日を送つてをるに、法義が無いで仕様がななど云うて、打遣つておかるゝものか。一つの菓子でさへ、甘味いと知れると、皆の者に分けて遣りたい氣のするのが人情である、自分愈々往生成佛の大満足が出来た限りは、何うして之を獨占して、家内の者にも知らさず、捨て、おかれるものか。されば法義がないで仕方がないなどと云ふ者は、自分自身にも眞の法義の難有さが頂かれて居らぬのである。世の中には我が子が水に溺れやうとして居るのを、捨て、顧みぬと云ふやうな無慈悲

の親は一人も無い、又我が親が火に焼かれんとしてをるに、それを顧みずして談笑する子は一人もない、親子の間柄では互に其の身を顧みずして相救濟する。されば我が子が地獄に墮ちんとし、我が親が餓鬼道へ迷ひ込まんとしてをるに、何うも自業自得で仕方がありません、空嘯いて居るやうな所作の出来るものでなからう。さうしてみると、法義の相談事は、遠く隔つたる寺院の中や、赤の他人の同行の上にも求むる以前に、近き我が一家一族の上に、此の大切な物語をせなければならぬ。人生は再び來り難い、況して即今の一家一族の者が、此の末復斯うして一棟の下に會し、親と慕ひ子と呼ぶことが出来るか、何うか、それは恐らくは靈瑞華の咲き出づるのを待つよりも、まだ一むつかしいことであらうと思はる。俱會一處の樂みは、お念佛の力をかるより外には、斷じて得ることが出来ないものであるとして見れば、如何なる困難を排しても、一家打集ひて御法縁を厚くすると云ふことは、爲さなければならぬ任務であり、又情義であると思はるゝ。

あゝ甘味い物ちやと舌打ちして食うてみよ、傍の者は何うか少しでも分けて呉れど所望せずには居られぬ、心多歡喜の利益が溢れて身口意の三業の上に念佛の香が馨り、觸光柔輭の色艶が現はれ出でたならば如何に邪見の者と雖も、是はと驚きを立て、同一念佛の門に入り來るに相違ない。されば眞に我が家族の者に法縁を結ばさうと思ふならば先づ我が身が如法の念佛者となること、肝要であります。上人は信も無くして人信を取れ、と勸むるのは物を持たずして物を遣らうと云ふと同一であつて、左様なことでは誰が難有うござると手を出すものかと、嚴誠なされたことがある、如何にも御尤もなるお誠めである。我が身一つの勸化是れが即ち我が家族全體の勸化の根本となる、さうしてみると家内の者が無信心で困ると云ふことは決して口廣く云はれるものではありませぬ。

第一五。御道場のことを本とこゝろに涯分いれまひらせ候はん事。
座敷の裝飾には随分金錢を惜まぬが、それと同様に御内佛の御莊嚴が出来る

かと云はるゝと、誰でも恐れ入る床の花に數十金を投じても、御佛前の華は時に枯葉にならんとすることもある、寔に淺間敷きことでもあります。居室住宅家財什物の事には無理の算段を爲しても、随分派手にもするが、さて御本廟の事となると、僅の事にも大儀が前に立ち、兎角に出し溢りする、他人の事を彼れ此れ申すのでは無い、私自身が此の一條に對すると、實に極寒の只中にも冷汗が流れ出ることである、自今以後、何卒此の一條を骨に刻みて、道宗の跡を慕ひて報恩の實を擧げさせて頂きたいことである。

第一六。我をにくみ候はん人を、にくみ候はんやうに、心中をもつまじきこと。信後の生活上に於ける、重要なる心得を述べたるものであります。法然聖人は常に其の弟子方に對し、此の念佛する人を恨み謗るとあるとも、恨み謗ることあるべからず、あはれみの心をなし、悲しみの心を以て向へ、と嚴誠なされた。宗祖聖人も亦此の仰せによりて、始終門下に集まれる人々を訓誡なされた。道宗は此等兩聖人の遺訓を能く體得して、をつた爲其の自警の文を草するに當つて

も之を遺漏することが出来なかつたのである。思ふに十方衆生の中に在つても殊に罪深き者を愍み給ふ佛の大御心が頂かれてみると人を恨み人を悪むと云ふが如き淋しい根性の出で来る筈はない常住に此の佛心の御指圖によりて我が小さき心を支配さるゝことゝなる。さればこそ宗祖聖人は辨圓に對しうなく出遇ひ給ひ又吹雪の一夜を日野左衛門の門外に明かされたのである。宗祖聖人の信心も彌陀廻向の法なれば、私共の頂く所の信心も亦それである。同一の藥の効能が二三の區別があらう筈はない。してみると人を恨み人を悪むの根性をば當前のやうに思ふ者は未だ眞實の信心が頂かれて無いと申されても、一言の辯解も出来ない。

一體好惡の念と云ふものは、相手の者に附着して居るのではない、此の方の心の持ちやう一つで、好きも嫌ひとなり嫌ひも好きとなる。我が子が幾等横着しても、それで嫌ひに成つて膝元へも寄付けぬと云ふやうな事を致さぬ、大小便を膝の上で爲られても、一言の不足も云はず、先づ小供の仕末をなし其の後自分の

着物を着更へるではないか、慈悲の前には惡しと思ふものは一つもない横着する程一層にかわいくなる。我に對し惡口雜言する者も斯くて彼れが墮獄の種を蒔き付けるのであると思つて見ると、如何にも憐れに居られなくなり、茲に佛心が顯現して己れを忍びて他の造惡の因縁を絶たしめんと云ふ、大悲心が湧き出て来る、實に難有いことであります。

腸胃を病んでをる者は、始終食物に小言を云ふが、其の健全なる者は、何等の不_レ足も訴へぬ、小言の種は食物に在るのではなく、多くは此の方の健康と不健康に基づく、病床の粥は何うして健康者の常食とするとは出来ぬ、強い飯でなければ終日の力仕事は出来ぬ。されば食物が人を左右するのでは無くして、人が食物を左右するのである、己れの衷心に佛心の活動力がないと、兎角に人の上に好きと嫌ひとが生じて来るも、一旦佛心者大慈悲是れなりの妙諦が會得出来る、今迄は見ても嫌ひであつた者が、一倍にかわいくなつて来る、斯くて始めて怨親平等の廣い天地に出づることが出来るのであります。

他人が我を惡み我を恨むと云ふことは、一概に其の人の根性が曲つてをるが爲でもない、刻實すると假令全分では無くとも、其の幾分は此の方に缺點がある、火の無い所に煙は立たぬ如く、何等の縁も過失も無い者に對し何うして惡んだり恨んだりすることが出來やうぞ。人は當面の鏡で、自分は其れに向うて立つてをる者である、鏡に映つた姿に就いて、鏡を彼れ此れ云ふべきでない、汚れが映すれば直に拭ひ取らなければならぬ。人の口端にかゝつた時こそは、己れの姿が映じたるものと觀じ、卽座に自己反省の一大勇猛心を起さねばならぬ。斯う考へてみれば、人の彼れ此れの小言は、我の姿を正さしむる寶鏡であると、之れに對して恨むよりか寧ろそれが難有くなつて來る。何しろ私共は煩惱具足の汚れに満ちた凡夫である爲、人の目に留まるやうな汚穢の出づるのは當然である、多くの人は此の汚穢が見えても、傍を向ひて注意して呉れぬに、唯彼れのみは面を犯して之を教へて呉れる者であると感ぜ來ると惡むべき人が却つて難有くなつて來る。寔に恨みと惡しみを我に加ふる者は、我に對する善知識である。

道宗は能く此の間の消息を解した爲、今も斯様に申したのである。

第一七。只ねがはくば、この一大事に心をふかく入れ、油斷なく候へかしと存じ候。御同行の御なほしをば、やがてしたがひ申すべき事。

蓮如上人は、一句一言を聽聞するとも、たゞ得手に法をきくなり、たゞよく聞き心中のとほり、同行にあひ談合すべきとなりと仰せらる、寢ても醒めても後生の一大事を心に掛てをる道宗は、此の御化導が泌々と頂かれてをつた爲、念の上にも念を入れて、豫て油斷はせぬと覺悟はしてをるもの、若し萬一の誤りがあつてはならぬと存じ、自己の心中を同行の前に披瀝して、其の批判を受やうと望んだのであります。眞に法義を大切に思ふ者ならば、誰とても斯うなくてはならぬ。上人は得手に聽聞すると仰せられた如何にも左様である、自分の氣に入らぬとには、兎角に耳を傾けぬのみならず、適ま聞いても、あゝは云はるゝもの、實際は左様にせなくともよいとか、あれ程仰せられぬと、此の方が横着に流れるゆゑ、厳しくお誡めなさるのであるとかと、自分一人で勝手に極めて了ふ。斯くて

大切の教誡も其の半も効力を現すことが出来なくなつて了ふ。所が若し斯る場合に自分は斯う頂いてをるがそれでよいかと人に尋ねて見ると、それは餘り勝手な聞きやうであると直して呉れるとがまゝある。思ふに聴くのみが所詮でない、正しく聴かなければならぬ。而して其の正否は自分一人では解かりかねる、それゆゑ道宗は同行の中に申出で、聴匡して貰ふと云ふのである。

道宗の親友の一人なる順誓は、斯う云ふことを云ふた。「常には己が前にてはいはずして、かげに後言いふとて腹立することなり。われはさやうには存せず候。わが前にて申にくゝば、かげにてなりともわがうしろ事を申されよ。聞いて心中をなほすべし」と。茲である人の言を聞くこと云ふ點迄は大概の者でも企て及ぶことが出来るが、聞くと同時に之を匡正すると云ふとは、餘程の道心が無いと出来るものでない。爾しそれを爲さなくては聞いた所詮がない、順誓は聞いて心中をなほすと云ひ、道宗も亦御同行の御なほしをばやがてしたがひ申すと誓うて居る、斯うあつてこそ聴聞の上に誤りがないことゝなる。一應聴聞し

て自分勝手に解釋し、適ま友同行に匡ることがあつても、左様な筈はないと唯自説を主張するやうな心掛であると、決して眞の念佛者となることは出来ませぬ。

第一八。萬事心に執着せずして、たゞねがはくば我心この一大事ばかりに、ふかく心を入れ候へかしと、存すばかりなり。

人間萬事兎角に執着の綱を引く、されば眞に佛道修行に掛らんとする時は、何うしても捨家棄欲の一大英斷を下さなければならぬ。爾しそれは聖者方の上にのみ望まれることであつて、お互の如き造惡不善の凡夫にては、逆も企て及ぶことが出来ぬ。私共は家庭を作り、妻子を撫育しながら、而も往生成佛の目的を達せなければならぬことであるで、念の上にも念を入れて、人生の問題を扱はなければならぬことである。能く泳ぐ者は水に溺ると云ふこともあれば、油斷をしてをると、浮き世の問題に執着して、成佛の大道へは一步も踐み出せず、空しく此の一生を送り果つることゝなるかも知れぬ。

道宗は萬事心に執着せぬやうに爲たいと望んでをる尤も浮世の問題を打捨てるとは申してはをらぬ。私等とても此の心掛け一つさへあらばそれでよい、執着するが爲に諸の煩惱を造り、あらゆる罪惡を犯すことゝなる。人生の一代は長い道中であるで、其の間には種々の事も湧き出ることもあるが、爾しそれは唯途中の出来事であつて、決して終局のものではない。萬事を途中の出来事と觀むれば、是非に斯うなければならぬと云ふが如き執着心は起りはせぬ。雨の日も日和の日も、孰れも皆途中の出来事なり、其の爲道中を廢すると云うてをては、決して長途の旅は出来ぬことゝなる。雨か、それならば傘を差さう、日和か、さらば雨具を仕舞うて行かうと、事に應じ變に處して融通の道を講ずるのが、旅人の賢き所作であります。

抑も此の人生には執着すべき物とては一つも無い、時々刻々に總ての物が變化し、決して同一の状態を持続することを許さぬ。紅顏の少年も忽ちに白頭の老翁に化し、咲き亂れた百花も、やがて散り果て、枝頭に其の艶麗な姿を止めぬ。

觀じ來ると、人事萬般孰れ一つとして愛着すべきものはないことゝなる。泣くも笑ふも雲の徂徠を觀むるが如くなる。斯くて始めてあらゆる煩惱の中に寢起きしながら、而も念佛を歡び、樂く此の人生を送ることが出来ることゝなる。爾し此の中に在つて、一つ忘れてならぬのは後生の一大事である。是ばかりは消えて跡方の無くなる。人生萬般の事と同一視してはならぬ。何處迄も自己の心中に深く攝め入れて、何時生命が終らうとも直に涅槃の樂境に進入することの出来る用意をしておかねばならぬ。道宗は此の點に就いて深く心を悩ましたものであるで、此の一條を書き記して、自己の反省の料としたのであります。

第一九。斯様に申し候は、あまり我こゝろおもひしれもなく、あさましく候ほどに、かやうに心をかたらひ定め候ひても、そのしるしも候へかしと思ひ候ひて、かやうに今申し候。いくへにもく、人の御なをしには、隨ひ可申候。道宗の自警の文は前條にて終る。是より以下は其の結文として所感をかきつらねたものである。それで此の一條は、上來種々の個條を書きつらねたるは、あ

まりに我が心が淺間敷くして、兎角に後生の一大事に思ひをめぐらすこともなく、浮々として過すが故に、斯る條々をかきつらね、我が懈怠の心に鞭ちて、少しは驚きを立てしめんと存じたるのみなり。然れども是れとても定めし誤りも多かるべく、又斯く條々の誓言を申述べても、之を破りて勝手な振舞ひも致し兼まじければ、幾重にも友同行の注意を受けて、己れの心の曲れるをば正し申さんと、人の切なる注意を要求したものであります。

第二〇。ねがはくば御慈悲を別して心にかけれられ、ひがめるかたへやらすして、おしなをして給はり候へかしと思ひまひらせ候。こと他のことなく候。前條に同行善知識に對して、自己の誤りを匡し給はらんことを切望したるも、而も之れとてもお互に人と人との間のことなれば、萬一にも遺漏の點の無いともかぎらぬゆゑ、茲には一步を進めて、如來聖人の御冥助を仰いだのである。「ねがはくば御慈悲を別して心にかけれられ」とは、此の極重惡人なる道宗の爲に、特に大慈悲を垂れ給へど願ひ奉りたること。「ひがめるかたへやらすして、おしな

をし給はり候へかし」とは、私の此の横着なる根性をば、ひがめる方へ遣らぬやう、萬一にも氣儘の所作もあらば、押直して正しき方へ立ち歸るやう致し下されたしど、如來聖人の加被力を希ひたるなり。「他のことなく候」とは、是より外に何の餘念も無い、唯此の一事のみを晝夜不斷思ひつめをると、自己の衷心の切なる祈願を顯示したものであります。

第二一。あさましの我心や、後生の一大事をとぐべき事ならば、一命をも物のかすと思はず、仰せならば、いづくのはてへなりとも、そむく間敷心中なり。又唐天竺へなりとも、もどめ尋ねまゐらせ候はんと、思ふ心にてあるに、仰にしたがひ、うしろくらくなく、法義をたしなみ候はん事は、さてやすき事にてはなきかどよ。返々我心今生は一旦なり、いまひさしくもあるべからず、かつへても死ね、こゝへて死ね、かへりみず後生の一大事油断してくれ候。な。我心よ、かへすく今申すところたがはず、身をせめてたしなみ候へかし。返すく御法度にそむかず、爾も内心には一念のたのもしき、ありがたさをもち候ひて、外

相にはふかくつゝしみ申してくれ候へ。わがこゝろへ。

總結の文の中始めの一條は善知識同行の提撕を請ひ、次の一條は如來聖人の加被力を仰ぎ、今此の最後の一條は正しく自己の大誓願を表白し、如何なる難關をも突破して眞の念佛者とならばおかぬと云ふ一大覺悟を述べ、從つて此の一條の中には、道宗の全人格が躍動し、讀む者をして覺えず襟を正さしむる。

此の一條の全文は別れて三段となつてをる、始めよりさてやすき事にてはなきかとよ迄は、古の聖者方は道を求むる爲には、一命をも顧みず仰せとあらば、海外萬里のはて迄も赴かんと云ふ決心にてかゝられてをる。されば私共と雖も、後生の一大事を仕遂ぐる爲には、此の覺悟にてかゝらねばならぬ筈なるに、幸にも弘願の一法に遇ひ奉りたる仕合せには、斯ることをも致さず、唯々善知識の仰せに従ひ奉りて、うしろぐらき所作を致さず、法義を嗜み申すのみにて、往生成佛することが出来るとは、何たる容易なる事にてあるぞと、今の嗜みの斷じて難事に非ざることを斷言したるものである。

次の一段は、人生は夢の一夜である、敢て久しく保つべきものでない、唯夫れ後生は永劫の樂果なれば、假令此の世にては餓えて死なうとも、或は凍えて死なうとも、そんなことは何うでもよい、此の一大事の後生を取りはづしたならば、長く奈落に沈まなければならぬことなれば、此の一大失敗を招かぬやうにするが爲には、身を責めて嗜まねばならぬ、決して苦しいとか、勝手が悪いとかと、氣儘なことを申しつのはならぬと、自ら我が心を誡めたものである。

最後の一段は前申した如く、求法の上から申しても、又人生の實相から考へても、此の一生と云ふものは決して油断して過ごさるべきものでなき故、今生と云ふ今生は、内心に一念の信心を頂き、外相には念佛者相應の身を嗜みを致さなければならぬ。さうあつてこそ、此の世に生れ出でたる所詮があると申すべきである、喫んで含めるやうに、我が心に申聞かしたものであります。

私は此の最後の一條を讀み、誠に何とも説明のしやうない感慨に打たれるゝことでもあります。實に道宗の申す如く、眞に道を求むる志があるならば、身を

すて、なりとも、之を承はらねば承知が出来ぬ筈である。現に雪山童子は、一句の偈文を聞かかんが爲に、身を羅刹に投せられ、眞如法親王は、餓虎の爲に斃られた、先聖後賢、孰れも皆斯かる熱烈なる求道心の下に道を進まれた。是を思ふと今の私の求法の念の如何に薄弱なるかを顧みて、實に消えても入りたき心地が致します。道宗は云ふ、餓えて死なうと、凍えて死なうと、それが何である、永生樂果の目的が叶ふとならば、人生の苦樂の如きは、何うでもよい、生命の如きも何時でも差出すと、實に雄々敷き大斷言を致してをる。誠に此の決心を以てかゝらんか、人生何事か成せざらんやである。私共は、解かるとか解からぬとか、出来るとか出来ないとかと、種々の小言を云ふが、此の道宗の一大決心を承はつてみると、實に恥かしくて頭を擧ぐることが出来ませぬ。蓮如上人は、惡人の眞似をするよりも、善人の眞似をせよと仰せられた、自今已後我が左右の人々の如何に拘はらず、此の道宗を規鑑として、眞の念佛者たるべき生活をしなければならぬと存することでありませぬ。

宗祖聖人に依りて顯示せられた念佛の妙法は、中興上人に來りて大に人生々々の諸問題に接觸し來り、佛法を主人とし、世間を客人とする迄に融合したのであります。上人に依りて勸化せられたる道宗は、能く其の妙趣を會得し、茲に此の二十一ヶ條の自警の文を認めた。言ふ所多くは、是れ自己一身の反省である、無戒律の一宗の中に、一種の無戒の戒を説きて、眞の妙好人の徳を體得せんと勉めたのである。私共も亦此の熱烈厚信の老友の跡を慕ひ、中興上人の御遺訓に従ひ奉らねばならぬ。而してそれをせんが爲には、此の二十一ヶ條の制誡の如きは、之を寫して座右に掲げ、日夕自己の自警とせなければならぬ。

道宗嘗て上人に對し御文を願ひたるに、上人は書いた物は遺失する慮れがあるで、それよりも失ふことの出来ぬ信心を頂けと仰せられた。實際書いた物は、失へることもあれば、焼けることもある。されば此の道宗の制誡の如きも、之を書寫するよりも、寧ろ自己の心中に刻み入れて、日夕其の規範に従うて、身を處して行くに若くことではない。要するに百の書き物千の辯明よりも、只一つの實踐

の徳を肝要とするのであります。

第四八 四十萬の法敬房

- 一。法敬房、九十まで存命さふらふ、このましまで聽聞まふしきふらへども、これまでぞ存知たることなし。あきたりもなきことなりと、まふされさふらふ。(第四七條)
- 一。順警申されしと云云。常には、わが前にてはいはずして、かげに後言いふせて、腹立することなり。われはさやうには存ぜず候。わが前にて申にくれば、かげにてなりとも、わがうしろ事を申されよ、聞て心中をなすべきよし申され候。(第一二六條)
- 一。順警申され候、佛法の物語申に、かげにて申候段は、なにとるわるき事をか申べきぞ存じ、臨より汗たり申候。前々住上人問召所にて申時は、わるき事をば、やがて御なをしあるべきぞ存候あひだ、心安く存候て、物をも申さるゝ由に候。(第二一八條)
- 一。法敬房、申され候。佛法をかたるに、志の人を前にをきて語候へば、力がありて申よき由申され候。(第二八二條)
- 一。心中のまをりを、或人法敬房に申され候。御詞の如くは覺悟仕候へども、たゞ油断不沙汰にて、あさましきことのみ候と、申され候。その時、法敬房申され候、それは御詞のごとくにてはなく候。勿體なき申され事に候。御詞には油断不沙汰なせざること、あそばされ候へと、申され候と云云。(第二一六條)
- 一。法敬房に、或人不齊申され候。これほど佛法に御心をもいれられ候法敬房の、尼公の不信なる、いかゞの職に候由人申候へば、法敬房申され候、不齊することなれども、これほど朝夕御

文をよみ候に、驚き申さぬ心中が、なにか法敬が申分にて、聞入候べきと申され候と云云。(第二七條)

一。法敬申され候。たうさむ人より、たうさがる人ぞたうさかりけるを、前々住上人仰せられ候。面白こそをいふよ、たうたむ體、殊勝ふりする人は、たうさくもなし。たゞ有難や、たうさがる人こそ、たうさけれ。面白こそを云よ、もさものこそを申され候、その仰事に候と云云。(第二五三條)

さきに罪消して助かるか、罪消さずして助かるかとの疑問につき、上人が法敬房に對してお諭し遊ばされたる御教誨を擧げて、法敬房順誓を紹介したことであつたが、茲には前回の道宗と同門の弟子としての彼れを説かんが爲に、順誓自身の物語を集めて、其の人格をお話しすることゝ致しました。類集の物語は第四十七條より第二百五十三條に亘りて七ヶ條ある、此の七ヶ條を翫味すると、ほゞ其の人格を窺ひ知ることが出來ます。例によつて先づ此の七ヶ條の中にある難解の文句を解釋します。第二百二十六條に「常にはわが前にては」とあるは、世間の人々が常々申す所に依ればと云ふことにて、即ち世の人々は常に云ふ、自分の面前では何事も云はずして、後へ廻はりて彼れ此れ云ふことは、實に不都合の

至りであると立腹することなり。次に第二百八十二條に「志の人」とあるは、佛法に志の厚き人と云ふことにして、「力がありて」とは、力強く心丈夫に思ふと云ふこと。第二百十六條に「御詞の如くは覺悟仕候へども」とあるは、善知識の御化導に對しては、一點の疑惑も挿まず、仰せの儘に拜承致してをるものと云ふこと。次に「御詞には油斷不沙汰なせぞ」とは、善知識の仰せには、油斷不沙汰をしてはならぬと申されてをると云ふこと。第二百十七條に「法敬房の尼公」とあるは、順誓の家族の中にて髪をおろして尼となりたる者のことにて、孰れ順誓の目上に當る婦人のことであらうと思はる。最後に第二百五十三條の「たうさむ體殊勝ふりする人は」とあるは、殊更にたうさむ體相をなし、殊勝振りたる舉動を爲す者はと云ふことであります。

前回の道宗とか、今此の法敬房とかの物語を仔細に觀察してみると、蓮如上人の平常の御化導振りと、且つ其の御化導に依りて獲信の域に達したる人々の心掛けが、如何様なるものであつたかと云ふことが、ほゞ窺ひ知ることが出來て、私

其の修養の上に就いても、大なる徳を得ることが出来ます。

道宗の物語の中に、「道宗はたい一つ御詞をいつも聴き申したが初めたるやうに難有由申され候」とある一條がありました。法敬房も亦彼れと同一の心掛けを有つてをつたのみえ、九十の坂迄も登りてをるにも拘はらず、自分は今日の日まで佛法聴聞に耳を傾けてをるが、而も未だ是で充分聴聞し盡したと云ふ考へも起らねば、是れでよいと厭き足るともない、聴けば聴く程難有い味ひが出て來ると申したとのことである。道宗は幾度聴聞しても、初事のやうに嬉しいと云ひ、法敬房は幾等聴聞しても厭き足らぬと云ふ、兩老人の云ふ所辭に左右はあるが、而も其の意は全然一つであります。

私共は聞法上に就いて、此の兩人のやうな殊勝の心掛けを懐いてをるか、少しく法義が重複して來ると、復かど云ふやうな思ひが生じて來はせぬか、今更子僧の説教などは聴くにも及ばぬ、己れの方が能く存じてをると云ふが如き、高慢心が生じ來りはせぬか。私は時々世間の人から次のやうなことを聞くことが

ある。斯様に夜も晝も御座参りばかりしてをつては、もう聞くべきこともあるまいに、一體何を聞いてをられるのであるか、或は又斯様なことを聞くこともある。佛法と云へばとて、何にもさうむつかしいことはない、自分は此の間一席の法談を聞いたが、それで充分會得が出來た、此の上は別に聴くことも入らぬと。以上の物語は孰れも法義の物語をば、いろはを覚え、二二が四を知るが如き、淺慕なもの、如く思ひ、或はさうは思はぬとしても、何か一つの物事を知る所の知識の如く考へてをる爲に起り來るのであります。

法義上の物語が一種の知識慾を充すものであるならば、世人の云ふが如きこととなるかも知れぬが、爾し佛法は決して左様なものでない、己れの性根魂を直し、己れの所作を導いて行くものであるから、生命の有らん限りは是で充分と云ふやうなとはありませぬ。是れを私共の日常生活に就いて考へて見てもわかる、私共は自己の生命の糧として米の飯を食ふ、朝も食し、晝も食し、夕も食す、而も米の飯は厭いたと云ふことはない、少しく腹の空いた時となると、食膳に向

つて最初の一杯に箸を下した時の味は、實に初めて米を食ふと云ふやうな味がして、何とも云へぬ満足を感じる。夜も晝も御座参りして居つては、もう聞くべきこともなからうと云ふ者は、毎日々々飯を食してゐるのは、何うも不思議である。と云ふと同一である。鯛は何ういふ味か、己れは此の間一度食した故能く知つてゐる。胡瓜は如何なる味か、それも一切食したことがあるので、能く承知してゐると云ふた所で、聞く者は承知が出来兼ねる。魚類と云はず、野菜と云はず、單に一度の食味位では、逆も其の眞の味は知られるものではない。幾度も試みた上でなくては、其の味ひの善悪は斷言することは出来ぬ。日當の食の試食位では、眞を偽と傳へ、偽を眞と誤ることが無いとも云はれぬ。日常の食物でさへ是である。況して佛法の妙味と云ふやうなことが、一度や二度の聽聞位では、到底其の萬分の一だも存知することは出来ぬ。一席の談義で知り悉くせりと云ふが如き者は、一箸の試食で其の善悪を批判する所の近眼者流と、簡ふ所のない淺薄者であります。

私共は煩惱成就の凡夫である。生命のあらん限りは、此の煩惱の汗や油が流れ出る聽聞に、次ぐに聽聞を以てして、其の穢れを洗ひ流さねばならぬ。經に洗除心垢と説かれてある。されば聞法隨喜は一種の入浴であり、洗除心垢である。従つて肉體の穢れを厭ひて、日夕入浴を試むる嗜みある者は、自己衷心の汚れを除き去らんが爲に、生命のあらん限り、あきたりなく聞法の湯に入ることを好むのであります。厚信の法敬房が九十の年まで、聽聞に就いてあきたらなんだと云ふたことは、實に味ひある辭であります。

第四十七條は法敬房が自己の信味を物語つたものであるが、其の次の第二百二十六條は、眞俗二諦に亘つての心掛を述べたるものであります。厚信の法敬房は、此の兩面に亘つての心掛も亦自ら尋常人と異なつてゐる所があります。彼れは云ふ、世の人々は自分の事を面前にて云はずして、後へ廻りて彼れ此れ云ふことがある。之は何うもけしからぬとである。人の事を云ふなら、何も蔭口なんど云はずして、面と向つて云うて呉れ、ばよいに、それを爲さずして蔭口を云

ふことは實に不都合の至りであると、非常に立腹するが爾し自分はさうは思はぬ、假令蔭口でもよいで、遠慮なく自分の落度を云うて貰ひたい、されば自分はそれを聞いて、我が曲れる心中を直すからと。彼れの老友の道宗も亦彼れと同く、人の辭を聞いて我が心中を直すこと云ふことを、口癖のやうに云ふたのであつて、其事は道宗二十一ヶ條の中に於て、到る處に其の旨を表白してをることであり

ます。

人の辭を聞いて我が心中を直すこと云ふことは當代の重なる信者の間に、共通してをつた思想であつたこと、思はれます、而して是れが全く蓮如上人の御化導の現はれた所である。上人は平素人に對すると、物を云はぬが悪い、壽き立ての儘では誤りがあるかも知れぬで、遠慮なく我が心中を打明けて、友同行に直して貰へど仰せられた。師の教訓が是であるから、其の弟子達が、人の苦言を感謝して、快く承はつたのも、無理のないことであります。

實際私共は自分の事となか／＼解らぬ、人の顔に墨の付いてをるの

は直に目に付くが、さては我が身の顔に付いた墨となると、其の目元にあるものさへ少しも知ることが出来ませぬ。爾し顔の墨は鏡に向へば知ることが出来るが、心に付いた墨となると、鏡の力では見ることは出来ぬ、何うしても他人の力を借らなければならぬ。お互には、他心通の力も無いに、何うして人の心中を觀破ることが出来やうかと云ふ者があるが、爾しそれは別に心配に及ばぬ、心の主人は何時も五官の窓から、手を出し顔を出す。心に腹立の煩惱が燃え立つてをると、縁に觸れると直に赤鬼青鬼の顔を出して来る。心に高慢自負の思ひが活躍してをると、天狗の鼻をぐつと突出して来る。悲哀に顔面土の如き色となり、歡樂に笑窪を隠すことは出来ぬ。頭を隠して尻を隠さぬと云ふ、諺の如く、如何に慎み深い者と雖も、斷じて自己心中の發動を裏切ることは出来るものでない。而して一旦それが言語舉動に現はれ來ると、忽ち人の目に付くことゝなつて、是非の批評は即座に人の口端に上ることゝなる。

お互に他人から彼れ此れ評論さるゝことは、決して心持ちの善い者ではない、

所が此の評論の種は何時にも此の方で蒔き付けてをる批評が厭なら自ら種を蒔き付けぬに限る而も左様などは絶対に不可能である。何分にも此の世の中は、自分一人の世界ではない、相因寄生の約束の下に、社交の生活をして居る限りは、事の善悪と大小とに拘はらず、我が爲す一切の事柄は、大なり小なり其の影響を他に及ぼすものであるから、それを受けたる他人は、善いとか悪いとか何とか乎とか云ふに極つてをる、恰も石を水に投ずるが如きである。波動は必ず其の周囲に波及せずには居らぬ。されば私共は此の世に存在する限りは、大なり小なり人の口端に上らねばならぬのである。

人の批評は千差萬別となつてをるが、而も之を大別すると、善いと褒るか、悪いと誹るか、の二つに歸着する。私共は世の人々から、常に此の二つの眼鏡で腹の奥底まで見透されてをるものであります。而して何人と雖も善いと褒られて、歡ばぬ者はない、それと同様に、悪いと誹られていやな思ひをせぬ者もない。従つて人の彼れ此れ云ふのを、入らぬ世話焼きと嫌うものゝ、其の實は悪い方面の

批評に就いて嫌ふのであつて、褒られて入らぬ世話焼きと怒るものはない、誠に勝手なものであります。所が茲に一つ注意せねばならぬことがある、善いと褒められたことが、我が身の爲になるか、悪いと誹られたことが、我が身の損になるかと云ふとである。私共は善いと褒めらるゝと、如何にも鬼の首でも取つたやうに歡ぶけれども、實際は何等の徳も我が身に與ふるものでない、徳を與へざるのみか、却つて我が身に對して高慢と油斷の手引となる。反之、悪いと誹られた所に、自己反省の動機を得て、進一步の妙諦を獲得することとなる。されば古の大賢は、昌言を拜したと云ふ、それではなくてはならぬ。

私共は垢を去らねばならぬ、紅や白粉の姿で人の目を眩惑せしめてはならぬ。悪いの批評は垢を指摘されたものである、世の中に、お前さんの顔に垢が付いてをると云はれて腹を立つ者はない、顔の汚れを教へらるゝと感謝する者が、心の垢を指摘されて怒り腹立つと云ふとは、辻褄の合はぬ話である。法敬房は、蔭でもよいで、自分の缺點を教へて呉れと云うてをる、實に見上げた心掛けであ

る。此の心掛ありて始めて最勝人となること出来るのである。臭い物に蓋をして通る程氣持の悪いことはない、汚穢物はさつさと流し去らねばならぬ、それで心得違ひではないかと注意せらるゝ時に、如何にも左様であつたと、即座に感謝する者となつて始めて臭い物に蓋をせずして、此の世の中を通ることが出来るのであります。

善の方面は公開して人の賛辭を受くるが惡の方面には他人の一言半句も許さぬと云ふやうな心掛けである、一代を通じて垢の取れた人物となることは出来ぬ、善惡の二つを區別せず、内外共に公開して、人の批評の矢面に立ち奮然として反省自覺ある所に、人の人たる徳分を研くことが出来るものである。法敬房は此の公開の人として世に立たんと欲した、それゆゑ假令蔭でなりとも我が悪いことを云うて呉れ聞いて心中を直すべしと斷言したのであります。お互に法敬房のやうに公開した生活を爲さねばならぬ、秘密の多い程罪惡の穢れが多いのである。世間の人は褒めては呉れても、誹つては呉れぬ、殊に己れの位置

が高くなればなる程、人の注意を聞くことはそれと反比例に少くなる、耳に入る辭は多くは之れ阿諛の辭のみである。されば假令蔭にてなりとも、我が缺點を指摘して呉れる者があつたならば、それは確かに我に對する善知識の注意であると歡ばなければならぬ。

然るに世人の中には、此の注意に對し、若し其事が正當でないといふと、下らぬ差出口をしたとて立腹する者がまゝある、是れは甚だよろしくない。尤も注意する者と雖も、我れと變らぬ同様の人間であるから、時には誤れる注意を爲さぬことが無いとも限らぬ、よしそれが誤らぬとしても、我と見解を異にしたるが爲、右を左と云ふことがあるかも知れぬ、それは孰れでもよい、兎も角も我に對して注意をして呉れたる深切に對しては、深く感謝しなければならぬ。君子の過ちは日月の食の如し、人皆之を仰ぐと云ふこともあつて、私共は我が過失に對して、他の多くの人々より注意せられる所に、我が存在の意義が未だ消失して居らぬ者と歡ばねばならぬ。世に必要な者となる、誰一人として願みて呉れ

る者が無くなる善きにつけ悪きにつけ人の口端に上る間は、我が社會的の生命があると思ひ、それに對して深く反省しなければならぬことであります。

人は蔭口後言を嫌ひ、法敬房はそれを歡ぶ、法敬房は確かに一般の世人と異つてをつた而して此の異りたる處に、法敬房の眞生命が存在してをるのであります。偉人と凡人の變り目も亦此の處に在ります。凡人は垢を垢と思はず、穢れを穢れと思はぬ、されば他人が若しお前は、大變垢が付いて居ると注意すると、入らぬ世話を焼くに及ばぬと毒付く、斯くて自己の穢れは永久に氣付かずして終ることとなる。然るに偉人はさうでない、假令微細なことでも人が注意して呉れると、過ちを改むるに憚らぬ、言下に其の辭に聞きて垢を除き汚れを去る、斯くて偉人は益、偉大の人物となり、凡人は益、底下の凡愚となる。階前一步の差異が遂に百千里の相違となるが如く、人の注意を聞くと聞かぬ所に、善惡處を異にするることなる。善の至極の佛とならんと欲望する所の法敬房が、後言を歡んだと云ふことは、寔に故あることであります。

人の注意を聞き、我過ちを改めんと欲したる法敬房は、法義の物語りをする時にも、單獨の時よりも、師の上人の御前にて物語る時が、一段と話しがしよいと申した。或は又無知文盲の人に話すよりも、充分志のある人の前で話す方が、力の入れ甲斐があつて話しよいと申してをる。此の申分は聞くだけでも心持がよい、實力ある者の態度は斯うなくてはならぬ。私共は兎角に斯様の態度が出でかぬる、力のある人の前にては、思ふ事の十が一も云へぬとがある。反之て力の無い者の前である、一つの事を十にも云ひたがり、鳥なき里の蝙蝠となる傾向がある。力のある法敬房は、全く其の正反對に出でをる、蓮師が在ます處では、想ふ存分云へるが、在ます處では、十の一も云ひかぬる、其故は、萬一の誤りがある、と、聞き手の者を地獄に落とす恐れがあるからである、蓮師さへ在ますば、誤れる所は直にお匡し下さるから、安心して物語りが出来る、と云ふ、眞に教人信の心掛けある者は、斯うなくてはならぬことであります。所が私共は此の反對である、在家の前では話しよいが、僧分の前では話し難い、殊に師匠の前になると、辭

が溢りて思ふ半も語り得ぬと云ふ風情になる。力ある人の前では充分に云へぬと云ふことは單に其の人を畏敬したるが爲のみでない、此の方に何等か不充分の所がある爲に恐気がつくのである。實力ある者であつたならば、決して斯様なことのあるべき筈はない。學生が試験場に入るやうなものであつて、復習が充分出来てをると、難問題を試問せらるゝ程、其れと比例して力が出で、全分の智慧を絞りて之を解決せんとする。反て復習力の不足の者は、簡易な問題の前に立つてさへ始めからびく／＼して、少しの落付きも取れてない。自信のない所の説教に、教人信の力の入る筈はない。されば法敬房が蓮師の御前とか、志ある人の前でする説教程は、づみのあるものはないと申した所に、其の信念の堅固なることが全分現はれてをる。

一體法敬房の説教振りは、何ういふ具合であつたかと云ふと、それにつき第六十條に、「法敬房安心の事をりばかり讚嘆するひとなり、言南無者の釋をば、いつもはづさすひくひとなり、それさへさしよせてまふせと、蓮如上人御控候なり、

ことばすくなに安心の事をりをまふせと、御掟なりと云ふことが記されてある。此のお辭を翫味してみると、法敬房の説教振りは大略想像することが出来ます、即ち經文祖釋に依りて、最も嚴密に宗意の精要を談じ、其の言ひ廻しの如きも、春風長閑に吹き渡ると云ふ風ではなく、寧ろ秋霜烈日の感があつたに相違ない。されば會座の人々は襟を正して聴聞したことであらう。従つて親しみ近づいて胸の奥底を打明け、心のありだけを物語るには、餘りに嚴格であつたかも知れぬ。要するに法敬房には慈父の嚴誡を聞くことが出来ても、悲母の愛語に耳を傾くるやうな味ひは、望みえられなかつたかも知れぬ。志ある者に對して物語ると力があつてよいと云ふた述懐は、確かに此の氣分を顯はしてをります。嚴肅なる法敬房は法義上に就ては、些少の曲つた辯解も許さぬ、尋常の者ならば、それはお互に有り勝ちのことゝ許すことゝ、法敬房は少しの假借も與へぬ。嘗て或人が法敬房に對し、自分の領解を述べて、平常の御化導は斯様／＼に承はり、仰せに對しては一點の疑惑もなく、難有く聴聞致しては居るものゝ、兎角に

油斷不沙汰に流れ、御報謝の御念佛も途切れ勝ちとなり、日々淺間敷き日送りをして居ると申すと、法敬房は、それでは如來聖人の仰せを、一點の疑もなく信じて居るとは申されぬ、如來聖人の仰せには、油斷せよとか不沙汰であれとかと申すやうなことは、一言半句も無い、自分の方で勝手な言譯をつけて、淺間敷き日送りを致し居ると申すやうなことは、實に勿體なきことであると、手厳しく訓誡した、第二百十六條は、即ち此の有人との問答を記したものであります。法敬房から此の手厳しき訓誡を受けた有人の、其時の心持ちは何んなものであつたであらうか。想ふに此の人が彼れ以外の同行知識を訪ねて、今の領解を申述した時に、それを聞ひた者は、孰れもお互に左様でござる、何分にも凡夫の悲しさには、浮世の事や妻子の事に追ひ使はれ、御念佛すらも忘れ勝ちに日送り致して居ると、同感の辭を漏したに相違あるまい、それであるから領解の主も、是が凡夫の氣地であるわいと、腰を下して安心してをつたのであらう。所が法敬房の方では、それでは極樂道中の關門を通して呉れなかつた仰せは覺悟致してをるも、兎角に

油斷不沙汰となつて困りますと、仰せを信じてをる所にて、淨土の聖衆の中に入らんとしたが、是れだけならば關守の法敬も、それならばよいと許したであらうが、兎角に油斷と不沙汰に流れると申添へた爲、それでは信じたのではない、前言は虚言でござると門戸を閉ぢて了ふた。私は前に、法敬房は秋霜烈日の人であると申したが、此の關所の問答は、尤も明白に其の面影を現はしてをる。願ふに今日若し法敬房が来て、私共の領解を批判することゝなつたら、何ういふ結果を來すであらうか、私は仰せの儘を信じて、少しも違背せぬとの返辭の出來る者が幾人あるであらうか、本願は疑はぬ、如來様は難有い、お念佛も尊いと迄は、何人も口幅廣く云へるであらうが、それでは其の仰に毛頭違背して居りはせぬか、假りにも餘佛餘菩薩に心を傾けて居りはせぬか、吉日良辰を選びはせぬか、娘の嫁入りに方角は選ばなかつたか、合性を尋ねなかつたか、或は稻荷の前で息災延命を祈りはしなかつたかと、逐一に追求尋詰さるゝ時は、一心一向にて、何等の餘念も交へてをりませぬと、明白な返事の出來る者が幾人あるで

あらうか難有いとか信するとか稱へるとか云ふことは、單に通り一遍のお世辭に使用するものではない、言行一致にて、其の間に薄紙一つも挿まれてをらぬ者でなくてはならぬ。

それは尤もなることではあるが、爾し世の中はそんなに理窟一遍で通れるものでない、他人が深切に合性を見て呉れると、それを否定することは出来ぬ、人が日が悪いと云ふに、それを顧みずして家を建つことも、又旅に出ることも出来ぬ、所の交際ならば、神信心もせず居られぬ、加之家事用向きに追廻さるゝ悲しさには、お念佛も忘れるが、そんなことをやかましく云はれて居つた時は、世の中が渡れぬと、盗人にも三分の理がある、と云ふ風情にて、種々と辯解する者のみとなりはしまいかと思はるゝ。思ふに、辯解は自分自身の氣休めとはなりもしやうが、それで先方が許して呉れると云ふことは、受合ふことは出来ぬ、油断不汰沙になつて困ると辯解した者を、それは仰せに背いたる所作であつて、誠に勿體ないことであると叱つた法敬房は、決して斯る辯解では、それでよい極

樂參りは必定と許して呉れはしまし。

如何に法敬房と雖も、斯様な批判をするは、餘りに嚴酷過ぎる、そんなことを申してをると、一人も極樂參りの出来る者はないと、不足を云ふ者があるかも知れぬが、爾しそれは法敬房が悪いのでなくして、不足を云ふ者の方が間違つてをるのであります。先づ一つ胸に手を拱いて考へてみるがよい、汽車に乗るとしやう、改札口へ切符を持參することは、能く存じて居るも、旅仕度の世話しさに紛れて、思はず知らず忘れて參つたが、此の汽車に乗遅れては、非常に困るから、是非乗せて頂きたいと申した所で、驛員は、それなら仕方がないでお乗りなさいと許して呉れるであらうか、辯解の客は、無錢乗車をするやうな横着者でないことは、充分分かつてあつても、切符の無い限りは、之を許すことは出来ぬものでない。本願は疑はぬ、念佛は稱へる、慈悲は難有いと云ふのは、乗車切符の入ることは充分存じて居ると申すと同様である、爾し兎角に油断と不沙汰になつてと辯解するは、恰も旅装の世話しさに紛れて、切符を忘れたと云ふと同一であつて、それでは

極樂參りの改札口は通れぬ。されば御詞には油断不沙汰せよとは仰せられてない勿體ないことであると云ふた所の法敬房は少しの無理も云うて居らぬ、それを彼れ此れ云ふのは、云ふ者の方が悪い。

釣針の尖は曲つてをる本は眞直であるが、尖頭が曲つてをる、私共の領解は兎角に釣針のやうな有様をしてをりはせぬか、十の中七八分までは、無二の念佛者で通れるが、残り二三分と云ふ所となる、如來聖人に背きて、三毒の煩惱の味方となる、斯くて折角の求道心が灰色となり、終始一貫の念佛者となることが出来ぬ、寔に淺間敷いことである。世には曲つた釣針を無理に眞直の縫針であると曲解して呉れる者は幾等もあるが、面と向つて、それは縫針でない、釣針であると叱つて呉れる人が無い。宗祖聖人は眞の知識に遇ふことは、かたきが中になほかたしとお嘆きなされたとがあるが、如何にも左様である、寝むる同朋は幾等もあるが、叱る一人の法敬のないことは、實に一大不幸である。何うかお互に此の法敬房にめぐりあひたいことでもあります。

嚴格の人の習ひとして、兎角に己れ以外の者も、自己と同一の典型の中に入れてやうとする傾きがあるもので、自分が禮儀正しくするに、他人が若しそれを亂ると、其の人をば無禮者として叱責するものである。嚴格の人は、兎もすると狭量に流れる、御詞の中に、油断と不沙汰と云ふことはないと迄叱る所の法敬房は、誰れも彼れも我が型に入れねば承知が出来ぬと云ふやうな、狭量なる性格であつたかと云ふと、何うも左様でなかつたやうである。法義に就いては一毛の妥協も許さぬ彼れも、人に對する心掛けとなる、全く正反對にして、己れを責めて人を責めぬと云ふ態度を有して居つたのである。第二百十七條は明かに其の性格を言ひ顯はしてをる。或人が法敬房に對し、貴房は世にも罕なる厚信の方であるに、御宅の尼御は何故に不信心であるか、何うも解せかぬ、不思議である、と申したるに、法敬房は、御不審御尤もと存じ申すが、朝夕御文を拜讀するを聞きながら、それでも信心の頂かれぬ者が、何うして私風情の如き者の申すことを聞入れ申すべきかと、申したと云ふことである、何うも變つた心掛けではないか。

私共は兎角に人を強ふる傾きがあるが、法敬房にはそれが無い、私共は自分が信ずるところである、之でも解からぬか、之でも得心が出来ぬかと、頭押へで服従せしめねば承知が出来ぬが、法敬房はそれをせぬ、信心は如来より賜はるものであり、獲信には宿縁が入る、如来聖人の仰せに耳を傾けぬ者が、自分の如き不徳の者の云ふことを聞く筈はないと、他の不信を責めずして、顧みて自己を反省してをる。嚴格一方の人であると思はる、法敬房は他の一面には此の謙遜と寛容の徳を有してをる、實に見上げたものである。

私共は何うかすると、如来聖人の功を我が物顔に横領する嫌ひがある、一遍の法話に涙を零して歎ぶ者が出来ると、如何にも自分が佛にして遣つたやうな誇りを致したくなる。法敬房は左様でない、家に信者が出来たら、それは朝夕拜讀する御文の御化導の至り届いた爲である、功を如来聖人に奉り、断じて自己の私とせない、既に私とせないから、朝夕御文の御化導を頂きながら、而も難有い身の上となれぬと云ふことは、よくよく宿縁がないのであると悲しんだ。

尋ねた人には、此の心掛けがなかつた、信者は説教者が作り上げるもの、やうに思つてをつた、それゆゑ法敬房程の厚信の者でありながら、何故に我が家の尼御の教化が出来ぬか、他人の前では斯くも難有い方のやうに見ゆるも、或は其の實は左程でもない、それが爲に近い家族の者は、一向に其の教化を信せぬので、はあるまいかとの邪推をして居つたかも知れぬ。斯様な心中にて法敬房を難詰したのであるが、而も夫は全く的をはずれてをつた。私が佛にするのではな、い、如来様がして下さるのである、如来様の金言である所の御文を聴聞しながら、而も難有い身の上となれぬと云ふとは、よくよく宿縁が無いのであると、我が勸むる所を聞かぬと云ふ腹立ちよりも、寧ろ其の無宿善の身の上となることを悲しんだのである。斯くて尋ねた人と、尋ねられた法敬房との間に、千里の差異があつた、眞偽の區別は思はぬ所に現はれ出た、此の答へを聞いた人は、定めし萬斛の冷汗を流したことであらうと思はる。

最後に第二百五十三條は最も明かに法敬房の純信の域に達してをつたこと

を顯はしてをる。法敬房は、たうとむ人より、たうとがる人がたうとひと云うてをる。之にはなかく、深い味ひがある。たうとむ人と、たうとがる人とは、一寸聞いた所では、差したる違ひがないやうに思はるゝが、仕細に吟味すると、此の兩者の上には、大なる相違の點を認むる。たうとむ人は、何うしても賢者振り後世者振る人である。我れ物知顔に稠人廣座の中にて、佛法の事を口幅廣く云ひたがる人である。斯様な人に限りて、佛法を一種の渡世の道具に使はうとする嫌ひがある。而して此事は、蓮如上人を初めとし、其の周圍に集つて御化導を蒙つてをる人々の最も嫌ふた所である。上人は、聖教よみの佛法を申したることは、ない。尼入道のたぐひの、たうとや、ありがたやと云ふのを聞くと、却つて人が信を得ると云はれたことがあり、又佛法は内心にたくはへて、外相は世間通途で渡るがよいとお誠めなされたこともある。従つて山科の教團中では、此のたうとむ人、即ち佛法者振り後世振る者は、ひどく嫌はれたものである。

たうとがる人と云ふのは、此のたうとむ人とは違ふ、口に一句の法文を述べ

ことも出来ぬかも知れぬ、身に殊更に殊勝振る姿も出来ななだかも知れぬ、即ち尼入道の人々がお慈悲の難有さにほれくして、唯何んとなしにお難有いことであると、口に稱名念佛の溢れ出る人である。己れ自ら賢者振る者の眼には、領解の一つも申述ぶることの出来ない者が、何の役に立つものかと貶めるかも知れぬが、而も此の貶めらるゝ者が、却つて本願力に乗托して、淨土往生の目的を達する者であります。總て物事は、何によらず、理窟と説明の附廻つてをる中は、未だ其の妙境に達してをらぬ、眞の妙境には、言説を弄ぶ餘地はない。花を觀むる一つに就いて考へてもわかる、之は善い花ぢや、能く咲いたなどと云うて居る中は、未だく、花觀の妙境に入つてをらぬ、古人が「これはく」とばかり花の吉野山」と云ふた處に、眞の花觀の妙趣が溢れてをる、花と我れと一つになつた所は、これく、の感歎より外はない。子供が過ちをした時、親がそれは善くない、何故に左様なことをするかと叱る間は、其の過ちは未だたいしたものではない、眞に取返しのつかぬ過ちをした時は、是れは又何としたことを爲たかど、千萬無量の感

概を單たる一句の中に攝めて、唯嘆聲を漏すのみである、我と他と一になつた所には、下らぬ言説のほいる餘地はない。

寄席の木戸番は聲を枯らして藝題を説明する中に集まつてをる客人は、其の入神の伎藝に酔うて唯是はくどばかり讚歎する。説明がよいか、讚歎がよいか、私共は説明に耳を傾けぬが、讚歎に引入れられて、我れも一度は入場せんかとの感興の心を惹起す、千百の説明よりも、一言の讚歎の方が異常の力を有するものであります。佛法がそれである、たうとむ人は、何うかすると説明者の木戸番となる、たうとがる人は、確かに讚歎の観客となつてをる、それである、聖教讀みより、聖教讀まずの尼入道の方が、却つて信心の行者を作り上げる、ことゝなる。蓮如上人が法敬房の辭に對し、面白いことを云ふ、尤もなことであると云はれたのは、寔に故あることであります。

要するに法敬房は嚴格と寛容の兩面を備へ、それで己れを責むることは最も嚴重であり、而も亦己れを忘れて佛願に乘托した者であつた。斯様な性行を具

備してをつた爲、他人の後言にも喜んで耳を傾け、懈怠の辯明には一點の妥協を許さず、九十の年迄法義を聞いても、是迄と存じたることが無いと、斷言することが出来たのである。嚴格にして而も妥協心のない者は、兎もすると、たうとむ人の一類になり、易きにも抱はらず、能く其の短處を知悉して、たうとがる人となつた所の如きは、實に見上げた者である。今の世に此の様な信者があるであらうか、此の人こそはと思ふ人も、多くは妥協の心を有し、今一つと云ふ所で、是れも凡夫の習ひであると退却する。木戸番の説明者は、數知れぬ程あるが、讚歎の観客は、其の數實に少い、是では一宗の繁昌を期すると云ふことは、誠に覺束ない。人のことを云ふのではない、私自身が實に此の點に就いて反省しなければならぬ、それなくては、佛祖聖人に申譯がないのみならず、法敬房に對しても合はすべき顔がないことゝなる。

第四九 金森の道西

一。前々住上人、東山を御出候て、何方に御座候とも、人不存候しに、此善あなたこなた尋申されければ、有所にて御目にかゝられ候。一段御迷惑の體にて候つる間、前々住上人にも、さだめて善かなしまれ申べきと思召れ候へば、善ほかと御目にかゝられ、あらありがたや、早佛法はひらけ申べきよと申され候。終に此詞符合候。善は不思議の人なりと、蓮如上人仰られ候し由、上人仰られ候き。(第二〇〇條)

一。善住申され候て、前住上人仰られ候。ある人、善の宿所へ行候處に、履をも脱候はぬに、佛法のこそ申かけられ候。又或人、申され候は、履をさへぬがれ候はぬに、いそぎかやうには何さて仰候ぞと、人申ければ、善申され候は、いづるいきはいるをまたぬ浮世なり。若履をぬがれぬまに、死去候はゞ、いかゞ候べきと申され候。たゞ佛法の事をば、さしいそぎ申べきの由、仰られ候。(第一九八條)

一。金森の善從に、或人申され候。此間さこそ徒然に御入候ひつらんぞ申ければ、善從申され候。我身は、八十にあまるまで、徒然と云ことをしらす。その故は、彌陀の御恩の難有ほごを存じ、和讃聖教等を拜見申候へば、心面白も又たうとさきこそ充滿するゆへに、徒然なることも、更になく候と申され候由に候。(第一九七條)

一。蓮如上人、善從に御かけ字をあそばされて下され候。その後善に御尋れ候、已前書つかはし候物をば、なにさしたるぞ仰られ候。善申され候。表補繪仕候て、箱に入れ置申候由、申され

候。その時、仰られ候。それはわけもなきことをしたるよ、不斷かけてなきて、そのこそく心れななせよと、云ことにてこそあれと仰られしと。(第二八七條)

第二百條に「善ほかと御目にかゝられ」とあるは、善從が不圖お目にかゝつたと申すと。次の第九十八條に「又或人」とあるは、傍らに居合せた者がと云ふとで

あつて、其の次に「上人仰られ候ひき」とあるは、實如上人が左様に申されと申すことである。今回類集したる四ヶ條の中には、此の外に難解の文句はありませぬ。

さて此の類文の中に出てある善從と云ふのは、近江の金森の道西のことであつて、始めは道西と申してをりましたが、老後に善從と改名致したのであります。蓮如上人の御一代のことをお話し申すに就いては、此の善從のことは切り離すことが出来ぬ程、内外に亘つて上人のお世話をお話し申し上げたる厚信なる方でありますけれども、今はそれ等の事をお話し申すのを趣意と致しませぬで、單に此の類集の文面に顯れたる事柄のみに就いて、其の人と爲りを照會致します。

後花園天皇の長祿元年の六月十八日に、存如上人が御往生なされた爲蓮如上

人は四十三歳にて其の後を襲ぎ本願寺第八世の善知識とお成りあそばされた。若年の頃より一宗興隆の大業を爲さんとの志をお懐きなされて居られた。た爲、愈、御當職にお就きなされると共に宗門の面目は茲に一新し既に消えなるとしかけてをつた大谷の法燈も再び其の光輝を増し來り内外人の視聽をひくことゝなりそれが爲に其の昔吉水の禪房に對すると同様の迫害が上人の上に降り來ることゝなつたのであります。

宗祖聖人が立教開宗以後二百數十年を経過し其の間世相の變遷と共に法燈の光も一時は絶えなんとしてをつたことであつた嘗ては念佛停止を申立て、大騒ぎをしたる叡山の大衆も、大谷の光の影闇き爲、殆んど念頭にも留めてをらなんだのが、上人が御襲職以來、日に月に隆盛の兆を顯はし來りたるが爲、憎嫉の焰は再び比叡の峰に上ることゝなり茲に再び大谷本願寺は山門大衆の詮議の種となり遂に寛正六年の正月八日比叡の西塔の大衆は大會を開きて、本願寺破却の件を決議したのである。其時の決議文と云ふのは斯うであります。

右、天台四明之月光耀翻邪向正之空、顯密兩宗之花句、播遮惡持善之苑、爰當寺者、興一向專修之張行、墮三寶誹謗之僻見之間、任上古軌範、可令停廢之條勿論也、就中、號無礙光、建立一宗、勸愚昧之男女、示卑賤之老若之間、在々處處、村里間巷、成群結黨、或燒失佛像經卷、輕蔑神明和光、邪路之振舞、遮眼放逸之惡行、盈耳且佛敵也、且神敵也、爲正法爲國土、不可不誠然、問去年閉籠之時節、可令切斷之處、依門跡御口入、捧陳狀之間、暫閣之畢、雖然、尙以不事止、彌倍增之上者、重犯更難、遁之所也、所詮放公人、犬神人等、可令撤却寺舍之由、衆議僞同而已、西塔院執行代慶純、

正月八日に此の決議があつたと云ふことは、翌九日には早くも大谷の方へ聞へた。それで早速遠近の門信徒へ其の旨を傳へて、本願守護の事を申入れられたのであつたが、其等の人々が出京せぬさきに、早くも翌々日の十日には、山門の衆徒が大谷へ強襲し來り、堂舎を燒拂うて了ふたのであります。此時上人は、幸ひにして近隣の定性寺へ身を隠して、其の難を免がれ給ふたのであります。第二百條に、前々住上人、東山を御出候て何方に御座候とも、人不存候ひしに、此

善あなたこなた尋ね申されければ有る所にて御目にかゝられ候」とあるは其時の事を記されたるものであります。
 ・不慮の災難に僅に身を以て免がれ給ふた上人は、見る影も無き御迷惑であらせられたることは、今より想像することも出来ることであり、其の御有様を拜察したる道西は、「あらありがたや、早佛法はひらけ申すべきよ」と申上げたところである、抑も此の一言の中に道西の人と爲りは、充分活躍してをります。思ふに人は、艱難に生きて安逸に死するものであります、されば天の將に大任を斯人に降さんとするや、先づ其の心身を苦しめるものであると、古人も申してをる。さすがは大局の明のある道西程あつて、敢へて婦女子の悲嘆は申述べぬ、あらありがたや、早佛法はひらけ申すと、恐悦申上げたるとは、何にたる雄々敷き辭でありましたやう、上人は良きお弟子を有たれたるものであります。此の如き鐵石心ある者が、上人の御左右に侍つてをるものでありますから、斯る亂世の中にも、遂に能く一宗興隆の大業が完成出来たものであると窺はれます。

戰亂の中に上人を尋ね當りたる道西は、爾來上人のお傍を離れずして、守護し奉つてをつたことであり、山門の大衆の餘憤が鎮静しかね、上人を求むるとの急なりし爲、遂に自分の在所の金森へお供をして歸り、城郭堅固に築きて山法師に當ることゝしましたるにより、此處にも復一騒動が持ち上りましたが、遂に和議を講ずることとなつて、やうやく一段落がつかしました。それより後間もなく、上人は諸國巡化の途にお上りなされ、殊に北國には久しく足を留め給ひ、其の結果吉崎建立と云ふ新しき事業が企てらるゝことゝなつた。此時も道西は上人のお供をして參つたのであります。
 此の外記録によつて検べてみると、道西は種々と上人の御事業を翼賛申上げてをることであつて、上人に執つては眞に御自分の片腕としておたよりなされてをられたのであります。道西が斯くも己れを忘れて上人をお助け申上げたのみならず、其の一族の者は、擧つて上人の爲に御奉公申上げてをります。御一代記聞書の中に屢出てをる慶聞房龍玄と云ふのは、道西の甥に當り、上人よ

り御所望あつてお召使になつたものである。龍玄も亦道西に劣らぬ厚信者にて、上人の爲には如何なる勞苦も厭はず、骨身を碎いて御奉公申上げた。上人のお子様方に御本書を御教授申上ぐるとは、いつも此の慶間房が承はつてをつた、上人の御葬式の時に調聲の役を勤めたのも此の方である。斯様な譯合で、道西は實に其の御當代の柱石となり、苟くも上人が何等かの御行動を遊ばさる折に當つて、道西がそれにたづさはつてをらぬことはない、と申してもよい程であります。

人には、各一つの癖があり、兎角に其の癖の方では、身も心も入れ易いが、其の他の事となる、なかく、氣の向きかぬるものであります。道西の如く上人の内外に亘つて御相談の相手となつてをる者は、悉くして宗門興隆の大事業と云ふやうな方へ心を専注し、自然御法義の方が、愈略に流れ易いものであります。然るに道西に限りては、断じて左様なことがない、宗門の一大事にたづさはつて、寸時も心の安まる暇のないにも拘はらず、我が往生の一大事に就いては、いさゝか

も油断をしてをらぬ、いつも頭燃を拂ふが如き心掛けにて、御法義に心を濺いだのであります。次の物語は、明かに其の事實を證明してをります。

或時同行が道西の許を訪ねて、御法義のお話を承はりたいと申出たことがあつた。道西はそれは結構なことである、幾等でもお話し申さんと、快く承知しましたので、同行はそれは難有いことである、とて直に草鞋の紐を解きて、座敷へあがらんとしかくると、道西はそれをも待たず、はや御話を始めかけた。すると傍らに居合せた者が、そんなに性急なことをなさらずとも、座敷へ上がられてから、ゆる／＼お話しなさればよいではないかと申したるに、道西は向き直つて、それはよろしくござらぬ、かねてお互に承知の通り、人の身は出づる息は入るを待たぬが、浮世の習ひである、されば若し此の方が草鞋を脱がぬ間にも、無常の嵐にさはれ給ふやうなことがあると、折角遙々訪ね來られたながら、一句の法文も物語らずして、未來永劫相別れねばならぬことゝなる、それでは實に遺憾のことゝなる、されば御法義のことは、さしいそぎて申さねばならぬ、又聞きもせねば

ならぬことである、と申述べたこのことである。

出る息は入るを待たぬと云ふことは、誰でも口にすることではあるが、爾し道西の如く其事を切實に感じてをる者は幾人あるであらうか。草鞋を脱いで座敷に上る間さへも待てぬと云ふ所に、道西の平常の心掛けがあり、と思はる。蓮如上人は常々、佛法には明日ありと思ふべからず、佛法の事は明日の事を今日に引き上げよと仰せられたるのみならず、其の今日といふ日さへも、有ると油断してはならぬ、即時只今が聴聞の時刻である、と迄御誠めなされたことがある。此の御化導を耳にしてをる道西は、何うして延びくしたことを好むものか、今聴かねばならぬ、今承はりて出離の一大事を安心せねばならぬと、頭燃を拂ふが如き有様にて、道を聞き、法義を説いたものであります。斯くありてこそ、上人の明日ありと思ふべからずとの御教誨を、我が身一人の爲の御化導と頂いた者と申すべきある。

道西は上人の仰せとあらば、如何なることにてても素直に承はり、些少も疑惑

を懐かなんだのである、それにつき金森日記に次のやうなことが記してある。

道西、金森の道場のくづやぶきをかえられ候ひけるとき、上様わらを御取次候。

道西うけとりておしいたゞき、上様御取次候。まゝにて、くずやぶきにならば

られ候。善知識の遊ばされ候。御ことは、佛法にかぎらず、畏まり申されける。

くずやぶきのわら、あなたこなたと、しだれてありけるを、今の世迄も、蓮如ぶき

と申ならひあへり。

善知識の遊ばされ候。御事は、佛法の事にかぎらず、畏まり申されけるとは、實に

殊勝の心掛けではありませんか。道西の道の友の道宗は、善知識の仰せとあら

ば、近江の湖でも埋めると申したことがある、師を信すること此の如くでなけ

れば、其の仰せが眞受けに出来るものでない。此の點に就いては、私共は實に

慚死しなければならぬことであります。

道西は應永六年の誕生にして、長享二年八月二十五日九十歳にて往生した、上人の御往生にさきだつこと十一ヶ年である、随分長命した方である。それにつ

き思ふとがある。人間既に古稀の坂を越ゆると、浮世の事は多くは子孫に委ねて閑散の身となる。さて斯うなつて來ると、閑散で困つて却つて種々の愚痴も出で、家族の者にも嫌はれるやうになり勝ちの者である。道西とても同じ人間である。此の有様にて其の老後を過ぐしたかと申すと、なか／＼さうではなかつたのである。嘗て或人が道西に對し、御老人のとなれば、定めし毎日徒然でお困りのことでありましやうと申したるに、道西は、自分は此の八十餘歳の今日に至る迄只の一日も徒然で困ると申す日はありません。何分にも彌陀の御恩の程を思ひ、又御和讃を始め、其の他の御聖教を拜見致してをると、心面白くて徒然などと思ふたとは、少しもござらぬと申したと云ふことである。斯く迄御法義が歡ばれてみると、假令此の身は苦惱の娑婆に在つても、心は既に淨土に住み遊んでゐるのであります。

小人閑居して不善を爲すと云ふことがあつて、閑散は兎角に人に善い事を思はさぬものである。何も爲すしてばんやりしてをることは、決して善いことで

はありませぬ。さればとて、年を取つては若い時のやうなことも出来ぬ。多くは家に居座はつて、家族の者の小言が云ひたくなるものである。お互に此の點は深く注意しなければならぬ。道西は善い手本である。八十の坂を越えても、彌陀の御恩を思ひ、御聖教に親んで居ると、少しも徒然なことが無いと申した。平常の聽聞は茲に顯はれて來るのであります。人生は老少不定とは云ふものゝ、一年でも年を取れば、それだけ死ぬ日が近づいて來たことは事實であります。されば心に眞實の信心が頂かれてをると、それだけお淨土參りが近寄つて來たと申してもよい。淨土が近寄り、佛の光が身に加はつて來るとすると、何んしても地獄や鬼の姿は顯はれて來る筈はない。従つて眞の念佛者である以上は、一年に人にたうとがられ、人に慕はれねばならぬことでもあります。年が寄れば寄る程、孫子に嫌はれると云ふのは、心に眞實の信心が頂かれてをらぬからのことでもあります。されば私共は我が年を顧みて、道西の老後の嗜みの程を、一倍に深く學ばなければならぬことであります。

嘗て上人が道西に對し、御染筆の軸物を下されたることがあつた。一日上人は道西に對し先日與へた掛物は何うしたかとお尋ねなると、道西は表装致し箱に納めて大切に保存致しをりますと申上げた。上人は、それはわけもないことをする、不斷掛けおき、それを觀めて我が心を直さねばならぬと仰せられた。上人の御化導は斯様な所まで、お氣を配つてをられる、一紙の筆の跡にも、如來の御慈悲が含まれてをるのであります、道西はよい善知識に値遇し奉つたものである。掛物を觀めて心をなせとの仰せを蒙りたる道西は、定めし其の老後には、我が居間の床に向ひ、あゝ上人が斯う迄して、此の道西を淨土へお導き下さるのであると、老の眼に涙を浮べて歎んだことであらうと想はる。善き師匠と善き弟子との間には、床の軸物に迄如來様の光明が輝き渡るのであります。長録四年の夏の六月、上人は道西の爲に、正信偈大意を御製作あそばされて、之を下賜せられ、越えて寛正二年に始めて御文の御製作をあそばされて、之を道西に下し賜はる、帖外第一卷の初通はそれでありませう。道西死して茲に四百有

餘年、私共は道西が上人より頂きし軸物は拜見することは出来ぬが、而し前上の二聖教は今も正しく机邊に供へて、日夕拜讀するの光榮を有してをることでありませう。善き人は其の死後迄も善き徳を遺して呉れる。道西の懇願によりて出来上りたる御聖教は、今も幾多の人々を勸化して、信仰の門に入らしめ下さるのであります。されば私共は此等の御聖教を拜見する毎に、道西の遺徳を偲ばずには居られませぬのみならず、何うかして此の老信者の如き、芽出度き日送り致したいと、日夜切望してをることでありませう。

第五〇 勸修寺の道徳

一。勸修寺村の道徳、明應二年正月一日に、御前へまいりたるに、蓮如上人、おほせられさふらふ。道徳はいくつになるぞ、道徳、念佛まふさるべし。自力の念佛さいふは、念佛おほくまふして、佛にまいらせ、このまふしたる功徳にて、佛のたすけたまはんするやうにおもふて、さなるなり。他力さいふは、彌陀をたのむ一念のおこるさま、やがて御たすけにあづかるなり。そのうち念佛まふすは、御たすけありたる、ありがたさく、おもふこゝろをよるこびて、南無阿彌陀佛に自力をくはへざるこゝろなり。されば他力さいふ、他の力さいふこゝろなり。この一念、臨終までさほりて、往生するなりき、おほせさふらふなり。(第一條)

京都の七條驛から列車に乗りて東行すると、稻荷驛を過ぎて次は山科驛となる。驛は山城國宇治郡山科村大字勸修寺に在る。驛を距ること僅かに數町にして、名高い勸修寺と云ふ宮門跡の寺があり、其の附近に大谷派末寺の西念寺と云ふのがある。之が即ち此の第一條に出てをる道徳の寺である。道徳は法名であつて、俗名は中村源六郎と云ふ、永享六年に誕生し、明應九年に行年八十歳にて往生した。されば蓮如上人とは六つの年下でありました。

上人は文明十年に河内の出口より山科へお移りとなり、明應五年まで十有九年間、其處に御在住なされました。此の間山科を中心として、都鄙の人々は我もくんと上人の膝下に詣で、甘露の法雨に浴したことでありました。道徳も其の中の一入であります。さて明應二年正月と申すと、上人は七十九歳の春を迎へられたる時である。年頭の御禮に參上したる道徳は七十四歳であつた。古稀の坂を越えられた師匠と弟子の物語りは、何んであつたらう、浮世の話か、老ひの繰言か、さうではなかつた。老上人は先づ口を開き、道徳そなたは幾つになつたか、老少不定とは云ふものゝ、お互に此の年となるも、もう浮世の人間ではないで、何より先づお念佛が大切である、それを忘れぬやうにしなければならぬ、さればとて唯單に南無阿彌陀佛くと申したとて所詮が無い、よくく此のお念佛の味ひを知らねばならぬ。抑も此の念佛に自力と他力との區別があるから、先づ其の事を篤と承知しなければならぬ、今それを教へてやるで、能く會得するがよいとて、それより御懇切なる御法話が始まつた。

上人の仰せらるゝやうは、自力の念佛といふは念佛を數多く稱へ其の稱へたる功德を佛の方へ廻向し、それによつて往生成佛させて戴かうとするのであるが、之に反して他力の念佛と申すは、我等凡夫が彌陀をたのむ一念に佛の御助けに預り、此の一念發起の後に申す念佛は、既に往生一定の身となりたるありがたさをば、聲に出して南無阿彌陀佛と稱へ奉り、些少もさきの自力の念佛の如き、己れが稱へたる功德を佛に廻向し奉らんと思ふ考へを交へざるなり。それであるから、他力と云ふことは他の御力と云ふこととなり、お互の今度の往生は全く阿彌陀如来の願力の御不思議によるのである。抑も此の一念が臨終の夕べまで相續して、毛頭も變ることなくば、我等は間違なく往生を遂ぐるなりと、御懇に御教誨あそばされた。年頭の御禮に參上したる道徳は、元日早々思ひがけなき御化導を蒙り、老の眼に歡喜の涙を浮べて御前を退出しました。

抑も此の元旦の法話があつた明應元年頃の世の中の有様は、何んなものであつたかと云ふに、此の時分は應仁の大亂の後の餘炎が未だ治まらずして、世の中

には矢叫びの聲が絶えて居らぬ、現に明應元年の前年即ち延徳三年には、將軍義植が畠山政長細川政元赤松政則の諸將を率ゐて、江州の佐々木高頼の征伐に出かけ、三井寺の光淨院に本陣を布き、甲賀愛知川の邊にては劇しき戦鬪が交へられた。此の戦争は延徳三年の八月から明應元年の冬の十一月まで續き、京の町は將軍家が留守である爲に盜賊が横行し、人々は一日も其の堵に安んずることが出来ませなんだ。所が其の年の十月に義植が江州征伐から凱旋した爲に、二年の正月は先づ安らかに三ヶ日のお祝ひをすることが出来たが、二月になると義植は再び河内の畠山義豊の征伐の爲に出陣しました。所が其の留守中に細川政元が謀反して、義澄を奉じて將軍とし、義植及政長等を討伐し、其の爲に義植は遂に越中に奔ると云ふやうな大騒亂を生じたのであります。斯る有様なれば、京を中心として近畿地方には戦亂の絶ゆる時がありません。斯る有様なれば、山科と云へば京と相距ること里餘にして、殆んど目と鼻との間である従つて戦亂の動搖は此の土地にも波及し、寸時の安靜を保たしめませなんだ。然るに

其の中に在りて、上人は浮世の風は何處に吹くかと云ふ、鹽梅にて、少しも相關することなく、元旦の御禮に參上したる道徳に對し、懇篤に自力他力の念佛の區別をお話しがあつたのであります。思ふに今の世の中の幾萬の僧分の中に能く此の上人の御心掛けの程が味はれる者が、幾人あるであらうか、又今の幾十萬の門信徒の中にて、道徳の如き心掛けにて、聞法の好縁を歡ぶものが、幾人あるであらうか。

私共宗門のお流れを汲んでをる者には、元旦の祝賀は今も昔に變らず行はれてをる新春を迎へてお芽出度の辭は、我と人との間に言ひ換はされてをるが、此の言ひ換はしの間に、上人と道徳との間に於けるが如き念佛の馨りがあるか、今年の正月に幾百千の寺の中にて、何れ程お念佛の物語りがあつたであらうか、歐洲の大亂は千百里も相隔つて居る所のとである、而もそれが先づ第一に話頭に上り、獨逸が強いとか、何時頃平和になるであらうとか、他人の病氣を苦しめて、我が心の難治の病源に就いては、少しも之を苦慮せず、折角佛前に詣でなが

ら、戦さ話して別れて了うて居りはしないか、若し斯様の次第であつたならば、弟子共に極樂には往生せずして、空しく地獄に墮在しなければならぬことゝなる。蓮如上人は、目前の京の町の戦亂にも、戦のたの字も仰せられずして、道徳いくつになるぞ、道徳念佛申さるべしと、御物語りなされてをる、此の熱烈なる護法の赤心が、やがて中興の大業を完成せしめられたのであります。

浄土眞宗は念佛の宗旨であり、信心の宗旨である、是を疎外しては眞宗の眞面目は無くなつて了ふ。然るに宗門に流を汲める身でありながら、何うかすると、是を忘れて、浮世の問題の爲に、心身を勞するものがまゝある、或者は學問にかぶれ、或者は事業にかぶれ、或者は生活にかぶれ、肝心の念佛とか信心とか云ふとは、棚に上げて了うて居る、甚だしきに至りては、元旦早々から念佛などは、縁起でもない、と云ふやうな誤れる考へを、懐かぬ者が、ないでも無い、是では何うしても、一宗の興隆を期することは出来ない。私共は、末に走りてはならぬ、其の本に立ち返り、我が信心や如何、人の信心や如何と、晝夜に其事を焦慮しなければなら

ぬ。信心と念佛是が賤ち一宗の源泉である。學問も事業も是から流れ出でたるものでなくては、決して本物でない。上人が道徳に仰せられたる念佛の本義は、誠に簡潔明瞭である。稱へた力をたよりにするのは、總て是れ自力であり、御助けに預ることのうれしさに感動せられて、溢れ出づる報謝の念佛が他力であると仰せらる。誠に稱ふるは未であつて、感動は本である。即ち茲に信心の本體が生じ來るのである。私共は此の點に就いても深く注意しなければならぬ。口に念佛さへ稱へてをれば、我が宗門の門信徒であると思つて居つたならば、大なる失敗をしなければならぬことゝなる。信ずると云ふ根本義が確立しなければ、眞の念佛の効驗に浴することは出来ない。信ずる者は疑はぬ疑はぬ者は他の誘惑を受けても、少しも動くことがない。即ち金剛堅固である。此の金剛心が即ち自己の往生成佛の一大事を成功せしむるのみならず、進んで一宗の繁昌を助長せしめ、眞につけ俗につけ、我が大谷の法燈をして、益々光輝あらしむるのであります。

私共の一生は誠に不安至極のものである。今日の生命が明日屹度あるかと尋ねられたる時に、それは間違ひなく屹度あると返事の出來る者が幾人あるであらうか。尤も世の中には、盲目蛇に恐れず、明日や明後日は屹度あると申す者もあるかも知れぬが、爾しそれは一種の想像であつて、決して確定したる解答では無い。生れ出でたる時に附與せられたる生命は、自分が選出して來たものではない。何かなしに與へられたるものである。それが何年何十年持續するかは、當の本人は一向知らず、機縁が盡きると、歩きながらでも去つて了ふ宵に眠ると共に朝に眼があかずして、其儘に命終する者も幾等もある。一度此の命終の場合となる時、智者も學者も其の智と其の學とを些少も役立てることは出來ぬ。川水の下へくと流れ去る如く、たゞ何かなしに流れ去つて行かねばならぬ。

念佛の教は、此の流れて行く先きの指導となるものである。又暗夜に燈火を興へるが如きものである。私共は晝の次には夜が來る爲、豫め燈火の用意を致しおくのである。されば今生の次には來世が來る、それに對する用意をせぬと云

ふことは、何うしても腑に落ちぬことであります。念佛が陰氣であるとか、縁起でもないとか云ふ者は、夜の燈火の用意などは、爲なくともよいと云ふと同一であつて、是れ程愚かな云ひ分はない。蓮如上人が元旦早々から念佛の御物語りをなされたことは、誠に道理至極のことである。上人と同時代に一休禪師があつた禪師は元旦に禪體を持出して御用心／＼と云うて、町の中を往來せられたと申すことがある。是は實に面白い生きた説教である。禪師は晝であるとして油断すな、今に夜が来るぞと警告せられたのであり、蓮如上人は道德に對して夜の燈火は確かに用意出來てをるか、と注意を促されたものである。一つは自力宗の大覺者であり、他は他力宗の極致を極め給へる方である。而も兩者の御教化が異曲同調であることは、寔に驚嘆すべきことであります。

兎も角もお互に眞宗の大本に立ち返りて、眞の念佛者とならねばならぬ。一年の計は元旦に在りとの辭もあることなれば、是非共に來年の正月の元旦より、上人の仰せに従うて、お念佛の物語りにて其の年の幸先を祝福しやうではな

いか。明應元年の元旦の山科の好景が全國津々浦々の寺院にて現出せられたならば、祖師聖人の御往生後六百五十有餘年経過したる今日に、再び御在世の古へに復り活々したる眞宗の繁昌を見ることが出来るに相違ない。加之元旦より大晦日に至る迄念佛の一條にて繋がれたる家庭の中には、惡魔が相互の間を疏隔する慮はない。従つて未來の燈火の用意のみと思ふた念佛は、其儘に現在の晝の中にも役立つこととなる。電氣は夜の明かりのみと思つて居つたに、其の動力は晝も働いて、大きな器械を運轉して呉れる。現在の生活も未來の生活も、一つの念佛に依りて圓滿に解決することが出来るのである。されば此の念佛の一法程世の中に芽出度き難有きものは又とありませぬ。

眞宗講話 完

大正六年五月一日印刷
大正六年五月五日發行

定價金貳圓
郵稅金拾貳錢

著者

河崎顯了

發行者兼
印刷所

西村七兵衛



印刷所

弘文社

發行所

京都市東六條
播磨穴阪一七〇四番
電話五四五八番

法藏館

京都市下京區中津區町島元東入二十八番町三三番戸

京都市下京區北小路區町西八井町五九番戸

最新刊

佛の手乎鬼の手乎

本書は、日常吾人の家庭内に現出する實際問題に關し、横説縦談したる生ける事實談なり、從つて談に宗教あり、倫理あり、人に老少あり、男女あり、收むる所の説話は皆是れ自家の脚下に横はれるものゝみなれば、何人も之を手にするときは、確かに好箇の相談相手を得たるの感あるべし。

家庭講話叢書第一編
定價金五拾五錢
郵税金八錢

新版

正信偈新釋

本書は、初めに先づ偈文の文意を詳釋し、次に要義を擧げて深切なる講話を試みたり。故に假令佛教専門の知識を有せざる者と雖も、苟くも多少の文字を解する力ある者ならば、婦女子と雖も是れを一讀すると共に、直に本偈の眞意を諒解し、無上の法悦に浴することを得べし。

聖典新釋叢書第一編
定價金六拾錢
郵税金八錢

版三

求道夜話

本書は一求道者が(一)倫理以外に宗教を要する所以(二)未來世なるものは確かに在るか(三)靈魂とは何んぞや(四)淨土存在の證明(五)佛道に於ては如何なることを修行するやとの五箇條の質疑を擧げて尋ねたる者に對し、最も明快深切なる解答を與へたるものなり。

定價金拾錢
郵税金貳錢

發行所 法藏館 京都 都大路下 東七區 六〇五 四八番

版四

譬喻聖話

大藏經中の譬喻は、譬喻即一大教訓の講演となり、是を聴く者をして、直に幽玄微妙の佛教の哲理を諒解せしむるの妙趣あり。本書は八萬四千の法藏中より、其の最も異彩を放てる譬喻説法五十題を撰擇し、是れを明快流暢なる時文に和譯し、附するに著者の心眼に映じたる感想を以てす。されば之れを繙くときは、さながらに靈山會上に在つて、世尊金口の説法を聴くの感あり。

定價金參拾五錢
郵税金六錢

版三

因緣聖話

大藏經中の因緣説法は、因果必然の大則を示し給ひ、話題は悉く孝悌友愛にして、是れを熟讀するときは、大聖世尊の過去世の修行を知ると共に、又他の一面に於て、抑も菩薩の大行とは、如何なるものなるかと云ふことを知るを得、されば世の所謂因緣談とは全く其趣きを異にす。加ふるに著者一流の評釋は、生氣潑瀾として、各題をして悉く此の人生上に意義あらしめたり。

定價金參拾五錢
郵税金六錢

版四

新百喻經

むつかしき理窟もなければ、肩の凝る論議も無く、おもしろおかしき説話の中に、幽玄深遠の眞理を説き、之れを手にする者をして、不知不識の間に、處世と信仰の上に絶好の指導を得せしむるものは、實に本書の特色也。

定價金拾六錢
郵税金不川

發行所 法藏館 京都 都大路下 東七區 六〇五 四八番

五版 家庭説教

定價 金參拾錢
郵税 不用

私共が人生の荒波を渡り、圓滿なる家庭を作らんとするには、是非共宗教的の指導を必要とすることを、人生と宗教、無宗教的生活と宗教的生活、親鸞聖人の家庭、トハストイの無宗教者のひぐらし等の題下に説述せらる、孰れも皆實地布教の結晶體であります。

三版 續家庭説教

定價 金參拾錢
郵税 不用

本書は筆を人道と佛道との區別に起し、進んで報佛の實在を論じ、淨土の樂境を説き、心光照護を談じ、斯くて其の法徳に依つて、快樂安穩の家庭を實現せしめんと企圖したるものである。言々皆是れ實驗の聲にして、句々悉く實地の陶冶を経たるが故に、世の所謂机上の空談とは、全く其の撰を異にす。

二版 一日一談

定價 金拾五錢
郵税 金貳錢

全編百章、人生及宗教の當面の問題に對し、最も大膽にして且つ赤裸々なる痛評を試みたるもの也。各編孰れも寸鐵殺人底の活文字を以て満たされ、讀者をして嚴寒に額に汗せしむることあり。

發行所 法藏館 京都 都大路下 電話 七〇五 東區 四八 條番

青年講話叢書は、先生が、世の(一)中正穩健の青年の氣象を振興せんが爲には、如何なる書を読ましむべきか(二)堅實なる家庭の基礎を作らんとするには、如何なる書を読むべきか(三)宗教的見地に立ちて、現實の人生問題を解決せんとするには、如何なる書を読むべきか。この疑問に對し、其の解答書として執筆せられたるもの也、全部拾編を以て完結す。今や逐次刊行して第七編に至れり、書目及び解説左の如し。

第一編 果報と分限

定價 金拾八錢
郵税 金貳錢

人は何かと云ふと、果報者とか、又果報が悪いとかと云ふが、而も何に果報であるかと反問すると、此れ是れである、明白に答ふことが出来ぬ。分限も亦其通りである。世に果報と分限と云ふ辭程多分に使用せられながら、而も其の意味の不明なるものは無い。本編は此の二大問題に對し、最も詳細に其の性質を説き、且つ痛快なる斷案を下したるものである。

第二編 運命と境遇

定價 金拾八錢
郵税 金貳錢

世の中の人は、己れの知慧で解せられぬ事に出遇ふと、忽ち運が善いとか、悪いとかと談じ、一切の責任を其の中に葬つて了ふ傾きがある。而して其の運命とは何にかと尋ねると、一向に明白なる解答が出来ぬ。又人は、自分の力の足らぬことを忘れて、何にかと云ふと、境遇の罪であると辯解して、其の中に逃げ込んで了ふのであるが、是は實に卑屈なる振舞ひと申さねばならぬ。一體運命とは何物であるか、又境遇には如何程の力を有してをるか。本編は此の二大問題に對し、最も明快痛切なる解答を與へたり。

發行所 法藏館 京都 都大路下 電話 七〇五 東區 四八 條番

第三編

先帝と佛心

明治天皇陛下の御在世の頃、如何なる大御心を以て、我等臣民を慈み給ひしか、又我等臣民は先帝陛下より蒙りし御高恩に對し、如何なる奉公の實を盡して御奉答申上ぐべきか。是等の問題に對し、赤子の微衷を披瀝し、眞宗信徒の報恩行を最も詳細丁寧に解説したるものは本編である。

定價金 拾八錢
郵税金 貳錢

第四編

入信の關門

信仰の前途に當りて幾多の關門があり、それが開けない限りは、幾等もがいても絶對他力の信仰の天地に出づることは出来ぬ。本編は此の煩悶に悩める一青年求道者が、泣いて其の指導を求めたるに對し、懇ろに其の關門と且つ其の門戸を開くべき鍵を與へたるものである。

定價金 拾八錢
郵税金 貳錢

第五編

青年の進路

是れから實際の社會へ踏み出さうとする青年の前途には、幾多の難關があり、此れを踏破しなければ人生の樂境に到るとは出来ぬ。而して道は、獨り行く道と人と行く道との二條があり、孰れも險難にして、一步を踏み誤れば、直に千丈の深谷に陥り、長へに世の劣敗者となつて惨死を遂ぐる事となる。本編は此の兩道に於ける大炬となつて道途を照らし、案内者となつて安全の行路を辿らしむるの使命を盡す。

定價金 拾八錢
郵税金 貳錢

第六編

偉人の行蹟

山岡鐵舟居士は、明治聖代の一大偉人である、勝海舟は居士を評して、明治の大久保彦左衛門と云ひ、西郷南洲は、山岡さんは、金錢も名譽も生命迄も入らぬと云ふ、實に始末に終へぬ人であると讚歎した。本編は此の偉人を縦横に評論し、殊に其の修身二十則に就いては、微を穿ち細を窮めて、一言一句を漏らすことなく解説し、現代の時弊に對して一大反省を促したるものである。

定價金 拾八錢
郵税金 四錢

第七編

店主と店員

昔の店員はよかつたが、今の者はなかく、使ひ難い。昔は良主人が幾等もあつたが、今は唯追ひ使ふのみで、眞に我が身を引立て、呉れる主人が無い。是等の嘆聲は都市の大商店に於て、隨處耳にする所の聲である。是れは店主が悪いのか、將た店員が悪い爲であるか。孰れにしても、是非に攻究しなければならぬ、重要な社會問題である。本編は此の問題に對し、最も大膽に且つ赤裸々に、深切周到なる解決を與へたり。

定價金 拾八錢
郵税金 四錢

第八編

人生と幸福

人生の幸福は是れを求むることの難きのみならず、是れを守りて後世子孫に傳ふる事も亦最大難事なり。見よ一代の英雄豊太閤の如きも僅かに二代にて亡び、平相國の如きも一族悉く檀の浦にて滅亡せり。さればとて徳川家康は是れを十數代の後に傳へたり。亡ぶも傳ふるも、其間一道の規道あり。之れに順ふ者は榮え、之れに背く者は滅亡す。本書は古往今來の各種の人物につき、其の興亡の跡を尋ねて、最も詳細に幸福享受の法を説明したるものなり。

近刊 定價金 拾八錢
郵税金 貳錢

324
524

終